

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その一)

NHKの朝ドラ「あさが来た」は、4月2日、大好評のうちに終了する。そんな中、小道具で要所要所、大事な役を勤めたのが播州そろばんだった。

夫、新次郎があさに贈った赤いそろばんは「パチパチはん」と呼ぶそう。これはドラマのために播州そろばんの「ダイイチ」の職人さんが作ったものだそう。

播州そろばんが小道具の主演  
NHK 朝ドラの「パチパチはん」



そろばん組立体験工房が設けられる伝統産業会館。右下は、朝ドラにちなむダイイチの商品

うだ。「杵を鮮やかな赤色にしてほしい」との注文で、梅の木の特別な部材で工夫したとか。播州そろばんは数年前、映画「武士の家計簿」にも出演したから、なかなかの役者だ。

さて、播州そろばんのルーツは大津そろばんだとの伝承が気になって、大津

市歴史博物館で開かれていた企画展「大津算盤をつくった人々」を見学してきた。残念ながらさきの伝承を裏付ける史料、資料はなかった。

ただ、大津算盤の始祖、片岡庄兵衛が1612年、長崎に行き、そこで入手した中国・明国製算盤を持ち帰った。その算盤が展示されており、「大津算盤をはじめ、播州算盤など日本算盤史は、まさにこの二つの算盤から始まった」という解説文は興味深かった。

朝ドラにちなみ「赤いそろばん」とホルダーを商品化しているが、なかなかの人気という。「そろばんづくりを体験したい」との希望もあるそうだ。

市は今年度の新規事業として、播州そろばん、播州刃物などを次世代になぐための事業に取り組む。その一環でそろばん組立体験工房や拠点整備を伝統産業会館で行う。これらの事業で伝統産業に新しい「あさが来た」と言える日が来ることを願いたい。

「おの歴史散歩」の連載は平成22年9月にスタート。5年半にわたり、通算60回を超えた。さすがにネタも体力も尽きかけている。今年度は紙面を半分にし、気軽な読み物とした。引き続き「愛読のほ」と。



ふるさと伝え語り

市内で伝えられてきた民話などを紹介

車坂のきつね(万勝寺町)

Vol.1

万勝寺から桃坂にくだるところに急な坂があつて、それを車坂といひます。

屋なお暗く樹木のうっそうと茂つたこの坂には、きつねがすんでいて、いつ昔から村びとたちはおそれていました。

わしのばあさんが若いころ保木(三木市口吉川)へいっておそくなり、それを弟の虎やんがむかえにいきました。二人は桃坂で落ちあい、車坂を越えかけた頃にはどっぷりと夜の闇があたりを包んでいました。日ごろ力じまんの虎やんも、だんだんと口数が少なくなつて、ただ、いそぎ気味の二人の足音だけがひたひたと聞こえます。

坂の中腹の石切場にさしかかつたとき、いきなり右手の木かげでガサガサザーとものごい音がしました。すると、前を歩いていた虎やんはそこへ、へなへなとしゃがみこんでしまいました。けれども、ばあさんはあいかわらずトットコトットコ進んでいきます。とり残された虎やんがなえた足をひきずつて追いつくとばあさんは

「ナムアピラウンケン ナムアピラウンケン」としきりに口の中でお唱えしているの

です。

坂がつきて村の灯がみえはじめ、やつと人ごちをとりもどした虎やんがいました。

「姉やん、おまえはえらいもんやのう。」  
「なんでや。」

「あのえらい音がすんのに、ようまあ、こわがらんで歩きつづけたのう。」

「虎やん、おまえしつかりしいや。名前が泣くで。そや、ええこと教えたるか。」

足をとめて一息いれながら、ばあさんが弟にいいました。

「夜道がおそろしかったら、戌亥子・丑と小指から順番に指を折って最後に『寅』といつて親指でほかの指を上から押さえるんや。」

このことはどんなけだものが出ようとも、百獣の王である寅(虎)が上から押さえてにらんでいるから、ちつとも怖くないという意味なのです。

石切場のものは、きつねのしわざであつたと伝えられています。

「ふるさと伝え語り」小野の歴史を知る会編(小野市文化連盟)は、好古館、コミセンおので販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話 (その二)

「番組が終わったのに、いつまで『あさが来た』で引つ張るんや」とのお叱りを覚悟して、もう一度朝ドラがらみの話をどうしても書きたい。それは我が故郷、富山県高岡市とかかわるからだ。

ドラマ最終盤で小野藩最後の殿様、一柳末徳の次男坊、一柳恵三をモデルにし

一柳家と越中高岡の意外なつながり  
恵三の妹、智恵子が筏井家に嫁ぐ



〔小野藩史蹟碑〕の裏に立つ〔芳名録〕碑にある「筏井千恵子」の名前(右から4人目)＝西本町の磐代神社境内で

た東柳啓介が、主人公あさ(広岡浅子)の娘婿になる好青年の帝大生で登場した。この恵三の妹になる智恵子(末徳の四女、1888～1966)が高岡有数の実業家、筏井寿夫に嫁いでいるのだ。

今般、好古館がひざ元の磐代神社境内で「筏井千恵子」(智恵子)の名前を

見つけてくれた。高岡から遠く離れた小野の地で郷里の名家の名前を見るとはびつくりばんだ。

智恵子の名前は、1937年に建てられた「小野藩史蹟碑」の裏に立つ賛助金の「芳名録」碑にある。小野藩創始三百年祭事業に寄付した人々の名前を刻んだものだ。ちなみに智恵子は壹百円を寄付している。

さて、筏井家のことだ。私の高校の先輩で、元高岡市立中央図書館長・太田久夫さん教示の資料によれば、寿夫は1883年生まれだ。寿夫の祖父、甚造は1886年、日本海側有数の港だった高岡・伏木港を拠点に「越中汽船」を興す。(88年に「中越汽船」に社名変更)

寿夫は中越汽船の社長を受け継いだほか、東亜エナメル取締役や伏木製紙の監査役なども務めている。東亜エナメルは神戸市で1917年に創業された会社で、寿夫・智恵子夫妻は神戸に住んだこともあるようだ。

小野藩主一柳家の名のもとに、嫁ぎ先からも先祖の祭典に寄付した智恵子の配慮を知り、うれしいことだった。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者、平成22年7月から小野市学術政策員。



ふるさと伝え語り  
五助ぎつね (日吉町)

市内で伝えられてきた民話などを紹介

そのむかし島谷に、「五助ぎつね」とよばれる年老いたきつねが、すんでいたということ。島谷というのは、神戸電鉄小野駅から東へ4キロほど入った今の日吉町のあたりで、現在では小野東洋ゴルフ場が誘致され、大開町に通じる広い道路ができるなど、むかしとはずい分と様変わりをしてきました。

しかし、「島谷」というのは、狭谷(狭い谷)の意か、或いは杣谷(材木にするための木を植えた山あい)の意に出たる命名ならんか(「加東郡誌」ともいわれるように、山と山とのほさまに細長く広がった集落で、今もなお自然の息づく静かな里なのです。町のはずれの道路沿いに、玉垣に囲まれた稲荷神社があつて、いつも洗米と新しい榊の木が供えられ、今も地域の人びとからうやまわれ、大切にお祀りされているのです。

村の年寄りによると、そのむかし、この稲荷に仕える一匹のきつねがおりました。名前は「五助ぎつね」といって、六百年あまりもこの地にすみつき、

しつぽの先までまっ白い大きなきつねだったといひます。

このきつねは、きつね仲間の間にも信望が厚く、島谷だけでなく広く加東郡(現小野市・加東市)一帯の庄屋ぎつねをつとめ、その威厳を保っていたということ。そして、自分のすむこの島谷の地を大切にして火難・盗難・疫病などの厄を払い、牛馬のお産を苦しめる禍津日の神などの乱暴なふるまいをも決してゆるさないでいました。島谷では「五助ぎつね」のおかげで平和な暮らしがづづいたといひます。

土地の人びとはこれに感謝し、「五助ぎつね」に対して格別の思いを抱きつづけてきたということ。す。

※災難や凶事をひきおこし人間に害をおよぼす神をいう。

「ふるさと伝え語り」小野の歴史を知る会編(小野市文化連盟)は、好古館、コミセンおので販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話 (その三)

今から152年前(1864年)の6月

23日、大坂東町奉行所の与力が天満橋(天神橋説もある)で暗殺された。その名は内山彦次郎(1797年生)。同じ与力だった大塩平八郎ほどには有名ではないが、奉行所きつての実力のある与力だった。「小野と何の関係がある?」といぶかる

大坂町奉行所の与力、内山彦次郎  
小野とも深いかかわりがあった!



写真右は加古川筋一揆の取り調べに関する文書。4行目に内山彦次郎の名前がある(三枝家文書)。写真左は芝居許可に関する文書。1行目に内山の名前がある(公私録)＝いずれも好古館提供

方、実は小野とも深い関わりのある人物だったのだ。

以下しばらくの記述は藪田貫氏(当時・関西大教授)の著書(「武士の町 大坂」中公新書・2010年など)による。内山と大塩は、大塩が4歳年上だが、屋敷が近く、ともに同役だった時期もある。2人はライバルというより仇敵の仲だった

たようだ。

大塩は内山に癒着の疑惑を抱いており、「大塩平八郎の乱」(1837年)のときには、内山を血祭りに上げようとしていたという。幸いに?内山は兵庫、岡山に出張していて、大坂に戻り、大塩の潜伏場所の情報を入手、捕縛に出勤した。

大塩の乱には河合出身で、大塩の塾「洗心洞」の門弟になっていた掘井儀三郎が参加していた。彼が大塩塾に入門したのは、天保4(1833)年の加古川筋の大一揆を身近に見聞したのも一因だったと見られる。

この大一揆の取り調べに向向してきたのがなんと内山だった。9月17日、内山ら2人の「盗賊方与力」が数人の同心を引き連れて加古川宿に到着。さっそく加東郡内の村々に対し騒動に関する報告を求め、翌日からは村々を巡回して一揆参加者の追及や捕縛を行った。一方で、内山は天保12年、当時ご禁制だった芝居興行に際し、抜け道を用意して許可するようにと小野藩に伝えている。庶民のために粋な計らいをする役人でもあった。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。



ふるさと伝え語り

市内で伝えられてきた民話などを紹介

とりもちわらじ (市場町)

加古川筋いつたいにおこった天保の大一揆のときのことです。上流の村から何千という人たちが鍬や鎌をもって押しよせてきました。かれらは村や町の商人や地主・金持ちの家を破壊し、むしろ旗をかかげてやってきました。

太郎太夫村(市場町)には近藤亀蔵という大金持ちがおりました。よその村はいうまでもなく、この村からも亀蔵の家へ押しかけ乱暴のかぎりをつくしました。

家財道具を壊す者、米蔵から米俵をもちだして道へまきちらす者、地下の穴蔵から小判を箕ですくって川になげすてる者、それはそれは大変な騒動がはじまりました。

ところで、打壊しときは米や金銀などを勝手に持ち帰ってはいけないことになっていました。世の中の不正を糾すためにやむなくおこなう一揆では許されることではありません。それがみつければよけいに一揆の罪が重くなります。そのため仲間同士の見はりがきびしく、持ち帰ったりはとうていできないことでした。しかし、なかには悪知恵のはたらく者

がいて、わらじの裏にとりもちをべったりとくっつけて小判の上を歩きました。すると知らぬ間にわらじの裏に小判がはりついて持ち帰れるからです。そうした者が何人もあったそうです。

その後、太郎太夫村では急にお金を儲けたり家を建てたりすると、「とりもちわらじをはいたようや。」とひやかすようになったそうです。

※米麦や雑穀をふるって、からやこみをふり分けるための農具。



「ふるさと伝え語り」小野の歴史を知る会編(小野市文化連盟)は、好古館、コミセンおので販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦のおの歴史散歩余話 (その四)

NHK大河ドラマ「真田丸」で人気上昇中の真田家。朝ドラに続いてNHKの番組にあやかろうと真田家と小野藩・一柳家のつながりを調べてみたら、びっくりばん。出てきた、出てきた。今月はこのお話だ。

### 真田家と一柳家、意外な関係合戦したり、婚姻を結んだり



甲冑姿の小松姫が陣取る沼田城の場面を描いた「関ヶ原合戦絵巻」(好古館所蔵)

原合戦(1600年)では、両家の直接対戦はない。両家の対陣は、「大坂の陣」(1614、15年)のうち、夏の陣(1615年)の道明寺・菅田合戦で起きる。5月6日のことだ。

好古館で6月19日まで開催された企画展「一柳家と関ヶ原合戦・大坂の陣」の資料によると、菅田村付近で東西両軍がにらみ合いになったとき、東軍・伊勢組の一柳直盛隊・菅沼隊と西軍・真田信繁(幸村)隊との間で「鉄砲打合」、つまり銃撃戦があったという。

私が最も驚いたのは、一柳家と真田家との間に姻戚関係があったということだ。それは小野藩4代藩主・一柳末栄(1725、99)が継室(後妻)に信州松代藩の4代藩主、真田信弘の姫を迎えていたのだ。末栄は財政難の藩政を立て直した小野藩中興の祖とされる名君だ。末栄に嫁いだのは信弘の次女の「於八十」で、1756年に結婚。58年に末栄(5代藩主)を生んで間もない同年10月に死去した。「陽泉院」と呼ばれた人だ。

さて、一柳家に伝わる「関ヶ原合戦絵巻」の話だ。上州・沼田城の場面は城主信幸(信之)(徳川方)の留守を預かる妻小松姫が西軍についた舅、昌幸の入城を拒んだシーンが描かれている。

末栄と陽泉院の結婚後、末栄が妻の実家(松代真田家)の先祖の活躍ぶりを顕彰するために描かせた。こう想像している。

「おおい、五郎兵衛はん。いこか。」手に手に鍬や棒をもった人たちがさそいにきました。天保の加古川筋の太一揆のときのことです。重い年貢と凶作で辛抱できなくなった百姓たちが打ちこわしをはじめたのでした。打ちこわしとは、貧しい人たちが金持ちの家を打ちこわす暴動のことです。かれらは一軒一軒仲間をかりあつめました。ことわることはできません。

「へえ、もうでかけましたがいな。」  
「さよか、えろはやいの。」  
百姓たちはこういうと、五郎兵衛におくれるなどばかり急ぎ足で加古川筋へおしだして行きました。

どこそ命がないにちがいない。」  
ふだんからお役人ににらまれているので、おかみさんは思案のあげく、その晩は五郎兵衛にどんどんお酒を飲ませました。酒好きの五郎兵衛は、いつもよりあいそのよいかみさんに気をよくしてぐいぐい飲みました。そして酔っぱらってしまったのです。物置にほつりこまれたのもしらずに、  
あくる日の屋ちかく、やっと眼をさました。

「おくれてもした。えらいこっちゃ。」  
とめようとすおかみさんをけとばし、鍬をつかんでかけたそうとしました。すると、「わあッ」という声といっしょに、大ぜいの足音がします。打ちこわしの連中が役人に追っばらわれにげ帰ってきたのです。

こうして五郎兵衛はおかみさんの機転で命びろいをしました。また、あの五郎兵衛が加わっていなかったのだからと、中番村といったいからはお役人に捕らえられた者はいなかったと伝えられています。



## ふるさと伝え語り 市内で伝えられてきた民話などを紹介 強訴五郎兵衛(中番町)

Vol.4

「ふるさと伝え語り」小野の歴史を知る会編(小野市文化連盟)は、好古館、コミセンおので販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話 (その五)

NHK大河ドラマ「真田丸」の信州真田家と小野藩・一柳家の関係。戦国〜江戸時代限りと思っていたら、さらに明治初年でも関係があった。今月はこのびつくりばんの紹介だ。

小野藩最後の藩主、一柳末徳が明治元年(1868年)、戊辰戦争のうちの「北越戦争」に藩兵を派遣した話は、今年3月号の本欄に書いた。

小野藩にとつては一大事で、詳細な出陣記録が残っていないものだが、私の知る限り小野藩が明治新政府に届けた出兵報告の書類の写しを載せた「太政官日誌」(明治元年10月18日)しかわかっていない。この報告書は藩士、湯浅斉が提出したものだが、これによって概略を記すと、以下のようだ。

小野藩兵は兵部卿宮様(会津征討越後口総督・仁和寺宮嘉彰親王)に從い、6月22日、京都を出発。7月20日、柏崎(越後)の本営に着陣した(補注Ⅱ北陸道での行軍なので我が郷里、越

戦撃砲して連携両家越北  
家柳一、真田、関係超え時代

中・高岡も通っている)。

22日には関原に出陣したあと、西園寺様(公望Ⅱ会津征討越後口大参謀)の本営からの指図に従い、23日、與



北越戦争で小野藩兵が戦った越後・陣ヶ峯付近(好古館提供)

(与)板口に移り、周辺を巡察。敵軍が数か所に砲台を築いているのを確認した。官軍も胸壁を構えて対陣しており、距離は4〜5町(4〜500m)だった。

25日には本営中軍会議所より即刻陣ヶ峯に出陣し、松代藩と「申し合わせ」するよう命を受けた。さっそく松

代藩、飯山藩の隊と合流して自軍の胸壁に拠り対陣、日夜嚴重に守備した。8月1日早朝、小野藩隊が砲撃を加えたところ、敵陣からもしきりに発砲してきた。だがやがて敵陣は自焼し遁去したようで、黒煙が天まで上がった。(官軍の)各藩が一斉に進撃し、敵陣の小屋を放火したが、敵兵は一人もいなかった。(中略)この砲撃戦で田鹿藤左衛門が銃創(薄手)を負った。

以上が陣ヶ峯戦争の概略だ。陣ヶ峯は現在の加茂市内である。

激戦となったこの砲撃に際し小野、松代両藩がどんな打ち合わせをしたのか、具体的なことはこの報告書からはわからない。

小野「その昔、うちの殿様(末栄)が貴藩の姫様を御後室に迎えられ、お生まれになった御子(末英)が次の殿さまになられたそうな」

松代「左様、110年ほど前のことでござろう。聞き及んでござる。縁があった両家、ここは相携えて奮戦つかまつろう」とかという会話を交わしたかどうか。司馬遼太郎氏ほどの創造力がなく、うまく書けないのが残念だ。

佐野允彦さんのまさきこ(元朝日新聞記者、平成22年7月から小野市学術政策員)。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

あごなし地藏(復井町)



小野市から加東市へ続く旧道脇にひっそりとある地藏で、地元では「隠岐の国のあごなし地藏」と呼ばれています。

「世の中へ出て、困っている人をなおしてやりたい」とこの道端へ移されたそうです。皮膚病、肺病、足腰の痛み、家庭内のいざこざなど、何にでもご利益があるとされています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話 (その六)

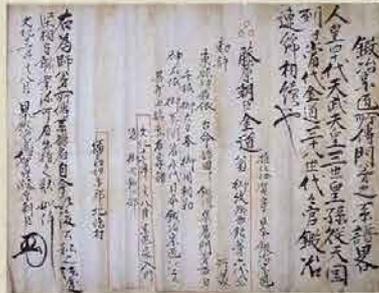
「二つ目の神様、こんなところにおわしましたか」。好古館で開かれている企画展「小野市の地場産業」刃物とそばん(9月25日まで)を見学。いきなり足を止めたのは、「鍛冶祖神之像」の掛け軸の前だった。この神様は一つ目で、鍛冶の神様として金属・金物にかかわる人々の信仰を集めてきた。この神様と小野の金物創業の伝承を探る。

この掛け軸、10年ほど前に「浄谷町鎌組合」から好古館に寄託されたもの。大正から戦前ものらしく、年一回の組合の会合の際に飾っておまつりしたようだ。

絵の上に「天目一箇大神」と記されている。掲載写真では分かりづらいかもしれないが、片目がぶさがっている。この神様、北播磨と極めて縁の深い神なのだ。

「播磨国風土記」託賀(多可)郡の条に、「荒田」の地名伝説として天目一命が登場、その姫神を祭ったと伝えられるのが多可町加美区の場の荒田神社だ。近くに天目一神社の祠があり、「め

### 金物の神 (一つ目神) と流離譚 小野・地場産業の企画展に寄せて



好古館で展示中の「鍛冶祖神之像」(右)  
又右衛門が授けられた鍛冶門弟の文書(左)  
(いずれも好古館提供)



ひとつさん」と親しまれているという。憩意の歴史・民俗研究者、埴岡真弓さんの著「多可の里風土記」(2015年)にある。  
西脇市にも天目一神社があるほか、

うことが多く、それが一つ目の神として仰がれたと推論。三木、小野、西脇、多可という加古川上流の地域には古代以降の鍛冶集団の痕跡が明確に残っているとも指摘する。ぜひ一読を。

もう一つの話は、江戸時代中期の北嶋村(現大島町)での剃刀製造創業にかかわる伝承だ。又右衛門家の所伝では、延享年間(1744~47年)に回国巡行していた京都の剃刀鍛冶の藤兵衛という人に一夜の宿を提供したところ、お礼に剃刀鍛冶の技法を伝授されたというもの。これが契機で小野周辺で剃刀生産が盛んになったとされる。

私はこの伝承、「蘇民将来」伝説をルーツとする貴種流離譚をベースにしていると推察する。「武塔神」という神が旅の途中、一夜の宿を頼み、貧しい蘇民はもてなした。武塔神はお礼に病を避ける茅の輪の秘術を教え、蘇民の家族は病を逃れ、栄えたという。

ちなみに我が佐野家の先祖(自称)、佐野源左衛門も旅の僧に身をやつした執権・北条時頼に一夜の宿を提供し、その礼で所領を賜ったと伝わる。「情けは人のためならず」ですね。

佐野允彦(まのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

かなづるべ

### 金鐘城遺跡広場(昭和町)



「金鐘城」は、室町時代に播磨守護職であった赤松氏の家臣中村氏が築いた山城。伝承によると、城内に井戸があり、その水を「かねのつるべ」で汲み上げていたことから「金鐘城」になったとか。

晴れた日には、明石海峡大橋まで見えることも。歴史を感じながら絶景を楽しんでみませんか。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話（その七）

今年には国民的大作家、司馬遼太郎氏の没後20年に当たり、司馬ブームが再燃しているようだ。かく言う私も大の司馬ファンで、4月に滋賀県米原市で開かれた記念シンポジウムに足を運んだほどだ。ただ一つ疑問を持っているのが「俄—浪華遊俠伝」での小野藩の扱いだ。今月はこの問題を再考したい。

「再考」としたのは2010年12月の本欄で一度簡単に述べたから。司馬は「俄」で、1863年、大阪湾岸・市中警備の幕命を受けた小野藩が財政難からその仕事を大坂の侠客、小林佐兵衛に請け負わせた。足軽頭に登用、名字帯刀・騎乗を許し、藩邸名目の自宅での賭場開帳も黙認する。

「『俄』の小野藩軽視を問い直す 司馬遼太郎氏没後20年に寄せて」  
こんな骨子で、小林を快男子扱いし、逆に小野藩を腰ぬけ扱いにしたのだ。私は新聞記者の大先輩である司馬さんを敬愛し、その作品を愛読、東大阪市にある司馬遼太郎記念館も訪ねたことがある。だが、この「俄」だけにはわかに承服しがたく、6年前の本欄で

疑問を投げかけたのだ。「俄」の内容が史実かどうか探るうちに、藤本欣司著「小野旧藩誌補遺稿」（1937年）に出会った。藤本さんは県立社高校長などを務められた教育者で、本書の中で



小野藩が大坂警護の宿舎とした勝光寺＝大阪市西区（好古館提供）

「大坂警護の事」と題する一章を設け、「俄」批判を展開している。

以下、私もおおむね本書に拠りながら疑問を提示したい。司馬の「俄」の下敷きになったのは、「浪華老侠小林佐兵衛伝」（1917年）であることは多くの評論家、研究者がとくに指摘してい

るところだ。だが、さらに踏み込んでこの自伝の内容そのものの信憑性にまで疑問を呈したのは、私の知る限り藤本さんだけである。

まず、小野藩が大坂湾岸警備などを小林に請け負わせた事実はない（小林の自伝のほかに裏付ける史料が皆無である）。そもそも大坂に小野藩の藩邸・蔵屋敷はない。足軽頭という役職もないという。

侠客に幕命の警備を下受けさせることなど不名誉だから藩の記録には残さなかったのでは——という考えもできるだろう。しかし、江戸時代は幕府・諸藩から町方・村方に至るまでも何事も文書ありきで、公的記録はないとしても私的な日記・覚書、手紙などに記されてもおかしくない。

大坂警護の様子は藩中老役の黒石長道の「公私日記」に書かれているが、小林の名は出てこない。逆に警護のために藩士の派遣や武器の手当てなどに藩が腐心した様子がよくわかる。

近年、「俄」のネタ本である小林の自伝を分析する研究も2、3出てきている。皆さんもこの機会に「俄」を読まれ、小野藩の労苦に思いをはせていただきたい。

さのまさひこ 小野市学術政策員

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
ハメ塚（中島町）



コミセンおおべの東方約500mの道路脇に、木立に取り囲まれた高さ1mほどの塚があります。

この塚は、陰陽師・安倍晴明の子孫、安倍晴休が、祈祷によりハメ（マムシ）を封じ込めたと伝えられています。

以後、この付近一帯では、マムシが一匹もいなくなるとか。

歴史ガイド本「おのふるさと散歩」は、市観光協会（観光交流推進課内）、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その八)

小野市の出土品で最も有名な遺物は、勝手野古墳群(黍田町)の装飾付き須恵器ではないだろうか。この須恵器は6号墳の石室入り口の両脇に立てられていた壺(7世紀初め)で、肩の

庇のようなところに狩猟の騎馬人物や相撲を取る人物などの小像が飾られていたことで脚光を浴びた。この中に対面する男女像があり、後ろ手の女からの求愛のポーズ、いや男を拒否するポーズだと論議がある。

かつて私は拒否派の通説に従い、県立考古博物館(播磨町)にある実物や好古館にある模型の前で、「これ、日本で最古の夫婦喧嘩の人形ですよ」と冗談めかして話していた。11月22日は「いい夫婦の日」。今月はこの男女像について考えてみる。

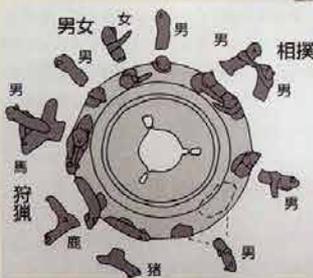
私は最近、受け入れOKのポーズと考えるようになった。というのはこの小像群のある壺は古墳の主(首長)を追悼し、かつ顕彰するためのもので、そん

### か拒否か、OKのポーズか 勝手野6号墳の須恵器の男女像



▲拒否か、受諾か、はたまた？一見極めが難しい対面する男女の須恵器小像(県立考古博物館で)

▼小像群の模式図(好古館特別展図録)



な器に男(首長)が女(妻?)に振られている情けない姿の像を飾るだろうかという素朴な疑問を抱いたからだ。実際、他の像は馬に乗って猪鹿を追

う像(恐らく騎射の狩猟像)、相撲(を見る首長)の像など生前の首長を称えるにふさわしい勇ましい像ばかりなのだ。ちなみに騎乗は当時の首長層のステータスシンボルであり、狩猟も相撲

も単に娯楽ではなく、王権(首長権)の誇示であった。

そんな中に首長が女に振られているみっともない姿を飾るだろうか。たしかに後ろ手のポーズは民俗学などでも拒否の仕草とする見方が強い。だが、手を後ろに回して相手の話を謹聴する場合もあろうし、「抗いません」という意志表示とする場合もあるのではなからうか。私はこの男女像は「受け入れOKよ」との場面で、男女和合し子孫繁栄を与祝したものでと想像する。

私の先輩の古代学者、辰巳和弘・元同志社大教授に教えていただいた文献(井守徳男「兵庫県勝手野6号墳出土の装飾付壺小像群再考―後手の女性像を中心に」2009年)によると、忌み嫌う動作ではなく、「対面する男性に霊的能力を授ける所作であろう」という。この女性性は「呪的能力者」(巫女のような人物)と見ている。井守さんは勝手野古墳群の調査責任者である。いやーいつの時代でも男女関係そのもの、またそれをどう見るかは難しい。皆さんもぜひ考古博物館を訪ね、この壺を見て考えを巡らせてください。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策委員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 橋の地藏さん(高田町)



中央の石が「橋の地藏さん」

なぜか裏向きに置かれている、この地藏。昔、小川の石橋として使われていて、表を向けてはいけないという言い伝えがあるからだろう。足腰の病気を治すことで知られ、遠くから訪れる人も。平成元年には地藏にまつわる物語が、テレビアニメ「まんが日本昔ばなし」で放送されました。

歴史ガイド本「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その九)

その日、大和(奈良県)・吉野の山中は未明から雪だった。降りしきる雪の中、播磨の名族、赤松氏の遺臣たちが南朝の二王子を襲い、三種の神器の一つである神璽(勾玉)を奪還した。今から559年前の長祿元年(1457)12月2日のこと。「長祿の変」と呼ばれる事件の始まりだ。

この赤松遺臣たちの中には、当時の小野地域の武士たちが少なからずいた。だが、明治以降、あまり声高に語られることはなかった。今月はこの事件を探る。

神璽を奪還した功績で主家の赤松氏再興を果たしたのだから、忠臣の誉れとして語られてよさそうなものだ。しかし、やはり皇胤を討つたという血塗られた行為が皇国史観が広まった後世、非難されがちになったのだろう。小野市の中学校の副読本にも詳しい記述はない。

赤松氏は室町幕府で重きをなし、播磨など3か国の守護だった。満祐(有名な円心の子孫)のとき、將軍義教を謀

殺(1441年嘉吉の乱)して、没落。赤松遺臣は牢人となるが、北朝(京都)から南朝(奈良)に奪われていた神璽を奪い返せば赤松再興を認めるとの内密を取り付けた。

興を再、赤松氏を再、神璽を奪還し、南朝秘話「長祿の変」を探る



戦勝の竹竿の伝承が残る「河合館」の土塁跡=粟生町

そこで遺臣らは南朝方に潜入、二王子に近づき、奪還の機会をうかがっていた、ついに卒に及んだのだ。赤松氏は長祿2年にお家再興を許され、加賀半国などの守護家として復活した。

小野の赤松遺臣は、上月左近将監、中村弾正忠らだ。上月は河合地区に本

領があり、慶徳寺の檀家で、有名な文書「南方御退治条々」を残したことで知られる。中村一族は金鐘城を居城としていたとされる。

小野の中世史に詳しい坂田大爾さん(小野の歴史を知る会)にゆかりの地を案内していただいた。河合地区の萬福寺そばには王子の首を洗ったとされる「南帝首洗いの井」があったという。

もう一つの伝承地は、粟生町の「河合館」跡だ。赤松氏の再興を願う上洛するとき、この屋敷の竹やぶの竹を切つて旗竿を作りそれを掲げて上洛、願いがかなった。めでたい武運のしるしとして後世、三木城を攻めた羽柴秀吉もここで旗竿を作ったという言い伝えがある。

血塗られた事件だが、赤松遺臣にとつては主家と自らの家の存続をかけた命がけの行動で、今日のモラルなどから論じられるものではないだろう。来年は長祿の変から560年。冷静に語られてよかろう。

「長祿の変」を軸にした時代小説「吉野太平記(上下)」「武内涼、角川春樹事務所・2015年刊)がある。興味のある方は、一読を。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

山ノ神社(檜山町)



檜山町にある山ノ神社は、「風邪の神様」として知られています。

風邪をひいた人が参拝すると一気に風邪が治り、再びひかなくなるとの言い伝えがあります。

風邪をひきやすくなるこの季節、困ったときの神頼みもありかも!?

歴史ガイド本「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その十)

日銀総裁、松尾臣善(しげよし) (1843~1916年)は明治37(1904)年の正月を郷里(旧阿形村)で過ごす予定だった。墓参りのための里帰りという名目で、年末には日本・ロシアの不和に関する関西財界の不安を和らげる仕事をしてきた。その松尾に元日早々帰京を求める電報が届いた。日露戦争の戦費確保のための公債発行という重責を担う日々が始まった。

本欄では二度、松尾を紹介した。だが、日銀総裁時代のこととはほとんど言及していない。昨年は没後百年の節目だったので、せめて本欄でいささかでも顕彰したいと筆を執った。

日露戦争時、外債の確保に尽力奮闘  
旧阿形村出身、日銀総裁の松尾臣善

若き日の松尾は、明治新政府の外交官としてあの五代友厚(1836~1885年)らと「神戸事件」の解決などに奔走した。「五代さま」はNHK朝ドラ「あさが来た」でティーン・フジオカが演じ、人気になった。そして日銀総裁時代はあの高橋是清(当時は

副総裁。のちの総理大臣)とともに日露戦争の戦費調達に奔走することになる。

松尾は明治3年以降、主に旧大蔵省で出世を遂げていく。有能な財務官僚であったのは確かだろう。国際局長な



松尾男爵が郷里に建てた屋敷(現・料亭「山水荘」) = 阿形町

どを経て貴族院議員にもなり、同36年10月、第6代日銀総裁に就任する。このころ日本とロシアの関係は悪化していた。とくに大阪の財界には不安視する空気が漂っていた。冒頭の年末の墓参り帰省は大阪の財界人と面談し、そ

の不安を和らげるねらいであったのだ。明治37年2月10日、ついに政府はロシアに宣戦布告。その夜、高橋副総裁は井上馨元蔵相から呼び出しを受け、築地の料亭に向くと、松尾総裁はもちろん桂太郎首相、曾祢荒助蔵相ら高官が居並び、ロンドンでの公債募集の内命を受ける。この場面、高橋是清が主役のドラマ「経世済民の男」(NHK、2015年8月)で登場した。

明治40年すぎのことらしいが、国際収支の動向を心配するあまり松尾総裁の頭髪が白くなったとの話が伝わる。こうした疲れた心身を安らげるためでもあるろう、郷里・阿形村に「隠居所」を建てた。この「旧松尾男爵別荘」は現在、料亭「山水荘」になっている。

文化庁の国庫補助事業「兵庫県近代和風建築総合調査」(平成23~25年度)の対象として県教委が調査、「特に重要なもの」119件の一つとしている。その調査担当者は「ほぼ純和風の別荘建築といえる」とした上で、「保存状態もよく、男爵の遊びともてなしの心で造られた別荘の粋を感じることができる建築群である」と評価している。

佐野允彦(さの まさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策委員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

石造九重層塔(養父寺)



来住町にある養父寺は、境内に各種の石造物がある、まさに石造物の宝庫。その内の一つ、本堂正面にある高さ約4.5mの石造層塔は、笠と呼ばれる屋根が9つあることから九重層塔と呼ばれています。中世の供養塔として貴重で、市の指定文化財になっています。

歴史ガイド本「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その十一)

市民の皆さま、つつがなく新年を迎えられたでしょうか。今年の干支は酉という事で、小野地域にかかわる鳥の話を中心に探ってみましょう。

日本の神話で最初に登場する鳥は、天照大神の岩戸隠れの場面での「常世の長鳴鳥」だ。これは鶏のことで、鶏鳴で夜明けを告げる能力を持つ霊鳥のような存在だったのだろう。古代の鳥の造形物としては、古墳時代の鶏形埴輪、水鳥埴輪が有名だが、小野エリアでの出土は残念ながらない。

小野を含む北播磨は古代、「賀毛郡」だった。「播磨国風土記」によると、その由来は品太(応神)天皇の治世、鴨の村にっがいの鴨が巢を作り、卵を産んだからだという。鴨坂や鴨谷など鴨にちなむ地名もある。これらの地名は加西市域に比定されている。

「小野市史」は、古代の一時期(6世紀前半ごろ)、加西く小野エリアを支配した有力豪族を「針間鴨国造」として、鴨をトータル(祖先神、守護神)

とした豪族だったと想像すると面白い。7世紀後半に建立された広渡廃寺では、「鷗尾」と呼ばれる屋根瓦の破片が出土している。金堂、または中門などの大棟の両端を飾ったものらしい。



熊野神社に奉納された鷗図の絵馬=王子町(上)

鷗の透かし彫りをした住吉神社本殿の脇障子=垂井町(右)

鷗尾は古代中国がルーツで、霊鳥の鳳凰などの羽を立てた形という。室町末期には鯨に変容する。

主役の鶏がなかなか姿を見せないが、ようやく江戸時代になって市内の神社の彫刻や絵馬になって登場する。彫刻の逸品は、垂井町の住吉神社本殿にあ

る。脇障子と呼ばれる所の彫刻で、左に鶏、右に鷹をあしらった見事な透かし彫りを施している。18世紀中ごろのものだとされている。鶏は木の枝に止まり、体を伸ばし、とさかを立て、周囲を見張っているように見える。神域を侵そうとする邪悪なるものをいち早く見つけ鳴き声で知らせる役目を期待されていたのだろうか。

絵馬では鶴やフクロウ、ウグイスなどを描いたもののほか、鶏もなかなかの人気だ。年代が分かる古いものは、王子町の熊野神社に、天保15(1844)年に久茂村の清右衛門なる人が奉納した鷗図がある。

新しいものでは昭和56年に奉納された鷗図が河合西町の薬師堂に掛かる。酉年に酉年生まれの人が奉納する例があるようだ。

好古館によると、市内5か所の神社に鶏など鳥の絵馬があるそうだ(平成7年時点)。鶏など鳥を持つ何らかの霊験を信じての奉納なのだろう。

何やら取り留めのない話になってしまったが、この一年、市民の皆さまには鳥のように羽ばたいていただきたいと願って取りあえず筆を置きます。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

六ヶ井円筒分水(久保木町)



東条川流域の六ヶ井堰にある、用水を均等に分ける珍しい円形の分水施設です。昭和46年に造られました。

流れてきた水が、中心の円筒部から水圧で湧き出し、外周へ流れ出て、それぞれの水路に均等に送られる仕組みになっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その十二)

小野藩主・一柳末徳は慶応4(1868)年3月18日、京都御所で「五箇条のご誓文」を承った。明治新政府の基本方針である。皆さんも教科書などでご存じだろう。末徳にとって「公式の維新」の始まりだった(明治天皇による誓文の奏上は3月14日だった。末徳は病気のため参内が遅れた)。今年に明治維新150年の節目。小野藩の幕末・維新を探ってみよう。

「明治維新」の始まりは諸説あるが、1867年12月の「王政復古の大号令」をもって維新政権の発足とするのが適切だろう。だが、末徳にとつての「維新」の始まりは、文久3(1863)年の京都御所での「8月18日の政変」だったと思われる。

藩の幕末・維新の小野 藩  
「明治維新」150年に寄せて



文久3年の政変時に一柳末徳が警備したとされる京都御所・中立売御門(京都市上京区)=写真右  
左上は鉄砲組召集にかかわる文書(好古館提供)

小野藩には苦い思い出があった。30年前(1833年)の加古川筋の大一揆の時、市場の豪商・近藤龜藏宅の警護に藩兵が出動。威嚇のために放った銃声に群衆がかえって激昂、鉄砲を奪

藩主になったばかりの14歳の少年が公武合体派のクーデターに遭遇、自ら銃を携え、藩兵を率い、御所警備に当たったのだ。政局の変動の背景には武力があることを目の当たりにしたことだろう。

い取り、大暴れしたため、裏道から陣屋に逃げ帰った。この失態を周辺諸藩などから嘲笑されたのだ。これを教訓に、藩は兵力の充実・強化に乗り出す。

天保11(1839)年、時の藩主末延は「第一に文武の道に励め」と命じ、武器・馬具をきちんと用意せよと指示

末延が招いた学者、大國隆正は「武芸に励め。特に水練・早走りが肝要」としつつ、大砲・小砲も鍛錬すべしと説いた。「小舟にて火砲を打ち候稽古第一に致すべく」との勧めには、先祖が瀬戸内の水軍と伝える家柄の主従は、血が騒いだかもしれない。

1854年、大阪湾・天保山沖へロシア艦船が来航、小野藩にも出動命令が出た(実際には出動せず)。このころ藩では農兵隊を組織する。「小野市史」第2巻によると、「御鉄砲組」と呼ばれ、その組士(人足)として村々から百姓を招集、鉄砲稽古をさせていたという。

藩主・末徳は幕命による大阪湾岸警護を先代から引き継ぐ。1864年には、緒方洪庵の適塾で洋学を学んだ人材を「砲術教授方」で新規採用。大坂警衛所には大砲・小銃を配備している。

大政奉還から五箇条のご誓文の前(1867、68年)、末徳は病気がちだったが、新政府の命により姫路城下への出兵、加西・多可郡への出兵、さらへ遠くは、北越戦争への出兵。と小野藩主従は幕末・維新の激動期を生き抜いた。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

ブツブツ(市場町)



市場小学校の東にある冷泉で、ブツブツと音を立てて絶えず水が湧き出ています。重源上人の弟子で、来迎寺(市場町)の開祖・善阿(ぜんあ)が水をかぶって苦行した場所と伝えられています。かつて冷泉の周りをトントンと踏むと底から泡が吹き出たそうです。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その十三)

春4月、小野市では約460人の新1年生が誕生する。どの子の背中也ピカピカのランドセルが輝いていることだろう。江戸時代、ランドセルのかわりに薪(柴)を背負いながら書物を読む少年がいた。そう二宮金次郎だ。

この姿を現した銅像が戦前、全国の学校に建てられた。今月は小野の金次郎像を巡る話だ。

金次郎(金治郎)こと二宮尊徳(1787~1856年)は今の神奈川県小田原市の農家の生まれ。少年時代は貧乏で、働きながら学んだ。小田原藩家老家の財政を立て直した手腕を買われ、いくつもの藩の財政再建や農村復興に尽力した。

尊徳は正しくは「たかのみ」と読むが、通称「そんとく」。損得抜きで地域のために活動した、なんてね。明治時代には刻苦勉励の手本とされ、国定教科書に載り、「手本は二宮金次郎」と唱歌でも歌われた。

その少年時代の姿が銅像になって、昭和初年から全国の小学校で建立が

像金次郎 薪を背負って書を読む  
小野からも戦争に駆り出された



戦後、再建された小野小学校の金次郎像(西本町) = 写真右  
左は、戦時中、中番小学校で銅像供出を見送る子どもたち(好古館提供)



相次いだ。そこに目を付けたのが我がふるさと、富山県高岡市の銅器業者だった。うまく売り込めたのだろう、銅像の注文が続々と来たようで、「金次郎像を最もたくさん製造したのは高岡の

当時は忠君愛国のがみとされた楠木正成像と相前後して建立された。

ところが戦争が激しくなり、金属資源が不足してくると、42年に金属回収運動が始まった。これにより各小学校の銅像も供出されていった。来住小のものは1年半しか学校におらず、戦争のために駆り出されていったわけだ。

中番小の校史には「戦争の為銅像の供出」と題する写真がある。荷車に銅像が乗せられ、玄関前で子どもたちが見送っている写真だ。同小には尊徳像はなかった。楠公像なのだろうか。

戦後の復興になると、全国的に尊徳像が再建されるようになる。小野小では昭和43(1968)年に再建された。石の台座には「昭和十一年建設」とあるので、これは戦前のもの。嘉嶋信哉校長は「今の小学校の教科書には金次郎は出てこない」と話す。

市教委によると、現在金次郎像があるのは小野、市場、大部の3校だ。小さな金次郎像は戦前・戦後とさまざまな命運を背負わされたのである。金次郎像も子どもたちも二度と戦争に駆り出されないよう祈るばかりだ。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
塩の井(下来住町)



鍛溪神社の参道脇にある鉱泉です。天正10(1582)年、鍛溪神社のお告げで湧き出したと言われています。

成分は塩鉄で、沐浴をすると病気が治るとされ、この鉱泉を使った「鍛溪温泉」は、地域の方により長年受け継がれてきました。平成22年から閉鎖されていました。地域熱意を受け、市で再生に向けた整備を今年度行います。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その十四)

5月5日は「こどもの日」。小野を含む北播磨の歴史に子ども姿を探りたい。と書いたものの、残念ながら古代中世の子どもたちのことは、ほぼ皆目分らない。

貴重な古代史料「播磨国風土記」でも、子どもが主役、または準主役の話は、託賀(多可)郡荒田の地名由来譚ぐらしいかない。鍛冶の神様に関わる話で、金物の町・小野とも無縁ではない。荒田の道主日女命が父の分らない子を産んだ。父を探る「盟酒」を醸造し、諸神を招き、その子に酒を捧げさせた。子は天目一命に捧げたので、父が知れたという荒筋だ。

天目一命は金属・鍛冶の神なので金属の歴史・民俗の文献にひかれることが多いが、「神婚説話」としても重要だ。今井昌子著「ウケヒの表現形式」(「同志社国文学」第32号、1989年)によると、盟は神祭りの場で子どもの動作により神の意思を探るものだという。

君幼の運悲、子どもの子記風  
「こどもの日」に探姿因みに

その背景には幼児は神、または神の化身だと見る古代人の信仰があったのだろう。死亡率の高い古代において子どもの命は、神に委ねられたものとも考えられていたのだろう。



好古館で展示された一柳末彦・8歳の書「鶴算」(好古館提供) = 写真右  
左は、小野で半生を終えた末彦の墓(神明町の光明寺で)



中世は武士の世。打ち続く戦乱に興亡する武家も多く、翻弄された子どもたちも多いはず。だが、子どもの姿はあまりよく分からない。江戸時代になってやっと古文書などから庶民の子ども様子も分かります。捨て子のは以前書いたので割愛し、ここでは小野

藩の幼君、一柳末彦の話を紹介する。人生の後半、捨て子のような扱いをされた悲運の殿様だからだ。

天保14(1843)年3月、8代藩主末延の子として小野で出生。父の急逝により12歳で藩主となる。歴代藩主の中で最年少の殿様だった。8歳の時の書が伝えられているが、なかなかしっかりした字で書かれている。

だが、もともと病弱だったようだ。体調のよいときは幕府用命の役職(江戸城御門の警護)もこなし、時に乗馬で猪狩りをしたり砲術訓練の閲兵もしたりした。さらに、海防防備について学者の進講を受け、幕府へ具申している。兵学に関心を寄せ、鎧兜の書や軍学書の写本も残した。

萬延元年の暮れ、発病し、文久2(1862)年、狂人扱いで座敷牢に入れられた。21歳で小野に帰り、明治14年39歳で亡くなった。隠居所に幽閉同然の半生だったという。

幕藩体制の崩壊期に青少年時代を翻弄された、まさに悲運の殿様だった。その跡を継いだ末徳も14歳の少年藩主だった。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

王塚古墳(王子町)



市役所の北にある、直径45m、高さ8mの大きな古墳で、県の指定文化財になっています。

この古墳は、市内に現存する古墳の中で最大規模を誇り、地域で大きな力を持つていた有力者の墓だと言われています。昭和60年には、「市民の森」として整備され、市民の憩いの場になっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その十五)

小野市出身の著名な歌人、上田三四二(1923~89年)を顕彰する短歌フォーラム(6月3日開催)への応募作が8,739首を数え、過去最多を記録した。喜ばしいことだ。来年は関連行事「詩歌文学賞」が10回の節目で、短歌の源流「万葉集」を編んだとされる大伴家持生誕1300年でもある。この機会に上田と万葉集・家持の接点を探った。

というものの、古典や詩歌に縁のない私には難行苦行。そこで、歌詠みでこの短歌フォーラムでも入選作のある市立図書館の和田真由さんに関連の文献探索でお世話になった。

短歌誌「アララギ」に拠った近

代歌人たちは、アララギ派と総称され、万葉調の歌風を受け継ぐとされる。上田もアララギ派の一人だ。上田は万葉・家持について、「万葉から古今へ断絶の底にあるもの」(「国文学」19(6)、1974年)という評論で、家持を歌人として高く評価していること、とくに家

「万葉集」の相聞歌を好む  
歌人・上田三四二に寄せて



相聞歌を論じた著作もある上田三四二コーナー(市立図書館) = 写真右  
左は、我がふるさとに建つ大伴家持像(富山県高岡市)



持の「多彩な女性遍歴」に基づく相聞歌に注目していることが分かる。上田の家持、ないし万葉集の相聞歌への傾倒ぶりには並々ならぬものがある。再三、相聞歌を紹介し、批評してい

る。例えば評論集「愛のかたち」(1979年)では、「万葉集は恋の歌の源泉である。またその宝庫である」と高らかに宣言し、有名な蒲生野遊獵の額田王らの贈答歌などを紹介している。若き日、奈良の都で稀代のプレイボーイであった家持は、禁断の愛や不倫

がらみの愛も含む相聞歌に熱い関心を寄せており、手元に多くの歌を集めていたのだろうか。

さて、上田のことだ。小学校教員の子として生まれ、京都帝大医学部を卒業。同大付属病院など主に国家公務員の医師として生涯を過ごした。それで私は上田を謹厳実直な人格者で、およそ性愛などとは無縁の人と思っていた。だが、今般上田の評伝などを読んできてけっこう性愛をテーマにした歌・小説もあることを知った。求め難いものへの憧れだったのだろうか。

輪郭があいまいとなりあぶら身の溶けゆくものを女とぞいふ

乳房はふたつ尖りてたらちねの性のつね喃まれんことをうながす

いずれも結腸がんで手術、さらに自律神経失調症を病んだ後に編まれた歌集「遊行」(1982年)にある歌だ。死に向かう予感の中で生と性の叫びのほとばしりだったのか。万葉の相聞歌は上田の中でこんなかたちで結実したのか。上田を顕彰するには、まず一人の人間として捉え直さないといけないだろう。

佐野允彦(さのまさひこ)元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
算盤仲間の燈籠(本町)



小野商店街内の愛宕神社入口の鳥居脇に建つ2基の御神燈。

大正2(1913)年に建てられ、台座には「算盤仲間」と大きく彫られています。「仲間」とは「問屋」のこと。

江戸時代の終わりごろから小野市で製造が始まった「播州そろばん」は、大正から昭和の時代に全国にその名が知られ、伝統産業の一つになりました。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その十六)

今から417年前の慶長5(1600)年7月16日、小野・一柳家のご先祖、直盛が上野国(群馬県)の高崎城で徳川家康の家臣、井伊直政に対面。家康に味方すると告げた。天下分け目の戦い、関ヶ原合戦の前哨戦である。

家康による会津攻めの途中のことだ。直政は放送中のNHK大河ドラマ「おんな城主直虎」の養子に当たる。今月は大河ドラマにあやかり一柳家と井伊家のつながりを探ろう。

直盛は豊臣秀吉の直臣で、当時は尾張の黒田城主(一宮市)として3万5千石を領していた。それが秀吉没後(1598年)、豊臣政権が石田三成派と家康派に分裂すると、家康派に傾いていく。恐らく関白秀次切腹事件に連座した一族がいて、秀次を自殺に追いやった三成に反感を抱いたのだろう。

豊臣方の武将が家康に加担すると表明したのは、ふつう会津攻めの途中、いわゆる「小山評定」(7月24日・栃木

県)でのこととされる。だが直盛はいち早く7月5日に居城の黒田を発し、木曾路を経て前述の通り16日には高崎城で直政に家康支持を表明しているのだ。これは関ヶ原合戦時の木曾川先陣

近に接する前に  
「前戦合の柳家が



▲直盛の事跡を記した一柳家文書(いずれも好古館提供)

▼直盛着用と伝えられる陣羽織



の戦功と合わせ、家康からじかに「比類なき手柄」と激賞されることになる。直政は4月下旬ごろのドラマではまだ幼少で、五目並でも相撲でも仲間負け、直虎から叱咤激励されていた。だが、直虎の薫陶もあり、のちにたくま

しい青年武将となり、徳川幕府の譜代大名筆頭となる。近江・彦根が居城で、私は現役の記事時代、彦根城近くの彦根支局に2年半ほど勤務し、井伊家の末裔にも対面したことがある。

さて、直盛は徳川の諸将の中でなぜ直政に会いに行ったのだろうか。私の想像に過ぎないが、遅くとも秀吉の小田原攻め(1590年)の時点で面識があり、その後も交流があったこと、中でも直政の義理の祖父の名が「直盛」と同名であることから親近感を抱いていたのだろう。

一柳家文書を見ても、やたら直政との交流ぶりが出てくる。直盛・直重父子は2代將軍秀忠、3代將軍家光に近侍し、上洛や日光参詣にも供奉している。当然、直政没後の井伊家当主・直孝とも交流があったと思われる。

時は流れて幕末・維新の北越戦争(1868年)。小野藩兵は官軍として出陣、越後・与板(長岡市)あたりで奮戦する。与板藩主は直政の末裔にあたる井伊直安で、彼も官軍についた。のち小野藩最後の藩主末徳は、直安とともに子爵に列せられた。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
岩倉2号墳(来住町)



加古川市との市境に近い紅山山麓に、13基の円墳からなる岩倉古墳群があります。

その中の一つ岩倉2号墳は、市内で最大規模の横穴式石室を持ち、その内部は巨石が積まれています。奥(行約9m)、高さ約3mもある内部には、自由に立ち回ることができ、石室の構造を見ることがができます。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その十七)

幕末・維新期の小野藩主・一柳末徳のことは何度か紹介した。文久3(1863)年の京都御所での「8月18日の政変」時、御所の御門警備に出動したことも2、3度触れた。この時、有名な新選組も出動したのだが、その中に小野出身者が隊士でおり、活躍したのだという。今月はこの人物、松原忠司のことを探ろう。

今年(2017)は明治維新150年の節目。市役所・市民サービス課で雑談をしていて、松原のことを初めて知った。2004年の大河ドラマ「新選組！」にも登場していたという。

さっそく図書館に向き、新選組関係の本を10冊ばかり読み進めた。松原は確かに新選組隊士(四番組長など)で、池田屋事件でも活躍したこと、壬生の光緒寺に墓があることなどは分かった。ただ、具体的にどのような活躍したのか、また死因も不審があるのだが、その詳しい事情もよく分からないのだ。

ここでは内容が最も確からしい

### 新選組の隊士に活躍した小野出身者が有名な池田屋事件などで活躍

▲松原忠司が祭られた隊士の合同墓(京都市下京区の光緒寺)



▲松原忠司のことが記された「公私日記」(好古館提供)

「新撰組」全隊士録(2003年)などを参照しながら話を進めたい。入隊は文久3年春で、入隊以前は大坂で柔術道場を開いていたという。

今般、好古館から小野藩重臣、黒石長道の日記「公私日記」に関連記事が

重役に家族(父か兄か?)とともにあいさつに来るだろうか。円満退去であるう。

入隊後間もない文久3年6月ごろには、有名な沖田総司らとともに「副長助勤」という役職に就いている。同年8月18日の政変。新選組は御所の南門角(堺町御門)を警護した。実はこの時、奇しくも小野藩主従も幕命を受け、御所の警護に出動したのだ。

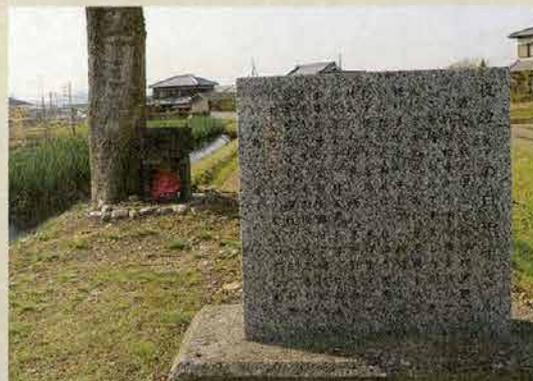
元治元(1864)年6月の池田屋事件にも土方歳三の配下で出動したが、その具体的な活躍ぶりによく分からない。ただし新選組に対し総額600両の褒賞金が出され、うち松原には15両分けられているから、それなりの活躍をしたのは間違いないだろう。

同年末には七番組長、慶応元(1865)年4月には四番組長と柔術師範を兼任している。同年6月には引き続き四番組長であったが、その後身辺が暗転する出来事が起こる。心中事件を起したらしいが、実態は不明だ。死去したのは同年9月1日(墓碑は9月2日)。幕末の荒波の中であつての主従の命運は大きく分かれた。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩 夜泣きの白拍子さん(池尻町)



神戸電鉄市場駅の東方200mほどのところに大木があり、根元に小さな祠があります。祭られているのは源平合戦(ごころ)の一人の白拍子で、悲恋伝説が残っています。

地元では「夜泣きさん」とも呼ばれ、夜泣きぐせのある子どもを連れてお参りすると、ぴたりと治まると言われています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その十八)

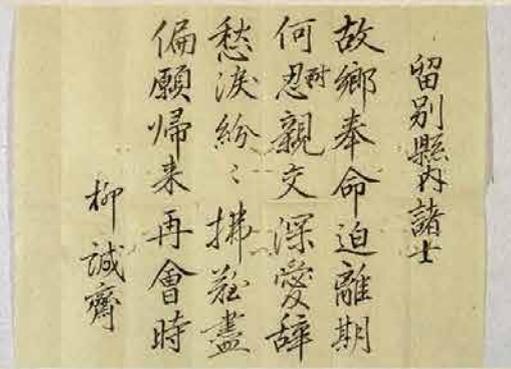
明治4(1871)年の9月25日、最後の小野藩主(維新後は小野藩知事)、一柳末徳は領地・小野を離れ、東京に向かった。その時のものだろう、「留別縣内諸士」と題する一篇の別れの漢詩を残した(本文と写真参照)。「縣内」としているのは同年7月、廃藩置県の勅書により旧小野藩域が「小野県」となったからだ。今月はこの漢詩を中心に維新期の一柳家の姿を探ろう。

今年になって本欄で幕末・維新期に関わる記事が多いのは、今年が明治維新150年の節目に当たるからだ。

小野藩兵が「北越戦争」(1868年)に出陣したことは何度も書いた。6月22日に京都を出発。7月末、8月初め、越後・長岡あたりで戦った。出陣中の9月に慶応が「明治」と改元された。10月末には新政府が「藩治職制」を制定し、藩政は様変わりした。藩主の権限は大きく奪われていく。

これ以降、姫路藩をはじめ有力諸藩が版籍奉還を上奏し、小野藩も明治2年3月、版籍奉還を懇請している。同年6月、版籍奉還が断行された。さらに明治4年7月の廃藩置県により、旧藩主である知事は罷免され、東京に集住させられる。冒頭に紹介した漢詩は

「偏に願う帰来再會の時」  
一柳末徳公、小野に別れ



最後の藩主、一柳末徳が旧藩士に残した漢詩(好古館提供)

字面を見ていただきたいの意味は分かるのだが、正しく読めないのが、大学の先輩で元徳島県立文書館長の立石恵嗣さんに助けを求め、知人の佐藤武・谷恵子両先生(「徳島の古文書を読む会」会員)に訓読していただいた。お二人で若干読み方が違うが、私が勝手にミックスして以下のように読んでみた。故郷に命を奉じ離期迫る／何ぞ忍ばん(耐えん)親交親愛の辞／愁涙紛々として払い尽くし難し／ひとえに願う帰来再會の時を

故郷(小野)で新政府の命を受け、別れの時が迫ってきた。長年親交を重ねた諸士(旧藩士)たちの惜別の詩の数々を我慢できようか。悲しみの涙がこぼれ、拭い切れない。再會の時が来るのをひたすら願う。

だいたいこんな意味の詩であろう。末徳はこの時21歳ぐらい。旧藩士や領民がどんなふうに見送ったのか分かる史料は残されていない。ただ、小野藩創始三百年祭(1937年)の様子や「小野藩史蹟碑」からみても旧主家と旧家臣・領民は良好な関係であったことが推察される。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策委員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 夫婦池古墳(久保木町)



久保木町集落南東の夫婦池中央にある円墳です。この地域を治めた有力者を埋葬するために、5世紀末ごろに作られたものと考えられています。墳丘の表面は栗石によって覆われ、周囲には小型の円筒埴輪が巡らされています。もともとの大きさは直径約15m、高さ約3mありましたが、長年の浸食により小さくなっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その十九)

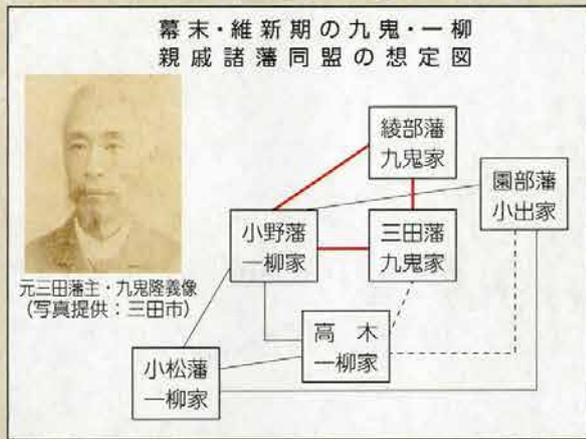
今年が明治維新150年にちなみ、今月も幕末・維新の小野藩の姿を探る。秋の夜長のつれづれに夢想した「九鬼・一柳親戚諸藩同盟」だ。実在した奥羽越列藩同盟にヒントを得たものが、九鬼・一柳親戚同盟は私の想像、いや妄想の域を出ない。

以下「九・一同盟」と略するが、この同盟構想の中軸は、丹波・綾部落(京都府、2万石)・九鬼家出身の兄弟、隆義と末徳だ。隆義は親戚の摂津・三田藩(3万6千石)の藩主になると(1859年)、さっそく弟の末徳を近隣の小野・一柳家(1万石)の養子に送り込み、藩主に擁立する(1863年)。

隆義は三田藩にあつて名君の誉れが高い。開明派で、優秀な家臣を登用し、藩政改革を行い、藩の軍備を洋式に改めている。藩主就任当初まだ14歳だった末徳がこの兄・隆義を尊敬し、何かと相談したことは想像に難くない。

1866〜67年ごろ、この兄弟はよ

### 幕末の九・一親戚諸藩同盟？ — 秋の夜長に夢想した



く病気になる、朝廷側からの召集に応じていない。隆義はまだ幕府側であり、本当の病気もあったかもしれないが、弟にも働きかけ、仮病を使い、時勢の様子見していたのではと想像する。

三田・小野の中軸ラインに綾部落、丹波・園部藩(2万6千石)、高木(三木市)・一柳家(旗本、5千石)、瀬戸内海を渡って伊予・小松藩(1万石)の一柳家も加わる。これら親戚諸藩の石

高を合わせると、10万7千石ほどになる。城持ちでない陣屋の小野・一柳家など個々の藩の石高レベルはまことに頼りない小藩だ。

それが親戚諸藩が連合・結果し、10万石を超す規模になれば、立場や発言力が格段に強まる。幕府も朝廷もその存在を無視できなくなる。九鬼隆義らはこれを狙ったのだろう。現実に明治新政府も藩の規模による区分を大中の3区分とし、10万石以上を中藩としている。中規模藩として無視できない存在というわけだ。

大政奉還後の1867年末には三田藩は尊王倒幕に藩論を統一する。他の諸藩も相前後して朝廷側にくみしている。中でも小野、小松両藩は北越戦争の時(1868年)、共に官軍として出陣。末徳はのち(明治5年)に小松藩・一柳家から正妻を娶(よめ)る。

九・一親戚諸藩同盟が結成されたかどうか示す史料は残念ながら見当たらない。しかし、親戚の藩同士連絡を密にし、情報を交換・共有し、なるべく同一步調をとって幕末・維新の荒波を乗り切ろうとしたことは十分想像できる。

佐野允彦さまのまさひこ……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 慶徳寺のカヤの木(河合中町)



龍のうろこが寺宝の慶徳寺の本堂正面に、樹齢600年といわれるカヤの木が立っています。開基・見芳和尚が手植えしたと伝わり、市の指定文化財になっています。

かつては、高さ約18m、目通り幹囲約4mの大きさがありました。台風で折れ、現在は約10mの高さになっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十)

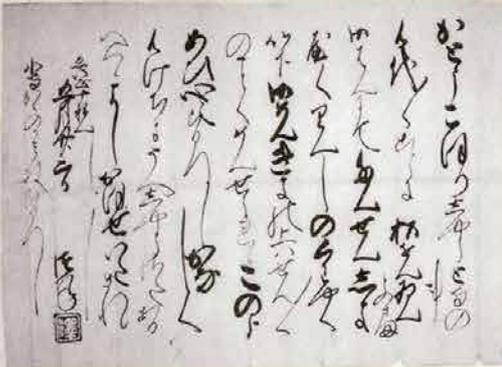
放送中のNHK大河ドラマ「おんな城主直虎」は終盤に入った。戦国時代の女城主をテーマにした本が結構書店に並んでいる。翻って北播地域、とくに小野に女城主はいいたか? 諸書を調べたり、好古館にも尋ねたりしたが、結論としては女城主不在。かろうじて播磨守護家の赤松氏に「女大名」と異名をとる女性がいた。今月はこの女性を中心に話を進めたい。

戦国時代(16世紀初頭)、播磨の名門、赤松氏に一門を仕切る女性が登場する。それが洞松院だ。この時期、円心以来の播磨の雄、赤松氏も一族の内紛、有力武将の台頭などで勢力に衰えが出てきていた。今ブームの「応仁の乱」の頃、それなりの権勢を誇った赤松政則の没後(1496年)、政則の妻の洞松院がまだ若年だった後継の当主に代わって実権を握る。以下、「小野市史・第1巻」などを参考に書き進める。

洞松院は室町幕府の重鎮、細川勝

元の娘で、京都・龍安寺で尼となっていた人だ。細川、赤松両氏の利害関係による政略結婚だった(1493年)。この女性、当時の落書によると、「鬼瓦」と風刺され、不美人であったようだ。夫・政則が42歳で急死したため、若年

大名大戦女にもいた 播磨 小野とも縁、赤松・洞松院



洞松院が出した浄土寺関係の印判状(浄土寺所蔵)=(好古館提供)

の義村が家督を継ぐ。

だが、強力な当主を欠いたことから、赤松一門と播磨には混乱が生じた。ここに登場したのが後家の洞松院で、16世紀初期、亡夫政則の権威のもと一門と播磨を仕切るようになる。「御国

の御成敗」(領国支配)の実権を握ったのだ。私が懇意にしていた大いいる播磨の歴史・民俗の研究者、埴岡真弓さんは、1502年からとみている。このあたり規模は違うが、幼少の当主に代わり井伊家を牛耳ったおんな城主直虎と似ている。

洞松院の権力を示すのが1506年から13年までの間、洞松院の出した印判文書で、5通が確認されているという。社寺の所領・諸職の安堵、税金、訴訟関連などに及ぶ。形式的には若年の当主・義村の意思を奉じる形を取るが、実質洞松院が裁決・処断している。領主権力を行使していたことがわかる。

洞松院を「女大名」、「女戦国大名」と呼ぶ研究者もいる。

印判状の中には浄土寺関係のものもあり、やっと小野と洞松院が結びついた。やれやれ。小野を含む北播磨の武将も多くは洞松院に従ったと見られる。

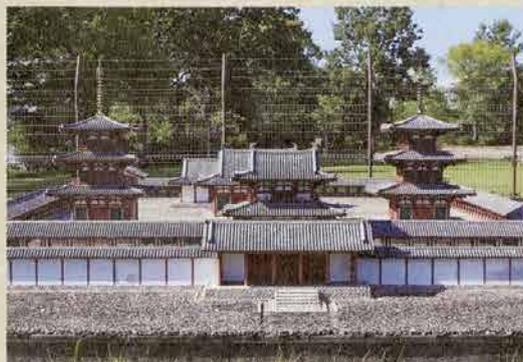
小野ゆかりの女傑といえは一柳満喜子さんだろうが、東京生まれの東京育ちだから縁が薄い。出でよ、現代の女傑!

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

広渡廃寺跡歴史公園(広渡町)



7世紀末に建立された古代寺院跡で、奈良の薬師寺と同じ伽藍配置だったことが分かっています。

訪れた人が昔の寺の姿を想像できるように、屋外に20分の1の伽藍模型を設置。日本で唯一のセラミック製の模型で、瓦の1枚1枚、柱の1本1本まで、丁寧に復元されています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十一)

いよいよ年の瀬。1年の締めくくりで墓参りをし、先祖の霊をおまつりする人もいるだろう。古代のお墓で特徴的なのが古墳だ。横穴式石室では、遺体を収める石室(または玄室)の入り口はたいがい石積みか石製の扉(戸)だ。だが、黍田白雲谷古墳は、木製の扉だったようだ。全国的にも非常にまれなものらしい。なぜ木製の扉だったのか。この謎に挑んでみよう。

黍田白雲谷古墳の木製扉  
“謎の扉”を開けて見よう



黍田白雲谷古墳の埋葬状況の推定図。木製扉も描かれている(発掘報告書より)

さて、肝心の主体部(遺体の埋葬施設)だが、横穴式石室で、遺体を収めた棺を置いた玄室は長さ約3.5m、幅約1mの規模。棺は石棺でなく、木棺だった(痕跡のみ)。玄室に続く羨道部は長さ約4.5mで、石室全体の全長は約8mになる。この石室の中、すなわ

仕切る扉は石製の扉が多く、「閉塞石」と呼ばれる。開閉できるので、のちに別の人を葬むる「追葬」ができる仕組みだ。

では、木の扉はどれくらい珍しいのか。確かなデータはないが、全国でも10例未満しかないとみられる。もっと多かったのかもしれないが、木は残りにくいで、よほど慎重に発掘しないと木の扉の痕跡は見つけられない。それにしてもなぜ白雲谷は木の扉を導入したのか? 西田さんは「玄室の高さが低いことと、玄室のみが石積みだから」と説明するが、どうもはつきり分らない。

この先は私の想像、妄想でしかない。木製扉がごく一時的、ごく部分的に流行った。重い石製に比べ軽くて開けやすい↓出入りが楽↓玄室内に入っておまづりがしやすい(追葬もしやすい)。

注目すべきは出土品にこれも全国的に珍しい装飾付須恵器があることで、古墳の主が旧習にこだわらないハイカラ好きで木製扉を取り入れたのだろうか。どなたかゆびかの風呂に漬かりながらでも想像をめぐらし、謎の扉を開けていただきたい。

まず、黍田白雲谷古墳の報告書(市教委編集、2014年刊)をもとに、この古墳の概略を記そう。所在地は黍田町鎌子山。白雲谷温泉ゆびかのそばにある。ゆびか建設のための開発工事に伴い、平成12年秋、発掘調査がされた。

古墳の規模は東西約9m、南北約11m、現高約1mの円墳。時代は出土した土器などから見て7世紀中ごろと推定される。有名な「大化の改新」(乙巳の変)のころだ。この時代の地方の古墳としては、ごく標準的な大きさだ。

ち玄室と羨道部との境に木製の扉があった。と言っても木の扉が残っていたわけではない。境のところに左右各1個の穴が残っていて、その形状などから木の扉を支える柱(軸)だろうと調査担当者の西田猛さん(好古館副館長)は推察した。

ふつう横穴式石室・玄室は入り口を

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

雲光寺跡(長尾町)



熊野神社南方にある寺院跡で、奈良時代に行基が建立したと伝えられています。かつては三重塔などがあったようですが、三木合戦の時に焼かれ、現在は江戸時代に再建された観音堂、阿弥陀堂、薬師堂が並んでいます。

また、浄土寺の開祖・重源上人が再建した「長尾寺」とも言われ、周辺では土器などが採集されています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十二)

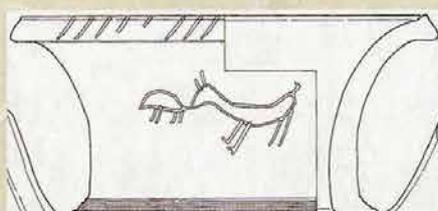
新年あけましておめでとうございませう。本欄の正月恒例で、干支の戌にちなみ犬の話あれこれです。ところが小野市域ではほとんどネタがなく、東北播磨に広がって紹介します。

このところペットブームですが、最人気がやはり犬でしょうか。世界的に見ても人類最初のペットは犬だそう。日本では縄文時代(約9千年前)の犬のお墓が見つかっています。縄文人たちは鹿や猪を狙って狩猟するとき、狩り出す役に犬を使っていたようです。

弥生時代にも狩猟犬として使われていて、有名な銅鐸の絵や土器の絵でその様子が分かります。一例が多可町の宮ヶ谷遺跡で出土した絵画土器。犬が子猪に噛みつく絵で、狩りの訓練をしたとの見方もあります。那珂ふれあい館に展示されているので、皆さんもぜひ一度ご覧ください。

「播磨国風土記」(715年ごろ成立)には犬の話が賀古、飾磨、託賀の3

たれ っこ あれ 塚が 犬あり 町に 犬あり 寺に 犬あり 勝に 犬あり 万に 犬あり



▲多可町で出土した犬の絵画土器 (那珂ふれあい館提供)



萬勝寺創建にかかわる犬塚 (万勝寺町)▶

郡、計4カ所に出てきます。託賀郡の都麻里(西脇市)には、応神天皇の狩犬の「麻奈志漏」が猪と戦って死んだので、墓を作って葬ったという話がある。真つ

白な犬だったのでしよう。犬の名前が分る最古の史料とされています。近くの犬次神社がゆかりの地とされています。犬の墓は犬塚がなまって犬次になったと伝えられています。

いつも頼りにしている好古館から、万勝寺町の構造改善センターの前に「犬塚」があるとの耳よりの話を教えられ、さっそく訪ねてみました。縦長の石が置かれているが、碑文などは刻まれていない。だが、犬塚の由来は「萬勝寺縁起」に記されていました。古刹・萬勝寺西光院に伝わる巻物で、同寺創建の由来が書かれています。それによると、奈良時代、行基が仏法の霊地を探して、犬を連れた獵師に出会い、その犬(靈犬)が案内してくれたという。

平安時代の空海(弘法大師)の高野山草創伝説には、空海が伽藍を営むにふさわしい霊地を捜し求めていたとき、山中で黒と白の二匹の犬を連れた獵師(実は狩場明神)に導かれたという有名な話がある。よく似ていますね。

江戸時代の武家屋敷跡などで人間が食べたと思われる犬の骨がよく見つかっています。県内では明石城のそばの武家屋敷跡の犬の骨が有名です。江戸時代はペットとしてもかわいがったが、食料として食べることも多かった。

犬にとって人間との関係はワンダフルばかりではなかったのですね。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

播州握鋏鍛冶元祖の碑(西脇町)



万願寺川右岸にある大龍寺の本堂南側に石碑があります。小野市の伝統産業の一つである握りばさみを、市内で初めて製造した盛町宗兵衛を記念し、門弟やばさみ商人などにより、嘉永2(1849)年に建立されました。この碑の脇には、宗兵衛の顕彰碑もあり、宗兵衛の功績や辞世の句が刻まれています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会・観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その二十三)

古来、日本人は風呂好きだ。白雲谷温泉ゆびかはチョー人気で、昨年末に500万人を達成した。2月6日は「お風呂の日」だそう。風呂と言えど重源上人だ!? ある晩、自宅の風呂につかりながらひらめいた。今月は重源と風呂について考える。

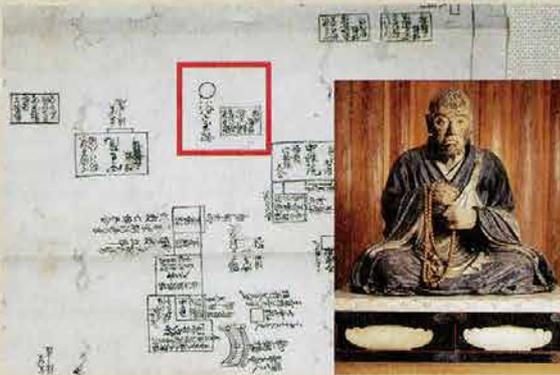
重源については市民の皆さんにはいまさら説明不要だろう。国宝・浄土寺(1197年創建)の開基にして大部荘開発の功労者だ。その重源が浄土寺に「湯屋」も建てていたことを思い出した。好古館で見た浄土寺の古絵図に「浴室跡」と記されていたからだ。

### 重源の浄土寺に湯屋があった「お風呂の日」にちなみ考える

早速「小野市史」を調べた。「史料編1」で、重源の事跡を書いた「南無阿弥陀仏作善集」に播磨別所(浄土寺)に「湯屋一字」を建てたという記述を見つけた。続けて「在常湯一口」とあるのは、いつも湯があったということだろう。

この作善集を見ると、奈良・東大寺に鉄湯船のある大湯屋を建てているほ

か、各地に建立した寺に湯屋を設けていたことがわかる。重源さんはそれほど風呂好きのお坊さんだったのだろうか? いや、自分のためもあるが、寺の僧侶たちの健康管理のため、さらには信者たちの健康保全、病氣治療のため



浄土寺蔵の重源上人坐像(写真右)、浄土寺絵図中の「浴室跡」(赤枠) = いずれも好古館提供

めだったのだろう。

そもそも我が国では、湯浴みは仏教寺院での修行の一つから福祉施策になり、信仰を広める手立てとして普及した。奈良時代、光明皇后が庶民に湯浴

みを施したのが有名だ。重源の湯屋もこうした伝統に基づくもので、勸進布教活動に積極的に取り入れたのだった。「浄土寺縁起」によれば、湯屋は3間4面の板葺き。釜は10石の大きさ、湯船は鉄製で長さ6尺、口3尺5寸で、建久4年(1193年)6月に東大寺から下されたものという。

『小野史談』第64号(2015年)に「浄土寺建立の頃の重源上人と草部姓鋳物師」を寄稿した神生昭夫さんは、「浄土堂で」念仏を唱えたあとの汗びっしょりの人たちの汗流しと憩いと浄土の感覚にひたる場所が大湯屋でもある」と書く。

浄土寺は浄土堂にまつられた、西日を浴びて浮かび上がる阿弥陀三尊像(国宝)の仕掛けで、信者は居ながらにして極楽浄土を体感した。さらにそのそばの湯屋で湯浴みし、「ああ極楽、極楽」とつぶやいたに違いない。

5月には、新装開業で鍬溪温泉もオープンする。湯につかりながら重源上人・浄土寺の湯屋に思いをはせていただきたい。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

亀井が淵(檜山町)



粉くい坂の登り口から丘陵に沿って南へ100mほど行っただころにある湧き水です。

源平合戦の際、この地を訪れた源義経の家臣で弓の名手・亀井六郎が山麓目掛けて矢を放ったところ、不思議なことに岩間より湧き出したとされています。義経一行は、この湧き水で喉を潤し、一ノ谷へ出陣したと伝えられています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その二十四)

今年のNHK大河ドラマは西郷隆盛が主人公の「西郷どん」。第1回を見たら冒頭に東京・上野公園の犬を連れた西郷像、次いで犬を連れ兎狩りをする隆盛が登場した。隆盛は大変な犬好きだった。

幕末の頃は京都・祇園の茶屋にも犬を同伴し、うなぎ飯を食べさせたこともあった。維新後、上京してからはメタボ対策で外国人医師からの指示により犬を連れての散歩や兎狩りに励んだという。

兎狩りと言えば、実は小野藩も藩をあげて盛んに行っていた。単にレジャーとしてでなく、軍事訓練の一環であり、さらに兎の血をもとにした薬、「兎血丸」をつくるためでもあった。卯年だった2011年1月の市広報の本欄にこ

西郷どんも兎狩りをしていた  
小野藩は狩りをし兎血丸づくり



写真右は、犬を連れた西郷隆盛の銅像(東京・上野)、左は兎狩りの記事がある「公私日記」(好古館提供)

子(狩場の人夫)300人、網張人足27人なども出勤。捕獲した兎6匹の生血で医師3人が丸薬「兎血丸」を製剤した。

この薬は小児が天然痘にかからないようにする予防薬とされ、藩はこれ

が製剤をしたところが少なくないようだ。

小野藩では秘薬としていたが、その製剤法・服用法が藩外に漏れていた。

『小野市史』は、「播州小野の殿様より出る御薬」という他藩の史料を載せている。この文面だけでは殿様自ら情報を漏らしたのか、小野藩から流出したのか判然としない。隠密か忍者が小野藩に忍び込み、秘薬の製法を盗み出し、脱兎のごとく逃げ出したのだろうか。

小野藩一柳家の親戚、伊予・小松藩の一柳家でも、兎血丸をつくるための兎狩りをしてきた。増川宏一ら著『小さな藩の奇跡 伊予小松藩会所日記を読む』(角川ソフィア文庫)によると、代々の藩主は狩りを好んでいて、ひばり取りや鶴狩のほか猪や鹿も狩っている。

ただ規模がかなり大きく、動員された勢子の人数は1,346人(1730年)、1,070人(1758年)などと千人を越すときもあった。小野藩の有に三〜四倍の規模だ。

ただし、小野藩でも野雉狩で総勢1,223人も動員したことがある(好古館教示)ので、1844年の兎狩りはたまたま小規模だったのかもしれない。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩  
妙見塚古墳(船木町)



コミセン下東条の南にある古墳。かつてこの付近にあった約100基からなる船木・中番古墳群の主墳です。この地方では数少ない前方後円墳の一つで、全長約34m、周囲には幅約2.5mの堀があります。墳丘は、二段になっていて、周囲には円筒埴輪が置かれていました。古墳時代中期ごろの築造と考えられています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

藩重臣(中老)、黒石長道の日記「公私日記」に記録されているが、1844年の兎狩りは鉄砲組のほか百姓の勢

領民に無料配布したという。私は以前これを小野市の小児医療費無料化の先駆けだと紹介した。兎血丸は天然痘予防の特効薬とされていたせいか、藩命により藩の医師

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十五)

大河ドラマ「西郷どん」にちなみ、3月号本欄で西郷隆盛と兎狩りのことなどを紹介した。隆盛は西南戦争(明治10年=1877年)にも犬を連れて参戦した。西南戦争は言うまでもなく西郷が起した土族による反乱だ。

実はこの戦争に旧小野藩の士族が政府軍兵士として従軍していた。4月8日までこれをテーマにした企画展が市立好古館で開かれている。今月はこの企画展を中心に紹介したい。

旧小野藩士族が西南戦争に従軍していたことはまったく知られていなかった。これが分かったのは、2011年に元藩中老の家柄の伊藤家から約6千点の古文書などが好古館に寄贈されたことによる。伊藤家は小野高校の前に屋敷があった。

好古館は神戸大学と協同で昨年から3年計画で古文書群の解説を進めており、政府軍の軍人となった伊藤家の子弟が家族に戦争の様子を伝える手紙などがあることが分かったのだ。

開催中の企画展は、この成果の一端を披露したものだ。

さて、その人物は伊藤景治。1853年、伊藤家の三男として誕生。1875年ごろ、陸軍・大阪鎮台の砲兵から東京の近衛砲隊に転入。1877年の西

西南戦争に旧小野藩士が従軍  
元藩中老の子弟が政府軍側で



写真右は、伊藤家に所蔵されていた明治中ごろの軍服。  
左上は明治10年3月15日付の手紙、下は同9月8日付の手紙。  
(いずれも好古館所蔵)

南戦争に従軍することになった。筆まめの上、家族思いだったようで、従軍中も小野の実家に戦争の様子や安否を知らせる手紙をせっせと送っている。

まず注目するのは3月15日付の手

紙。同9日に博多に上陸、征討総督の有栖川宮を久留米まで警護する予定を伝え、賊軍を熊本から鹿児島まで追い落とし、海陸両軍でその本拠を撃破するとの策を報じている。その後、山鹿、熊本、鹿児島などと転戦するが、いつも後方部隊、後備えという感じで、実際の戦闘には加わっていない。

5月8日付の手紙では、1日に熊本城を出発、4日に鹿児島上陸、5日から8日にかけて城東の多賀山に大砲2門と出張し、無事引き上げたと伝えている。

さらに9月8日付の手紙では、鹿児島薩摩兵は400人余りであり、今月中旬には鎮定できるとであろうとの見込みを述べている。末尾に追伸のような形で「隆盛も未だ無事の由」と伝えられているのが注目される。西郷が城山で自刃したのは24日だった。景治は29日に神戸港に帰還した。ただし、コレラに似た病気がかかっていたという。

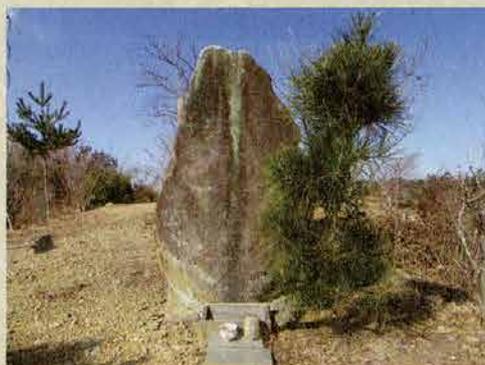
景治の手紙を読むと、明治7年のものでは兵役を嫌がっていたようだ。それが同10年になると、「国家のために粉骨砕身する」と書く。軍隊は人を変えてしまう証左だ。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。  
平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

泣き石・大日塔碑(河合西町)



青野ヶ原台地山腹部に立つ、高さ約2.7メートルの自然石の碑です。むかし有力者がこの石碑を屋敷に持ち帰ったところ、帰りたいと泣いたので元に戻したという伝承があり、「泣き石」と呼ぶようになりました。

碑面に大きく刻まれた塔の絵の頂部に大日如来を示す種子「バン」が刻まれていることから「大日塔碑」とも呼ばれています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その二十六)

下来住町に「鍛溪温泉」が10日、リニューアルオープンする。言い出しつべは詳らかではないが、「関西最後の秘湯」だそう。人気の白雲谷温泉ゆびかは新発掘の温泉だが、鍛溪は古来の温泉の再活用だ。小野を含む北播磨の人々はよほど温泉好きのようだ。その歴史は戦国時代にさかのぼる。今日は温泉の湯の香に浸ってみよう。

「塩泉」であれば、歴史は奈良時代、「播磨国風土記」にまでさかのぼる。2013年4月号の本欄でも紹介したが、同風土記には「穂積の里」(旧滝野町)をはじめ4件の塩泉の記述がある。ただし、動物が飲んでいたという話で、人が入湯していたという話は伝わっていない。

庶民の温泉浴は江戸時代を待たなければならぬ。江戸中期〜後期になると庶民にも多少経済的余裕ができて、伊勢参りなどの社寺参拝のほか、温泉旅行も盛んになる。信仰、湯治を兼ねたかけがいのないレジャーであった。

### 江戸時代から温泉ブームに 鍛溪温泉、再開業に寄せて



写真右は、リニューアルオープンする鍛溪温泉(下来住町)、左上は有馬温泉入湯願が記された「公私日記」=好古館提供

『小野市史』第5巻(史料編Ⅱ)に但馬の温泉や有馬温泉への「入湯願」が計4件収められている。領民は勝手な領外移動は禁じられていたので、庄屋などを通じ藩奉行所へ届け出なければ

ならなかった。あくまで「療養」「湯治」が名目で、物見遊山とは書けなかった。『公私日記』にある「有馬温泉入湯願」は文面からして藩士のものであろう。

1件は安政7年閏3月のもので、伊藤忠右衛門、崎田祐之進の二人が「腰痛に難儀していて医師から湯治を勧められたので、三廻り入湯したく、出入り二十三日のお暇をいただきたい」と願っている。もう1件は全身に痒物(皮膚炎)ができて難渋しており、これも「三廻り入湯」したいと願っている。

三廻り入湯の意味がよく分からなかったが、ネット検索してみたら分かった。江戸期から「湯治は七日一回り、三廻りがよい」とされていたそう。『出入り二十三日』というのは三廻り(21日間)と行き帰りの2日間ということだろう。ちなみに伊藤忠右衛門は4月号で紹介した伊藤景治の先祖(祖父?)と見られる。

さて鍛溪温泉の話。『加東郡誌』などによると、鍛溪神社の神託により天正10(1582)年、湧き出した。江戸時代から霊泉として評判を呼び、昭和初期まで温泉旅館もあったという。中断していた時期もあったが、小野市の後押しもあり、このたび再開業する。和風木造平屋が新築され、地元の人たちが運営していく。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

## 市指定文化財に 新たに3件を指定

歴史を伝える貴重な遺産を市の文化財に指定しています。8年ぶりに新たに3件を指定しました。これで市の指定文化財は25件になりました。



①阿弥陀如来立像(浄土寺)

顔の表情、着物の様子に鎌倉時代の名仏師「快慶」の作風が認められます。



②懸仏(垂井町住吉神社)

安土桃山、江戸時代に奉納されたもので鏡面に仏像などが描かれています。



③三十六歌仙図絵馬(同右)

歌道の上達、祈願成就のため奉納された絵馬で、鮮やかな色彩が残っています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十七)

今からちょうど150年前の慶応4(1868)年6月、河合中村の豪農、三枝治寛は明治新政府の財務官僚、由利公正から兵庫(神戸)に呼び出されてきた。由利は坂本龍馬が暗殺される直前の手紙で、新政府の財政を担うのは彼のほかになしと推挙していた人物だ。「五箇条の御誓文」の草案作成者でもある。今日は三枝と由利を中心に話を進める。

明治新政府に財政策を提言  
河合中村の豪農・三枝治寛

冒頭、豪農と書いたが、三枝(五郎兵衛)家はただの豪農ではなかった。以下、「小野市史」に拠りながら書き進める。戦国時代は小堀城を居城とする土豪と伝え、江戸中期には青野原新田の開発にも取り組む。村の庄屋のほか、徳川御三卿・清水家の所領の取締御用も務め、名字帯刀を許された。さらに、金融・問屋業も営んだ家柄だった。

慶応3年10月、三枝篤治・治寛父子は、清水家に所領経営に関する意見書を提出した。所領の一体化と合理的・

効率的運営、地域の人々による地域経営、紙幣に対する信用強化など画期的なものだった。



三枝治寛の父、篤治が寄進した報徳燈(河合中村の新宮神社)写真右  
左は、治寛の記した建言書(好古館提供)

政府は会計官(いまの財務省)を設け、その中核は福井藩出身の由利公正が担っていた。治寛は慶応4年5月、その由利の京都私邸で面談し、政府が計画している金札発行について提言。さらに由利の求めに応じ年貢・諸役の負担の公平・低減化、郡単位で流通する錢札

(御用札)の発行、米穀・塩・みそ・酒などの製造・流通への関与などを書面にまとめて提出した。さらに、播磨一國でこれらの政策実施を自らが担いたいと願っている。地域、財政運営の手腕には相当の自信を持っていたようだ。このような治寛と、福井藩の財政再建を成し遂げただけでなく、その知見・才覚から新政府の財政の大黒柱たらんと奮い立っていた由利は肝胆相照らす仲になったに違いない。

由利はさらに治寛を登用していく。慶応4年6月、兵庫(神戸)に出張していた由利はまたも治寛を呼び出す。これが冒頭の場面だ。治寛はそこで加東・加西・多可3郡の会計責任者(取次)に任じられ、困窮者の救助法について下問されている。

以後、月に三度ほど兵庫商法会所に出頭し、太政官札の貸付、回収の業務に当たっている。この会所では市場出身の豪商、近藤文蔵が元締に任じられていた。今年(150周年)になるが、県政の創成期に小野市域の人物2人がその財務行政に関与していたことはもともと知られてよいことだ。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

義経の腰掛岩(榎山町)



源平合戦の際に源義経軍が三草山(加東市)から一の谷(神戸市)に向かう途中で小野市を通ったとされ、榎山町には源義経や武蔵坊弁慶にまつわる言い伝えや旧跡が残っています。

その一つ「義経の腰掛岩」は、神戸電鉄榎山駅の西方の雑木林内にある大きな石で、義経が腰を掛けてひと休みしたと言われています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十八)

6月号の本欄で明治150年、兵庫県政150年にちなみ、明治新政府と兵庫県政の財政面で活躍した河合中村の豪農、三枝篤治・治寛父子のことを紹介した。調べると、県出身の近世史研究者、山崎善弘さん(50)

「東京未来大学講師」に三枝家の事績を扱った著作『近世後期の領主支配と地域社会』(清文堂、平成19年刊)があることがわかった。今月はこの本をもとに三枝家のことをもう少し紹介したい。

江戸時代、三枝家は代々庄屋を務めたが、大きな転機は、山崎さんによれば、御三卿・清水家領の「取締役」に任じられたことだ。取締役は1793年以降に御三卿・清水家が設けた農村支配役で、農村復興をはじめ農政の多様な職務を担う。三枝(五郎兵衛)家は遅くとも文政3(1820)年以降、取締役を務めている。飢饉に備えた「社会」の管理や困窮農民の救済、治安維持などに当たっている。困窮農

民救済のために金115両の出資を願い出、さらに社会の建て替えの用地を提供し、建て替え経費も出資している。天保年間(1830年代ごろ)には、三枝家の田地持高は400石ほどで、



戦国期、三枝家が居城としたと伝える小堀城跡(河合中町)写真左。右は市立図書館にある山崎さんの著書

河合中村では断トツ。清水家領の播磨地域でも「一番」の豪農に成長していた。三枝家の多額の出費によって清水領内の「百姓成立」(小農経営維持)が大きく支えられていたと言っている。山崎さんは高砂市出身。花園大学

から関西大学大学院に進み、地域史研究に取り組み。そんな中、1995年ごろに出合ったのが三枝家文書だった。当時の市史編纂室に通い、2千点以上もの史料に目を通したそう。

特に三枝家の清水家領「取締役」という政治的立場に注目し、それを主題に2003年、大学院に博士論文を提出。これが冒頭に紹介した本のもとになったという。三枝家の功績として「本来、領主の社会的責務である『お救い』(領民に対する救済行為)を三枝家が肩代わりすることで、地域社会を安定に導いていたことを挙げたい」と話す。

山崎さんが一番印象深かった文書は、慶応3(1867)年10月、篤治・治寛父子が清水家に提出した所領経営に関する意見書だという。山崎さんは「体系的な地域運営構想が地域の側から提示された例は全国的にも多くなく(略)、三枝父子の力量は高く評価してよい」とする。さらに、「これらの構想の一部は明治政府によって受け入れられた」と言い、「三枝家が近代国家成立期にどのように活躍したのかを詳細に明らかにしたい」と意気込む。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

大島町出水(大島町)



垂井町と大島町の間にある大規模な自然湧水。年中絶えることなく清水が湧き出しています。池の水は、丸太が井桁状に組まれた底まで見えるほど澄んでおり、現在も付近のかがい用水として利用されています。

また、池の堤には珍しいアカメヤナギの木があり、昭和63年3月に市の指定保存樹木に指定されています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その二十九)

カジノを含む統合型リゾート(IR)法案を会期延長までして、政府は国会中に成立させる構えだ(7月初旬現在)。ギャンブル依存症への十全な対策を先送りし、2020年の東京五輪に間に合わせようとしている。本欄は市の広報誌であるから、現代の政治課題への賛否の表明は控える。ただ、江戸時代の小野(藩)のばくち事情に触れておきたい。

昔も今も再犯やまぬ“ばくち癖”  
カジノ法案は危険な賭けだ

このテーマは、2014年6月の本欄です。紹介した。ここでは小野藩は家臣に対し、ばくち、好色、乱酔などを禁止したほか、百姓・町民に対してもばくちを戒め、罰則を設けていることを述べた。禁令が手を変え品を変え度々出ているのは、ばくちがやまなかつたからだろう。小野近辺の御三卿・清水家領でも先月号で紹介した取締役の三枝家が悪党者ばくちの取締りに当たっている。

ばくちの再犯に関して『小野史談』第58号(2012年1月刊)に面白い史

料を見つけた。小野町の町年寄役を務めた葉屋忠左衛門の職務上の記録だ。そのうちの「不実の筋の申渡 覚」の2件が、賭博の処分にかかわるものだ。1件は数人の町民が「不実の筋」(ば



ばくちを戒めた小野藩の  
裁決文を収めた「町役用  
控」の一部 (好古館提供)

くち)の罪で入牢や手鎖の刑罰を受けたにもかかわらず再犯を犯したのは不届きだったが、格別の容赦をもって過料金にとどめたという経緯がわかる文書だ。

そこでは家業を怠り、金銭を浪費することを戒め、家業に専念し、実直に渡世をすこせば「家業繁盛の基」になる

と諄々(しんぜん)と説いている。あわせて町役人・組頭たちの監督不行き届きの責任も追及し、罰金を申し付けている。また取り締まり以前に町方で相互に吟味(しんみ)監督)するよう求めている。

小野藩・一柳家の親戚、伊予・小松藩でも賭博は厳禁だったが、領民の間で賭博が絶えなかった。それどころか大目付ら上級藩士の家来(中間・小者)までがばくちに手を染め、9人が検挙されるという事件も起きた(「小さな藩の奇跡」角川ソフィア文庫)。幕末の1848年のことで、よりによって賭博の現場が藩主専用の松茸山の番小屋であった。藩重臣らは家来の監督不行き届きを理由に謹慎を申し出たという。

小野市は2013年、福祉給付制度適正化条例を施行した。生活保護費などを過度のギャンブルで浪費させないなどが目的だ。市民による情報提供も求めている。主旨は小野藩のばくち禁令と似通っている。すでにパチンコでの浪費や過度の飲酒への指導をし、改善させる実績を挙げている。

カジノ法案成立が本当に国民の幸せにつながるのかどうか、これは危ない賭けだ。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

近津神社(粟生町)



杉木立に囲まれた境内はよく整備され、県の指定文化財になっている石造鳥居など、基の鳥居をくぐると、氏子から寄進された多くの灯籠が参道脇に並んでいます。

伝承によると、昔、粟生の山に光を放つ大木があり、その麓に当社を造ったところ、一つの穴が開き8本の木が生え、清水が湧いたということです。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その三十)

今から140年前の明治11(1878)年、東京で近衛兵の反乱から厳しい取り調べを受けたあと、処断された兵士の中に小野出身者が2人いた。今月はこの秘話(悲話)を紹介したい。

一人は伊藤景治で、西南戦争に従軍したことだけ今年4月の本欄で紹介した。今回は竹橋事件との関係を述べる。

まずこの事件について簡単に触れる。明治11年8月23日夜、東京・竹橋にあった近衛砲兵大隊が主力となって起こした兵士反乱だ。200人以上の兵士が蜂起し、上官を殺害、天皇に直訴すべく仮皇居へ進軍したが、鎮圧された。死刑55人を含む約360人が処罰された。

前年の西南戦争従軍の恩賞が不十分だという不満などからの反乱とされたが、徴兵制への批判、自由民権思想の高まりが背景にあったとの見方もある。明治政府は事件直後に「軍人訓誡」を出し、さらに「軍人勅諭」と発展させ、軍国主義の道を歩んでいく。

### 連座に反乱の兵衛近衛められた 「竹橋事件」に小野出身の2兵士

伊藤景治は、西南戦争後も引き続き近衛砲兵大隊に所属していた(当時伍長)。郷里・小野の兄に当たった手紙(9月4日付)によれば、事件当夜、営庭に突出した兵たちに対し、小隊長と



竹橋事件を描いた錦絵  
「近衛兵暴動録之画」  
(明治大学博物館所蔵)



事件について兄に書き送った伊藤景治の手紙  
(好古館提供)

ともに防戦するため階下に立って剣を抜いたが、「相手方多数につきどうしようもなかった」「(出動せず)在営していた自分たちも参加した嫌疑をかけられている」と記す。手紙をこのまま読めば、伊藤は反乱兵を抑えようとした

側だったが、「鍋28日」の処罰を受けている。冤罪だったと言えよう。

死刑に処せられたのは、陸軍裁判所の「口供書」によると、加東郡下部村(当時)の沢本久米吉(25歳)。明治8年4月に近衛砲兵大隊に入隊している。「竹橋事件の兵士たち」(1979年)によれば、沢本家は木綿業の豪商で、加古川に舟運のための自前の棧橋を持つていたという。家の口伝では商用の途中、強盗に鉄砲で打たれて死んだとされていた。

では、沢本の罪状はどんなものだったのか。事件当夜、大隊で寝ていたが、物音(金庫を壊す音)を聞いて事務所2階へ行き、誘われて50銭札・10銭札らしいもの厚さ2センチほど持ち出して、自室の寝台のわら布団に隠したという。ただこれだけで死刑にされたのだ。

罪状の軽重はあるが、軍国化を強める時代の波に翻弄され、犠牲となった2人の青年であった。

この一文を書くに際し、沢本のご遺族を含む関係者に事前了解を得ようとしたが、関係者の所在が分からなかった。市民の皆様には2人に対して曲解されないようくれぐれもお願ひしたい。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

大歳神社(脇本町)



昔、都で父を殺された幼い公達が、脇本町まで逃げてきました。空腹で動けなくなりました。かわいそうに思った村人たちは、大歳神社へ連れて行き、白酒を飲ませて三日三晩かくまつたそうです。

以後、毎年その日の9月12日に「大歳講」として大歳神社に集まり白酒を酌み交わすようになったと伝えられています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その三十一)

10月1日は「日本酒の日」。播磨とお酒は意外と縁が深い。今月はお酒の話だ。

ここ数年、「播磨は日本酒のふるさと」とアピールする活動が盛んだ。その根拠は、約1300年前に編纂された「播磨国風土記」にある。宍粟(宍粟)郡の「庭音村」の地名由来話だ。もとの名は「庭酒」。大神の食糧が濡れたので、酒を醸させて「庭酒」としてたてまつり、宴会を開いた。それで「庭酒の村」という。米飯の麴カビを使って酒を醸した日本酒醸造の最古の記録とされている。ちなみに「はりま酒文化ツーリズム」に取り組み播磨広域連携協議会には、小野市も参加している。

また、同風土記の託賀(多可)

郡荒田の地名由来話でも酒が登場する。2017年5月号の本欄で紹介したが、再度簡単に触れる。

荒田の道主日女命が父の分らない子を産んだ。父を探る「盟酒」を醸造し、諸神を招き、その子に酒を捧げさ

### 「播磨国風土記」などに見る酒 「日本酒の日」にちなみ探る



▲都の公運にちなむ祭りを伝える大歳神社(脇本町)

◀音も楽しんだ酒器と見られる王子辻ノ内遺跡出土の甕(好古館提供)

せた。子は天目一命に捧げたので、父が知れたという荒筋だ。

この「盟酒」にしろ先述の「庭酒」にしろ、いずれも神様がらみだ。古代の酒造は基本的に神様がらみで、酒宴も神

ど酒好きだったのだろうか。

小野エリアで酒がらみの話を探していたら、大歳神社(脇本町)の「講当」を知った。昔、都で父を殺された幼い公達が逃げてきて、空腹で動けなくなっていたところ村人たちが助け、大歳神社で白酒を飲ませ三日三晩かくまった。公達はその後天皇になった。村人たちはかくまった9月12日に毎年お参りするようになったという伝承だ。風土記にもあるオケ・ラケ2王子(仁賢・顕宗両帝)の伝承がこうした形で伝えられているのは、非常に興味深い。

締めは考古遺物の話だ。2006年11月、小野郵便局に近い「王子辻ノ内遺跡」で、古墳時代後期(6世紀後半〜7世紀初め)の遺構から須恵器の壺の一種、「甕」が出土した。注目されたのは中に土の玉が入っていたこと。甕は酒器とされ、調査した当時の好古館職員・西田猛さんは「お酒を飲んで、空になったとき、揺すって音を鳴らして風情を楽しんだのではないだろうか」と話したものだ。

秋の夜長、少しお酒を楽しまれ、酒の歴史に思いをはせられてはいかが。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

## 11月3日に歴史講演会

小野地域で活躍した人物や出来事を紹介する「明治150年記念 文化の日歴史講演会」を開きます。

江戸時代に河合中村の庄屋として活躍した三枝家の古文書などをもとに、幕末維新期の小野地域の動向を踏まえながら、三枝家が地域社会、さらには維新政府で果たした業績を紹介します。講演会場では関連資料のミニ展示も開きます。

日時 11月3日(金)14時〜15時45分  
場所 コミセンかわい大会議室

演題 幕末維新期における三枝家と地域社会・国家―「地域の偉人」の事績を学ぶ  
講師 山崎善弘さん(東京未来大学専任講師)

参加費 無料

主催 小野市・小野市教育委員会  
共催 小野の歴史を知る会

◎好古館(☎0833390)



やまさき・よしひろ

1968年、高砂市生まれ。2003年、関西大学大学院修了。とくに地域史研究に取り組む。著書に『近世後期の領主支配と地域社会―「百姓成り」と中間層―』、『徳川社会の底力』など。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦のおの歴史散歩余話(その三十二)

6月号、7月号の2回本欄で、幕末・維新期に活躍した河合中村の豪農、三枝篤治・治寛父子の事績の概略を紹介した。「小野市史」と山崎善弘・東京未来大学専任講師の「近世後期の領支配と地域社会」に拠っての記述だった。その際、私が個人的に興味を抱いたのは、篤治が野狐に取りつかれた村人の女房に対し、私費で医師の治療を受けさせ、全快させたという話。「狐憑き」の俗信にまで庄屋がきめ細かな対応をする「地域医療」の先駆けとして感心したのだ。

この事例を紹介する前に、狐憑きのことをごく簡単に記しておく。昔は人がヒステリックになり、奇声を発したり、飛び跳ねたり、奇怪な言動をし、時に他人を害したりするのを「狐の悪霊」が憑いたとして、「狐憑き」と呼んだ。古くは『今昔物語集』にも記されており、豊臣秀吉は武家の女に憑いた狐を怒り、「毎年全国で狐狩りをする」と脅したという。

### 狐憑きの農婦を医師に治療させる 河合中村・三枝家の手厚い「御救」



狐憑きが「お救い」により医師の手当てを受けて全快したことへの三枝治寛宛て礼状(好古館提供)

民俗学の立場でいち早く注目したのは、旧福岡町出身の柳田国男だ。「巫女考」(1913年)で言及している。自伝的著作『故郷七十年』では、辻川の狐狩りという行事のことを紹介している。

ら管轄地域の医療行政にも当たっていた。貧しくて医者にかかれぬ領民を、加西郡東長村の医師、小野寺定敬に命じ治療させていたのだ。そこに狐憑き騒ぎが起きる。

玉野村・忠治郎の女房が7月上旬から「癩症」になり、いろいろ療養したが改善せず、占ったところ「野狐」に取り憑かれたと分かった。そのための手当て(祈祷か)もしたが改善せず、小野寺様の治療を受けた。「大患危篤」の症状と言われたが、薬用したところ、全快した。これは(篤治様の)「御憐愍」のおかげだ。

こういう主旨の報告書兼礼状を嘉永3年12月に「河合中村病患御救所」に出している。この宛所は篤治の居宅のことで、医療費は篤治が小野寺に支払っていた。つまり三枝家は医療行政の先機関にもなり、しかも医療費の無料化まで実現させていたわけだ。

当時、狐憑きはほとんど医者に診てもらえず、たいていは祈禱師、山伏、巫女などの民間療法に頼っていた。患者は過度な呪術でときに死に至ることもあった。それが東播では庄屋も医師も「治療で治る」と適切に対応したのだ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 石造阿弥陀三尊種子板碑

(青野ヶ原町)



薬師堂境内の西側に東を向いて建っている三基の石碑があります。そのうち右端が三尊種子板碑で、高さが約0.9メートルあります。凝灰岩質の組合式石棺の底石を再利用したもので、碑に彫られた銘文から建長8(1256)年に造立されたことが分かります。県内の銘文をもつ石造物の中で最古の遺品で、県の指定文化財になっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その三十三)

好古館では「小野藩陣屋町と村のくらし」をテーマに特別展が開かれてい  
る。今月は同展で展示されている町役  
人の記録を中心に話を進めたい。

市民の皆さんはすでにご存知のこと  
と思いますが、まず簡単に陣屋町につ  
いておさらいを。

小野藩は寛永20(1643)  
年に立藩、所領1万石のため城  
を構えられず、陣屋をまず敷地  
村に開設。その後1653年に  
門前村(現・神明町)に移転、合  
わせて陣屋町(小野商店街一  
帯)を整備した。延長約730  
呎の「新道」を敷設し、約95軒の  
商工業者の屋敷が建ち並んだ。

さて、冒頭の町役人とは、江  
戸後期、陣屋町に屋敷を構えて  
いた糺屋(梶原家)藤兵衛。屋号の通り  
代々糺商売を家業としていた。この家  
に約4百点もの文書が残されていて、  
平成15年にそっくり好古館に寄託され  
た。

その古文書群(梶原家文書)の中核  
になるのが「御用向之控」。天明3(1

陣屋町の暮らし浮き彫り  
町役・糺屋藤兵衛の記録



「糺屋」だった梶原家(本町)。写真右上は「御用向之控」の表紙  
(好古館提供)

783)年に年寄役になって以来、約30  
年間の役向きの記録が綴られており、  
3冊が現存している。  
今夏、目録作成と解説に取り組んだ  
のが、好古館館長・石野茂三さんと、神

戸大学人文学研究科の特命助教、加  
藤明恵さん。先般、加藤さんにお話を  
伺った。「町内の出来事、町と村との関  
係などで大きい出来事や問題について  
きちんと書き留めています。几帳面な  
人だったようです。これだけ長期間に  
わたって書き続けられた町方の記録は

珍しいですよ」と評価された。

注目した史料として、天明8年に門  
前村との町域を定めるのに杭を打つな  
どする作業に藩役人とともに立ち会っ  
た件など4点ばかり挙げていただいた。  
そのうち私が興味を持ったのは寛政元  
年、天候不順で「高水」(洪水)になっ  
たとき、陣屋でお粥の炊き出しをした話。  
藩の善政を感じたからだ。

また、天明4年10月8日、幼児の捨  
て子があり、最終的にある家が養子と  
して引き取る。その家に対し町方から  
祝儀として銭10匁、上様(藩)から米1  
俵が渡されたという。「捨て子の古格  
(古くからの決まり)」によるものと書  
いているが、町方、藩ともに優しい対応  
をしていたことがわかる。

一方、厳しい面もあったのは寛政元  
年の「大坂御用人足」の件。藩役人が  
大坂に出張した際、町から出した人足  
の勤め振りが悪く、お叱りを受けたこ  
とも記している。

ほかにも愛宕神社で富くじ(宝く  
じ)をしたことなど当時の陣屋町の様  
子がわかる記録が満載だ。特別展は24  
日まで。ぜひご覧ください。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。  
平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
葉多城跡(葉多町)



加古川左岸の段丘先端部に築かれた  
室町時代ごろの城跡です。北と西は高  
い崖になっていて、東と南に幅6呎、高  
さ3呎の土塁を築き、防備を固めてい  
ました。稲荷神社がまつられている場  
所は、一段高く広いことから櫓があった  
ようです。現在の城山グラウンドが、  
かつて土塁に囲まれていた城内で、武士  
たちの生活の場となっていました。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光  
交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で  
販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その三十四)

昭和21(1946)年1月1日の新聞各紙に、いわゆる昭和天皇の「人間宣言」の記事が掲載された。戦前戦中、現人神とされていた陛下自らその神格性を否定された、戦後史上の重大事件である。「昭和」も遠く去り、「平成」最後の正月にこの話を少し紹介したい。

小野と何の関係があるの？

市民の皆さんの疑問は「もっとも。直接的には何の関係もない」と言っただけ。ただ、この「人間宣言」の背景に、小野藩最後の殿様の姫、一柳満喜子さんの夫、W.M.ヴォーリスさんが関与していた(かもしれない)のだ。以下、奥村直彦著『ヴォーリス評伝』(2005年)などによりながら書き進めたい。

### 昭和天皇の「人間宣言」 ヴォーリスさん係わる？



写真右は、昭和天皇の人間宣言の朝日新聞記事(1946年1月1日付)  
左は一柳満喜子・ヴォーリス夫妻(ヴォーリス記念館提供)

天皇現御神にあらず  
君氏信賴と敬愛に結ぶ

欲しいという2件だった。ヴォーリスさんは勇躍、東京・横浜に出向き、GHQ関係者らと折衝し、かつ9月12日には「マッカーサーが受け入れるに足る」天皇の一言を含む詔勅、または宣言文の草案を得た(ヴォーリスの日記)。

ヴォーリス夫妻の軽井沢山荘に、敗戦後間もない1945年9月6日、ある重要人物が訪れた。元首相・近衛文麿の側近、井川忠雄だ。用件は、近衛と連合軍総司令官・マッカーサー元帥との会見を段取りすることと、天皇は軍国主義者でないことを元帥に伝えて

さらに、GHQ関係者に会い、先の件が元帥に伝わり、近衛との対面を承知したことなどを知らされた。そして「今やすべてはうまく行ったように思う」と日記に書いた。彼は翌年元旦の新聞に掲載された「人間宣言」を読み、

満足そうだったという。自らの草案が受け入れられたと思ったのだろう。

しかし、昨今の定説では「人間宣言」成立の背景には別ルートがあったとされる。それはGHQのヘンダーソン↓学習院のプライス↓日本政府・天皇という道筋で、ヴォーリス草案提出後の12月初旬から下旬にかけて急展開した。「昭和天皇実録」(宮内庁)もこれを記述している。

だが、奥村氏は「キリスト者として、天皇の神性は認めることなく、人間としての天皇を敬愛してやまなかったヴォーリスこそ、人間宣言の草案作成に最も相応しい人物だったことは間違いないところであろう」と前掲書に記している。天皇への敬愛の背景に元華族の満喜子の影響があったのは想像に難くない。

さらに、現天皇・皇后陛下下の軽井沢での「テニスコートの恋」に実はヴォーリスも一役買っている。その陛下が退位される今年、ヴォーリス夫妻の結婚100周年であり、満喜子没後50年でもある。この機会に昭和史の一幕に思いをはせていただければと思う。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。  
平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

鶴池・亀池(山田町)



鶴池

山田川の源流にある二つの大きなため池です。江戸時代の市場の豪商、近藤亀蔵が、私財約3千両を投じ、3年ほどかけて天保3(1832)年2月27日に完成しました。池の落成祝いの宴に2羽の鶴が飛来して舞ったので、一つを「鶴池」、もう一つを亀蔵の一字をとって「亀池」と名付けたと伝えられています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その三十五)

一月遅れですが、本欄を借りて新年のご挨拶を申し上げます。本欄の新年恒例で、干支の「亥(い)」にちなみ猪の話あれこれをお届けします。

全国レベルの話だが、弥生時代には本格的に猪の飼育・飼養が始まった。もちろん狩猟の主要な対象でもあり、その様子は銅鐸の絵や土器の絵に描かれている。

北播磨では、多可町の宮ヶ谷遺跡で出土した弥生土器の絵が知られている。犬が子猪に噛みつく絵で、去年の1月号でも紹介した。戊(犬)から亥(猪)への干支の移りにぴったりなので、未見の方はぜひ那珂ふれあい館でご覧のほど。

さて、いよいよ小野と直結する話だ。勝手野古墳群(黍田町)で出土した装飾付須恵器に騎乗の男が弓矢で鹿や猪を狙う狩猟の様子を表した小像群がある。これもすでに2〜3回、本欄で紹介済みなので、詳細は省くが、好古館にレプリカが展示されているので、ご覧いただきたい。

小野にも「猪養野」があった  
干支「亥」にちなむ話2〜3



▲勝手野古墳群出土の猪像のある須恵器(県立考古博物館)



猪被害の記述のある江戸期の古文書(好古館提供)

続いて本欄のネタの宝庫、「播磨国風土記」(715年ごろ成立)に賀毛郡山田の里の箇所「猪養野」が出てくる。この地名伝承も興味深い。風土記の記述によると、仁徳天皇の時代に、日向(南九州)の肥人、朝戸君という豪族が

たい。それによると「この猪飼(部)は鴨(賀毛)国造に属したものでないか。猪飼を持つことも豪族の権威を示す手段であったであろう」という。そして猪飼部は「神への犠牲(いけにえ)に用いる猪を飼育し、用意しつづける集団だった」と見ている。

この猪養野は「山田里」(市場地区草加野付近)にあったと見られる。

猪飼野と言えどもや韓国料理で知られる大阪のコリアンタウンのほうに圧倒的に有名だが、市民の皆さんには小野にも猪養野があったことを知っておいていただきたい。

風土記以降、小野がらみの猪の資料はほとんど見つからない。江戸時代は全国的に最も多く猪被害の記録が残っている時代だ。好古館の粕谷修一さんによると、▽小野藩では、寛政2(1790)年に山田村で猪鹿が作物を食い荒らして難渋しているため、米1石5斗をお救い米として支給した▽文化11(1814)年に太郎太夫村(現・市場町)で「猪鹿除垣」が道に近くて問題になつている―という2件の記事がある

という。近年、再び猪被害が目立つ。猪とどう付き合うか、難しい問題だ。

「日本の深層文化」(ちくま新書・2009年)の「猪と猪飼部」を再度紹介し

河合中村の庄屋、三枝家も詳述  
山崎氏の著『村役人のお仕事』

日本近世史の専門家で、東京未来大学専任講師の山崎善弘氏が新著「村役人のお仕事」(東京堂出版)を出版した。「広報おの」で紹介する訳は、山崎氏が昨年11月3日、コミセンかわいで講演され、その主題であった江戸後期、河合中村の庄屋だった三枝家の事跡を本書の中で詳述されているからだ。

本書は江戸時代の村役人4人の仕事を通じて「徳川社会のあり方」を論じたものだが、一章を充てて三枝家の仕事を紹介し、その分量は40ページにも及ぶ。

紙幅の都合で詳しい内容紹介はできないが、三枝家の庄屋屋敷(河合中村庄屋所)を「村(清水領知53カ村)の総合庁舎」のような役割を果たしたなどユニークな視点を披露している。

市立図書館で一般図書と郷土資料として各1冊、購入していただいた。ぜひ多くの市民の方に読んでいただきたいものです。(広報アドバイザー 佐野允彦)

村役人のお仕事



山崎善弘

1

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その三十六)

「えっ、大国隆正が岡本梅林を訪ねていた？ しかも維新後に！」

自宅の最寄り駅、阪急御影から東へ一駅、岡本で下車し、徒歩10分足らずのところ、阪神間で有名な梅の名所「岡本梅林公園」がある。先日、散歩がてらに訪ねてみて驚いたのが冒頭の反応だ。

なぜ驚いたか。それは大国隆正は江戸末期、小野藩の藩校、帰正館の教授として活躍した学者だが、その活躍は幕末で終わっていたと考えていたからだ。梅の季節でもあり、今月は隆正と岡本梅林公園のことを紹介しよう。

もちろん両者についてほとんどどの知識もないため、例によって小野市立図書館と好古館などにさまざまに教えていただいた。

岡本梅林公園は、園内の案内板や同公園のホームページによると、神戸市が管理し、紅梅や白梅、枝垂梅など約40品種、200本ほどの梅の木があるそうだ。見頃の2月下旬〜3月上旬とも

なると、園内は梅の香りで包まれる。

さて、大国隆正だが、明治維新後にここを訪れ「岡本の梅ときつ、来てみれば梅の中なる岡本の里」という歌を詠んだとされる。歌の出来栄としてはイマイチというのが私の率直な感想



▲大国隆正の肖像画 (津和野町郷土館提供)

隆正もめでた岡本梅林公園の梅 (神戸市東灘区、2月16日撮影)

だが、驚いたのは岡本来遊が「明治維新後」ということだった。ここで少し隆正の略歴に触れておこう。

石見(島根県西部)・津和野藩士の家柄で、寛政4(1792)年江戸生まれ。若くして神学、歌学などを学んだ

国学者だ。その学識を買われ、天保11(1840)年小野藩に召し抱えられた(「小野市史」の説)。翌年学問所(藩校)が開設され、隆正は「帰正館」という扁額を揮毫している。この扁額は小野高校に所蔵されている。

嘉永4(1851)年には津和野藩に呼ばれ、学問教授だけでなく、藩政改革にも手腕を発揮した。当代一流の国学者だった。

問題の明治以降の活動だが、明治元(1868)年には「神祇事務局権判事」、同3年には「宣教師御用掛」などとして明治新政府の神道政策に重要な役割を果たした。77歳から79歳の頃だ。

明治4年に亡くなっており、岡本梅林来遊はこの3〜4年間のことと思われる。しかし何年何月の来遊か分かる史料はなく、先に紹介した歌とは少し語句が違う歌を載せた文献(「武庫郡誌」大正10年刊)もある。

隆正の思想性、政治的態度はともかく死の前年まで活躍したことは、シルバー世代の星としてたたえられてよからう。皆さんも機会があればぜひ岡本梅林公園に足を運んでいただきたい。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

岩倉の道標(来住町)



小野アルプス岩倉入り口付近の山道に、趣深い道標があります。道標には、造立年は刻まれていませんが、「右ノ小の(野)町 一(ば)市場) 下(き)し(来住)」「左ノやしろ たきの あを(粟生)」と彫り込まれています。かつてこの山道は、加古川右岸の臨海部と北播磨内陸の町場を結ぶ主要な街道の一つとして位置付けられていたことを表しています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦のおの歴史散歩余話(その三十七)

「小野藩最後の殿様、一柳末徳公の子どもたちは、恵三、満喜子以外もさまざまに活躍していたんだ」。好古館で開催中の企画展「一柳満喜子の遺したもの」を見て、こんな感想を持った。二

男・恵三、三女・満喜子のごとは本欄で何度か紹介した。今回は長男・讓二、長女・千賀(嘉)子を中心に紹介したい。

会場で注目した一枚の写真(本欄中段がある。末徳を中心にその子ども7人が勢ぞろいしている。明治28(1895)年撮影で、裏面には「父上45才」などと歳が記されている。今回紹介する千賀子(末徳の左隣)は24歳、讓二(末徳の右後)は22歳になっている。

まず千賀子。東京・築地の外国人居留地にあったミッションスクールに入学し、欧米の文化に接した。明治23年春に北海道の女学校の教師になり、25、26年ごろにアメリカ留学を果たしている。当時の上流階級の令嬢としては極めて開明的で行動的な生き方だ。子爵令嬢

ながら欧米文化に関心を持ち、米国留学までし、さらに親元を離れ一人の女性として自立しようとした生き方は満喜子によく似ている。他の弟、妹にも強い影響を与えたことは間違いなからう。

最後の藩主・一柳末徳の子弟「文明開化」の世で様々な活躍



一柳末徳と子どもたちの写真(公財・近江兄弟社提供)



伊藤家宛ての一柳讓二の礼状(好古館提供)

讓二は明治20年代の十代後半ごろ

(?)、東京で勉学中だったが、試験時期に精神的に落ち込んだようで、医師から転地療養を勧められた。その後小野藩旧臣に招かれ、しばらく小野に滞在、歓迎された。このことが分かるのは、讓二も末徳もそれぞれ旧臣(藩中老だっ

た伊藤家)に礼状を送っているからだ。讓二は「(小野では)一方ならざる厚遇に預かり感涙に堪えず」と述べている。明治28年4月には第4回内閣博覧

会京都本局出張所に勤務した。末徳は讓二本人の希望で「独立」し働き始めたと伊藤家に書き送っている。本企画展には末徳の書状多数(伊藤家文書)が

出展されており、興味深い。その後、讓二は実業修行のため、横浜の貿易会社に勤務、さらに明治33年に渡米、サンフランシスコに居住。「通俗実用和英いろは字引」、渡航案内書として「渡米之葉」を相次いで出版した。ともによく売れたようだ。

米国で身を立てる決意をし、同35年には父から分家を認められ、接着剤製造会社の重役などを務めた。

末徳の子どもたちは欧米の文化に関心を持ち、海外雄飛も臆さない気概を備えていた。直接的には維新後、福沢諭吉の慶応義塾で学んだ開明的な父・末徳の遺伝子だろう。だが、その底流ははるか戦国の昔、最大級の海賊(水軍)大名だった先祖、九鬼家のDNAだったと想像するのは楽しいことだ。企画展は7日まで開催。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩

王子町出水(王子町)



王子町公民館の南西200mほどのところにある自然湧水です。水が湧くところは、丸太が方形に組まれ、東西約4m×南北約6mの深い池となっています。

この池にたまった水は、北に設けられた水路を通して水田に送られ、農業用水として利用されています。

この池には屋根があり、地域の方の洗濯場としても使われています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その三十八)

5月1日、新天皇が即位された。元号も平成から「令和」に改元された。この機会に天皇家と小野の関わりを探ってみた。本稿も好古館のご教示を得た。『播磨国風土記』(713年ごろ成立)には、伝承であろうが、天皇の巡行の記事がいくつもある。小野を含む賀毛郡が目立つのは、品田(応神)天皇の足跡だ。「小目野」など郡内各地の地名伝承に深く関わっている。

7世紀中ごろ、法華山一乗寺に参拝した孝徳天皇が見物したと伝える「女夫岩(夫婦岩)」が、下住町の加古川にあった。御製の歌も伝えられている(「加東郡誌」など)。  
中世に飛んで、河合の慶徳寺には、寺宝として後花園天皇が1436(永享8)年に寄贈した着物などがあったという(前掲書)。

さらに幕末まで飛ぶ。小野藩最後の殿様で、少年藩主・一柳末徳が1863年の「8月18日の政変」で、自ら家臣を率い、御所の警護に当たり、孝明天

皇から褒美を賜った。末徳は生涯、これを誇りとしていたという。

明治維新。諸大名は華族になり、末徳は子爵に列せられた。やがて慶事がもたらされる。学習院・初等科で学ぶ



▲制服などの下賜への感謝を述べた一柳末徳の書状(好古館提供)

大正天皇が一柳剛に贈られた▶学習院初等科の制服(好古館提供)

縁な様と天皇家から古代  
みる人々とその地域小野

三男・剛が明治21年12月、大正天皇(儲君・皇太子の時代)の「御学友」に選ばれたのだ。熱海への避寒、習志野の遊猟などにも随行しており、「大正天

皇実録」に「随員・供奉員」として度々剛の名が挙がる。

これに関し4月号の本欄で紹介した末徳の三女・満喜子がらみの企画展(好古館)で展示品に注目すべき品々を見つけた。大正天皇が剛に下賜された5点ばかりの品だ。このうち学習院初等科の制服・制帽などは、一柳邸が全焼したことから明宮殿下(のちの大正天皇)が見舞いとして菓子などとともに贈られたものだ。制服に添えられた由緒書には、「殿下が着用されていたものを手すから拝領した」とある。

「(お見舞いで制服などを賜った)おかげで剛は学習院に登校することができた」ことなどを記した末徳の書状も展示されており、興味深かった。

戦後の昭和22年6月、満喜子の夫、ヴォーリスが京都御所で昭和天皇に拝謁した。「日米親善に努めた」ことによるという。ヴォーリス、満喜子夫妻は度々皇族方にお目にかかっている。特に先の天皇・皇后の軽井沢での「テニスコートの恋」に関わったのは知る人ぞ知るエピソードだ。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

常楽寺

はめ 蝮塚(下住住町)



常楽寺の本堂脇にある瓦ぶき、入母屋造のお堂で、「ハメツカサン」と呼ばれています。毎年5月8日の灌仏会(かみぶつえ)になると、ママシから身を守る守り札を求めて、遠くからも参拝客があります。

寛政年間、紺仁という人がママシの毒を恐れ、その消滅を祈願し、紀州の熊野神社で修行していたところ、仙人から守り札を授かりました。この札がママシの毒に対して靈験あらたかなことから、堂を建てて祭ったという由来があります。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その三十九)

天皇の代替わりと新元号「元号」が連続している。「令和」が発表されたとき、個人的には少なからずうれしかった。以前、本欄で小野出身の歌人・作家の上田三四一と万葉集・大伴家持の関係に触れており、「令和」の典拠が万葉集にある家持の父、旅人が730(天平2)年、大宰府で催した観梅の宴にあったからだ。

さて、新元号記念で小野ゆかりの元号・年号の話題を探したが、だが、残念ながらほとんどなかった。以下は地域を広げたり、拡大解釈をしたりした末のかなり無理筋の話だ。

倭国女王、卑弥呼の中国遣使にかかわる年号(景初3年||西暦239年など)が施された古代

鏡でも小野の古墳から出土していれば面白い話を書けるのだが、それはなし。年号のある木簡や墨書土器などもない。「播磨国風土記」に巻頭か巻末の文があれば、そこに「靈龜元年」(715年)ぐらいの年号が記されていたであろうが、それもなし。惜しい。

小野地域ゆかりの元号・年号  
—新元号「令和」施行記念—



▲「天平六年」の年号、既多寺、寄進者名などが書かれた「大智度論」写経(神戸市立博物館蔵)

改元の理由にはさまざまなことがあるが、我が国初の元号とされる「大化」(645~650年)の次の「白雉」(650~654年)は、長門国から白い雉が献上されたことによる。先述の「靈

龜」は珍しい亀が見つかったのが理由だった。「神護景雲二年」(768年)に播磨国から白鹿が献上されたが、改元には至っていない。

小野と縁がありそうな、最古級の年号のある史料は、「天平六年」(734年)に写経された既多寺の「大智度論」

だろう。「賀茂郡」の既多寺で「針間(播磨)国造」などの姓を持つ有力者が写経し、寄進したもの。さまざまな意味で播磨古代史の重要史料だ。

播磨ゆかりの佐伯直、山直らの氏姓も目立つし、風土記に関連する「猪甘部」も興味深い。これらのうちの何人かは小野エリアに居住していたか、勢力を持っていたと推察できる。この既多寺の所在地を『小野市史』第1巻は、加東市社地区の喜田・清水遺跡である可能性を指摘している(加西市の殿原廃寺説もある)。同遺跡では発掘調査の成果により、瓦葺の屋根を持つ荘厳な建物があつたことが分かっており、仏像の頭部の一部も出土していることから寺院跡と見られる。

播磨で一番有名な年号は「元禄十四年」(1701年)か同十五年だろうか。赤穂藩主・浅野長矩による江戸城中での刃傷事件と、赤穂浪士討ち入りの年だ。特に討ち入りについては「時に元禄十五年十二月十四日 江戸の夜風をふるわせて」という三波春夫の歌謡浪曲の名調子が耳に残る。赤穂藩の所領は小野、加西、加東などにもあつた。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

浄土寺八十八箇所(浄谷町)



国宝浄土寺の裏山に、四国八十八箇所巡りができる林道が設けられています。回遊式の巡礼道を巡っていくと、各札所となる石仏を祀った祠が栗石を積んだ基礎の上に二体ずつ並んでいます。巡礼道には、アシサイが植えられ、毎年6月になると青や紫、白などさまざまな色の花を楽しみむことができ、多くの方が訪れています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その四十)

好古館の石野茂三館長(68)が「小野町年寄役の役務記録―商人町のエピソード 梶原家文書翻刻集」と「梶原家文書目録―小野町年寄文書」という冊子を昨年末、セットで仕上げた。江戸後期の小野藩陣屋町で町役人を務めた梶屋(梶原家)の役向きの記録を2カ月ほどで読み解いた力作だ。その中から私が興味を持った話をいくつか紹介したい。

同家の現存する古文書は約4百点にのぼるが、その中核になるのが「御用向之控」。梶屋藤兵衛が天明3(1783)年に年寄役になって以来、約30年間の役向きの記録がつづられている。石野館長は「細かい字でくずし書きしており、読みにくかった。ルーペで読んでいきましたよ」と振り返る。「毎日こまめに記録しているので、当時の小野町の様子がよく分かった」と喜ぶ。

石野館長も注目し、私も面白いと思つたのは、寛政元(1789)年5~6月

### く作 読み 暮らし 町の 陣屋 好古館・石野館長の 労



写真右は、好古館が発行した「小野町年寄の役務記録」。左は陣屋町について講演する石野茂三館長(3月9日、「よって古蔵」で)



小野町年寄役の役務記録  
―商人町のエピソード 梶原家文書翻刻集―

の「御奉行大坂行き町方駕籠人足一件」。奉行の葛山平馬がある訴訟で度々大坂に出向き、町方からは駕籠がきの人足や荷物持ちの人足が5、6人同道していた。これは町方が「御免地」

(無税)の代わりに勤勞奉仕であった。あるとき出迎える人足に不都合があったようで、責任者として藤兵衛と同じ町年寄である荒物屋彦右衛門が大坂まで呼び出され、お叱りを受けた。「どうも葛山という奉行は人使いがき

つかったようですよ」と石野館長。大年寄・新右衛門ら町年寄ほか一同が談合し、6月21日、「奉行の人足を首に替えて請合ふことはできない」とお役御免を願い出たが、認められなかった。

だが、藩と町民がいつも対立していたわけではない。面白い文書がある。天明8(1788)年6月、幕府の巡見使が小野町を来訪した際の文書だ。6日の巡見に備え、藩と町が協力して屋根の改修、路地垣の改修などを済ませ、町年寄も出迎える手配をしていた。

ところが直前の2日の朝、御勘定会所が火事になり、用意した諸道具、帳面が残らず焼失した。このとき、「町分人足、早々かけつけ、およそ百人ばかり無類の働き」をした。藩はこれに対し藩主奥様より謝礼として酒代8百文を贈った。結果的に巡見使一行は整然とした町並みと心きいた出迎えによって「随分ご機嫌よく、お通り遊ばされ」という。石野館長は「藩と町方の相互支援の様子が見て取れる」と話す。江戸からの巡見といえ、文化8年3月には、あの幕府測量方、伊能忠敬一行を出迎えた記録も興味深い。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 焼山古墳群(二葉町)



写真は24号墳

小野市街が一望できる焼山台地上にある古墳群です。6世紀後半に1カ所に集中的に築かれた家族墓とみられ、当時の墓制を知る上で、学術的にも貴重なものといわれています。古墳からは、木棺とともに玉や金環、刀、須恵器などが出土しました。

かつては200基近くの古墳がありましたが、戦後の開拓事業で多くが失われました。現在は14基が残り、そのうち4基が県の指定文化財となっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その四十一)

夏、8月とくればお盆。お盆とくれば盆踊り。盆踊りとくれば播州音頭——かつてはそうだったらしい。播磨一帯で隆盛を誇った播州音頭も今や絶滅危惧種。その栄枯盛衰をたどった。

個人的なことだが、13年ほど前、北播に転勤し、たまたま何かの取材で訪れた市場町の来迎寺で播州音頭の石碑を見つけ、初めてその存在を知った。まったく知識はないので、しばらく「小野市史・別巻(文化財編)」の記述をもとに書き綴る。

明治時代には浄瑠璃の文句をもとにした吉川節(音頭)などがあり、大正期には加東節、山田節が隆盛になり、やがて広く播州音頭と呼ばれるようになった。

よ。だ。どの時期にも音頭取りの名人が小野から輩出したことから、小野が播州音頭の本拠地となった。名人の中には小野村長になった岩崎千鶴(二代目)もいたというから驚きだ。  
大正時代末から最盛期(昭和4〜10年ごろ)には、名人は神戸や姫路などか

だ！ 音頭 播州 だ！ 盆 だ！ 夏 昔の隆盛いまいずこ？

らも招かれ、ひと夏で2000円も稼ぐセミプロも現れた。来迎寺の石碑「播州音頭元祖記念碑」は、この最盛期を迎えるときに、先輩の3大名人を称えるために弟子・後輩たちが建立した。



写真右は、播州音頭の石碑(市場町の来迎寺境内)、上は「佐渡情話」を歌う關橋義信さん

この記念碑に関わる興味深い新聞記事を市史・第7巻(史料編)で見つけた。「神戸又新日報」の昭和8年8月19日の記事だ。小野を本拠とする音頭取り仲間が分裂し、播州音頭協会と親睦更生会の両者が勢力を争っているという主旨で、分裂の原因は来迎寺に建

立した記念碑の負債ができたことだと報じている。

この記事によると、当時村の若者で音頭を習う者が200人以上にもなり、年一回「大寄せ」という競技会を開き、音頭の優劣で番組を作り、その順位で興行の給金が決まるとしている。

戦前の隆盛振りが分かるが、しかし、戦後は新しい音楽、踊りが流行し、播州音頭は次第に衰退していく。演目も、ほとんどが浄瑠璃もの。これがもう時代には合わなくなったのだろう。

好古館で播州音頭の「生き字引」がいと教えられた。その人、關橋義信さん(86) 葉多町IIを訪ねた。そろばん製造業の現役。作業の手を止め、話していただいた。「父が音頭取り(芸名「里蝶」)で、自然に聞き覚え、戦後すぐから歌い始めた。「天野屋利兵衛」を得意とし、ほかに「曾我兄弟」「佐渡情話」などの演目でひと夏に数カ所音頭取りに向いた。昭和末から平成に入り、廃れていき、市内の音頭取りは自分一人という。

好古館では10月上旬から始まる秋の特別展の開幕式で播州音頭の実演を披露する予定という。今から楽しみだ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

御興岩と夫婦岩(下来住町)



加古川の右岸、大住橋の上流300mあたりに岩盤が見える箇所があります。ここに、かつて夫婦岩と呼ばれるうっすの大きな岩がありました。兩岸の間を急流が滝のように落下することから、加古川流域有数の名勝と言われていました。「播磨鑑」によれば、650年頃に、孝徳天皇が夫婦岩を見るために立ち寄られ、短歌を詠まれたということです。この時、天皇の興を置いた岩が残っており、御興岩と呼ばれています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その四十二)

志染の石室(三木市)あたりに隠れ住んでいた2人の皇子がやがて都に帰り、相次いで天皇位に就く。こんな伝承が東播磨各地に残っている。オケ(於奚

仁賢天皇)、ヲケ(袁奚)顯宗天皇)2皇子を祀る神社も少なくない。小野市域でもしかり。今月はこの2皇子の伝承を探る。

私的な話で恐縮だが、この伝承のことは『播磨国風土記』の勉強を始めた10年以上前から知っていた。ただ、小野がらみの話がないので、このコラムでは取り上げることはなかった。だが、「日本酒の日」にちなむ昨年の10月号用の取材で、この伝承がルートと見られる大歳神社(脇本町)の「講当」祭を知って驚いた。まず伝承の概略を風土記の記述に沿って手短かに紹介したい。

まず、美囊郡の話から。父が殺害され、逃れ来たオケ・ヲケ2皇子が志深里の石室に隠れ住んでいた。村首の伊等尾の家に仕え、新築祝いの宴席で歌を歌わされたとき、「われらは天皇の子孫

である」と歌った。これがきっかけで山部連少楯による朝廷への注進を経てやがて天皇位に就く。

もう一つは賀毛郡の話。2皇子は国造許麻の娘、根日女に求婚し、根日女



写真右は、2皇子が隠れ住んだと伝えられる「志染の石室」。現在は防災工事のため立ち入りできない(三木市志染町)＝同市ホームページより  
左は顯宗天皇を祀る顯王神社(高田町)



### 承 伝 承 講 当 祭 大 歳 神 社

は承諾するが、2皇子は譲り合い、そのうち根日女は老いて死ぬ。悲しんだ2皇子は墓「玉丘」を築く。この玉丘は現在の玉丘古墳(加西市)とする伝承もある。  
どこまでが史実で、どこから脚色かわからないが、似たような話が「古事

記』、『日本書紀』にもあることから、父を殺された2皇子が播磨で匿われ、やがて王位に就いたという骨子は、歴史的な事実だったろうと推測する。時期は5世紀末から6世紀初めのころだ。

私は播磨ゆかりの2皇子を東播の諸豪族が擁立し、中央の皇族・豪族の支援・協力も取り付け、即位させたと見ている。中心になったのは玉丘古墳の豪族の末裔、志染周辺の豪族たちで、これに小野の豪族を含む東播の諸豪族も加わったと想像している。2皇子が住んだ宮の一つに「少野の宮」があるが、小野市域と関係するのかよくわからない。顯宗、仁賢両天皇、さらに武烈天皇の王権を「播磨王朝」「播磨王権」と呼ぶ研究者もいる。

さて、脇本町の大歳神社のほかに、最近、粟生町の近津神社にも仁賢天皇の伝承があるのを知った。さらに、好古館の教示により、市内には2皇子(2天皇)を祀る神社が計4社、顯宗天皇を祀る顯王神社(高田町)写真)が1社あることもわかった。脇本町の大歳神社ではこの12日に2皇子を祀るお祭りが今年も行われるはずだ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者  
平成22年7月から小野市学術政策員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 粉くい坂(榎山町)



榎山町から三木市鳥町へ通じる「粉くい坂」と呼ばれる坂があります。

源平合戦の頃、三草山(加東市)の合戦で勝利した源義経一行は一ノ谷(神戸市)へと向かう途中に榎山町を通りました。空腹で困っていた一行に、近くに住む百姓がハッタイ粉を差し出したところ、その粉がおいしかったことから、百姓は「粉食(国井)」という名字を名乗ることを許され、年貢も免除されたと伝わっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。



温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その四十四)

財務省が2024年度に発行する新紙幣の5千円札に女子英学塾(津田塾)の創始者、津田梅子の肖像を使うとの報道に私は小躍りした。旧小野藩最後のお姫様、一柳満喜子と津田梅子に少なからぬ接点があり、本欄のネタが1本できたからだ。

梅子は教科書でもおなじみ、明治日本最初の女子留学生で、のち近代における女子高等教育の開拓者となる才媛だ。1871年(明治4年)、梅子は6歳で山川捨松(のち陸軍卿の大山巖夫人に)らと渡米。捨松はペーコン家に寄宿、1909年米国に留学する満喜子はこのペーコン家の末娘、アリスに世話になる。アリスは1888年以降、華族女学校、東京女子高等師範学校、女子英学塾の教師として度々来日、満喜子も英語を学んでいる。

梅子は1889年、2度目の米国留学でプリンマー・カレッジに入学。92年に帰国するが、この間、日本人女性の米国奨学金制度の構築と募金に奔走した。

点接と梅子津田の5千円札  
子喜満の姫小野の旧



▲津田梅子の肖像が使われる新5000円札(財務省ホームページより)  
▼津田梅子(中央)と写る一柳満喜子(右)＝撮影年月未詳(公財・近江兄弟社提供)



帰国した梅子は華族女学校、女子高等師範学校の教員になり、満喜子は同校付属女学校で学ぶ。(公財)近江兄弟社の教示によると、満喜子は1902年、04年にかけて梅子の女子英学塾でも学

んだという。満喜子は梅子ゆかりの奨学金で1909年、同カレッジに入学する。のちアリスの養女になる。

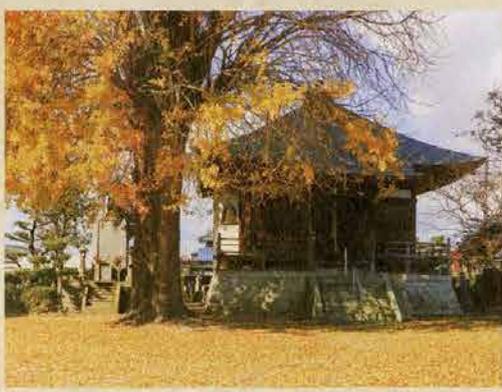
さて、ここで注目すべき1通の手紙を紹介したい。1918年2月17日付、捨松がアリスに宛てたものだ。津田塾の塾長、梅子はこのころ病身で、後継者を探

していた。塾の理事だった捨松は、満喜子が梅子の後継者になるようアリスに説得してほしいと頼んだのだ。

「一柳(満喜子)さんは素晴らしい女性で、しかも有能な方という印象を受けました。(梅子の後継者として)私の考えでは一柳さんはまさに適任者だと思います」とした上で、「彼女(満喜子)が日本で受けた教育は、梅(子)よりレベルが高いので、梅よりも優れた仕事ができるのではないのでしょうか」とまで評価し、「どうかあなたからも彼女(満喜子)を説得してみてください」と頼んでいる。満喜子は後継推薦を受けなかった。理由はアリスの世話のため渡米を決意していたからとされる。ただし、近江兄弟社の見解によると、満喜子を後継者に推そうという話は捨松の手紙だけにあり、満喜子にしかには伝わっていなかったのではないかと、という。

いずれにしろ梅子と満喜子が少なからぬ接点、交流を持っていたという事実は近代教育史上、興味深い一コマだ。本稿は、山崎孝子『津田梅子』、久野明子『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松』、平松隆円監訳『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子』などを参考にした。佐野允彦さんのまさひこ(元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩  
観音堂(古川町)



古川町旧公民館北西にあるお堂で、十一面千手観音を本尊とすることから、観音堂と呼ばれています。建立年代等は不明ですが、寺名を「園福寺庵」といい、扉に元禄十五年(1702)の銘があります。

お堂の脇には、樹齢約200年のイチヨウの大木があり、秋には散った葉が地面を黄色く染めます。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その四十五)

好古館で12月8日まで開催中の特別展「祭りとくらしの移り変わり」小野地区の近現代」の図録を読んでいる面白一文を見つけた。小野藩最後の殿様、一柳末徳は明治20年代後半、自らが借金してでも新事業を志す旧臣

たちに大金を貸し付けていたという。関連史料を発掘した石野茂三館長に話を聞いた。

明治4(1871)年の廃藩置県により小野藩をはじめ全国の諸藩は消滅。明治新政府のもと、諸大名は東京に呼び集められ、末徳一家も上京した。藩主・知事を失職したわけだから、当然家計は苦しくなっていく。旧藩士も同様で、役人、警察官、軍人、教員などに奉職できた者の他多くはたちまち困窮した。

小野・一柳家の本家筋に当たる三木・高木陣屋の旧臣たちが小野藩の関係者に兵庫県勤務の斡旋を懇願した書状が図録で紹介されている。江戸詰めだった旧小野藩士に至っては帰郷後の住居にも困り、急造の長屋に住むが、

一柳末徳公は旧臣思い  
借金をしてでも資金融通

転居先の住まいは「竈(台所)と雪隠(便所)」が一所なので嫌だと泣きつく書状もある。

さて、一柳家の家計は明治20年代から逼迫していくのだが、その大きな



▲晩年の一柳末徳 (いづれも好古館提供)

▲貸付金が「何れも取りたての見込全くなきものなり」との付記がある家計取調書。

原因は東京で起業する旧臣らへの貸付金の焦げ付きによるものだったという。

石野館長が見つけた史料は旧藩の重役だった伊藤家から、館に寄託された文書約4千点の中にあつた。当主の伊藤藤平は初代小野村長を務めており、地元の旧臣の代表格。末徳は交流を続

け、せつせと手紙を書き送っている。

そのうちの1点、明治28年1月19日付書状では家計の窮状を訴えつつも、すべて末徳の「不行届」と説明している。その貸付金額だが、同封の「家計取調書」によれば、総額6,560円にのぼる。現代の貨幣価値に換算していくらになるのかよくわからないが、6,500万円以上なのは間違いないだろう。

一柳家の借金総額は末徳の兄の三田・九鬼家から親戚や銀行からの分を含め総額1万9,150円とし、年間の家計不足額は1,438円にのぼり、石野館長は「すでに破産状態」と指摘する。

しかし、末徳はただ座視していたわけではなく、家族の経費節減もこまかく指示し、子どもらの自立・自活を促し、学習院には入学させないなどの方策を採る。自らも帝国博物館に就職したり、貴族院議員として歳費を得たりしている。

石野館長は「末徳は巨額な負債を抱えながらも旧臣に心を配り、子どもたちの教育にも配慮し公私ともに名家長だった」と評価。これら関連史料を収録した冊子を近く発行するという。

佐野允彦(さの まさひこ)元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

小野大池弁財天(王子町)



大池は、元和10(1624)年に造られた溜池で、池の北側に大池の弁財天さんと親しまれている弁財天が祀られています。

享和元(1801)年に造られた鳥居もあり、鳥居の南側には、溺死者供養のために、生木の地藏尊を祀る石造地藏があります。天保3(1832)年の造立で、大池地藏と呼ばれています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その四十六)

新年明けましておめでとうございませう。正月といえばカルタ遊び、百人一首、とくれば三十六歌仙。昨秋、本欄のネタを探していたら好古館で「新指定文化財展」が開かれていて、その中に住吉神社(垂井町)の「三十六歌仙図絵馬」が展示されていた。今月はこの絵馬を紹介したい。

三十六歌仙とは、平安時代中期の歌人、藤原公任が選んだ和歌の名人36人の総称。柿本人麻呂、小野小町、大伴家持、紀貫之らだ。江戸時代になると、屏風、絵巻、掛け軸、扇面などさまざまのものに盛んに描かれるようになる。

近代になっても三十六歌仙絵への憧れは強く、国宝級で最高峰と評価される「佐竹本三十六歌仙絵」(鎌倉時代)は大正時代に歌人一人ずつで分割され、売られた話はある名だ。

さて、住吉神社の三十六歌仙図である。板絵の額で当初は絵馬として社殿に掛けられていたのだろうが、そ

### 優雅な三十六歌仙図絵馬 小野市の新しい文化財に



▲好古館に展示された住吉神社の「三十六歌仙図絵馬」

右上は、小野小町の絵馬、右下は絵馬の裏の墨書(好古館提供)

の後は木箱に大切に収められていた。各絵馬の裏と板額に墨書があって、来歴もわかり、貴重な文化財だ。小野市教委は「昨年4月、「江戸時代初期のもので、当時の色彩が良好に残されている」と評価して新たに市の文化

財(有形民俗文化財)に指定した。絵馬の裏の墨書によると、歌人の肖像画は狩野探幽の弟子と称する、甲田重信が描き、添えた和歌は能筆家であった公家、四辻季賢の筆になり、これらを大原重政という人物が万治2(1

659)年に奉納した。さらに、重政は板額の墨書によれば、小野・宮脇村(現・垂井町)出身で、九州・豊前小倉侯(藩主・小笠原家)の家臣だったという。寛政8(1796)年、重政の末裔と伝える地元、宮永家が由来を記した板額と木箱を奉納したようだ。

さてこの2種類の墨書の記述がどこまで本当か。小倉藩士だった(?)大原がどのようにこの絵を入手し、なぜ住吉神社に奉納したのか。また、購入費も高額だったと思うが、それほど裕福な武士であったのか。絵師の甲田重信の絵馬が加古川、高砂にも残っているのだが、東播磨と何か強い縁があったのか、本当に狩野派の絵師だったのか?等は今のところ不明だ。

中でも大原重政のことが気になり、小倉藩のあった北九州市中央図書館に問い合わせた。「複数の小倉藩家臣名簿に当たったが、確認できなかった」という返事が来た。

絵馬の謎は残るが、この正月、ぜひ家庭で百人一首のカルタをしてほしい。千年以上も前の歌と人物が書(描)かれたカードで遊ぶ典雅なゲームは、世界広しと言えど日本だけだろう。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 小堀城跡(河合中町)



約150mの方形に広がる大規模な中世城郭でした。現在は、高さ2m、長さ80mの土塁が残っています。初代城主は、赤松一族系の光枝三郎正頼といわれ、記録では、三枝備中守治吉が最初に登場します。「三枝家文書」によると、治吉は居城に火を放ち、家財を整理して三木城へ入り、平井山合戦で討ち死にしたと記されています。「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています)。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その四十七)

ひと月遅れですが新年恒例の干支にちなむお話。今年はずねですが、小野市域で直接ネズミに関わる注目すべきネタは残念ながら見つからず。播磨一円さらに全国的な話も加えて書き進めます。

日本列島でのネズミの痕跡は、縄文時代からあるそうです。弥生時代で知られているのは、「ネズミ返し」のある高床式倉庫。掘建柱に据えつけた横板で、ネズミの侵入を防ぐもの。静岡県の登呂遺跡のものがあるが、ね。農耕生活が本格化すると、穀物を狙ってネズミが出没するようです。県内では尼崎市の集落遺跡、田能遺跡にネズミ返しを付けた倉庫が復元されていて、見学したことがあります。

近藤家の決倉に“ネズミ返し”  
干支の子にちなむ話



写真は旧近藤亀蔵家の浜蔵(市場町)、左上は「ねずみの浄土」を描いた20円切手(1975年4月発行の記念切手)

姫路市の見野古墳群で猫の足跡が付いた須恵器が出土しています。猫がいるということは、その周辺にネズミもチヨロチヨロしていたことは想像できます。6世紀末〜7世紀初めのもので、古代史の宝庫、「播磨国風土記」

らネズミの存在に注目していました。嫌われるネズミがときになぜ祭られることがあるのか。名著「海上の道」(昭和42年)で、沖繩諸島の海の彼方の浄土、ニライカナイは鼠の浄土でもあった、稲作をもたらした島でもあった、

(715年ごろ成立)には残念ながらネズミは顔を出しません。

ネズミの昔話といえば、「おむすびころりん」が有名ですね。本来は「鼠の浄土」などと呼ばれます。播磨が生んだ民俗学の父、柳田国男は早くか

と説いています。

土中のネズミは爺が落としたりおむすびに喜び、お礼に餅をつけてごちそうする。やはりネズミと米は密接に結びついているのです。だから米俵に座る大黒様の足元にいるのです。

一柳家の先祖の一人である一柳直盛は、1564(永祿7)年の子年生まれと伝えられています。武将としてはチヨロチヨロではない大活躍で、伊予西条藩主に出世しています。今年大河ドラマの主役、明智光秀とも多少関わりがありそうなので、直盛についてはいざいざまた紹介するでしょう。

最後に好古館の粕谷修一副館長から教えていただいた話。市場町にある江戸末期の豪商、近藤亀蔵家の浜蔵は、土壁が二重になっていて、間に砂が入っていました。ネズミが侵入しようとして壁に穴を開けても穴から砂が流れ出てくるので、ネズミは蔵の中に入れない仕組みだとか。これではネズミも途中で音を上げるでしょう。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

亀井淵の碑(広渡町)



旭丘中学校の南西約500mの道路脇に立つ石碑です。高さ1.5m、幅0.4mの大きさで、水利権を示すために昭和4年に建てられました。

碑には、自然湧水である亀井淵の水を使用する権利が広渡町にあることが記されています。周辺にはほかにも自然湧水がありました。現在は、ほ場整備により現在はその役目を終えています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

## 佐野允彦の おの歴史散歩余話(その四十八)

NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」が始まった。「本能寺の変」(1582年)の主役、あの明智光秀を描く時代劇だ。今後どんな風に展開していくか楽しみだ。

小野藩主・一柳家の始祖、直末・直盛兄弟と光秀とどんな接点、交流があったのか、なかったのかも気になる。ちよつと

好古館では直末・直盛も扱った企画展「小野藩主一柳氏と元氣な領民たち」を開催中でもある(4月5日まで)、両者の関係の有無を探ってみた。

まず光秀の生涯だが、大河ドラマ初回では美濃・明智荘(岐阜県可児市)の領主の息子で、美濃国守護代・斎藤道三に仕えているとされていた。美濃源氏・土岐明智氏の一族と見るのが妥当のようだ(ただし諸説あり)。

だとすれば、「小野市史」第二巻によると、一柳家の先祖は戦国時代に美濃に移住し、三代ぐらいにわたる美濃守護・土岐氏に仕えたよう

### 一柳家と明智光秀との関わり NHK・大河ドラマに寄せて



写真右は、山崎合戦での一柳直末の活躍を記した史料、着用したと伝える胸服(いずれも好古館提供)

日 明智光秀襲信長公於京之本能寺信長自裁秀吉討明智於山崎直末力戦光秀敗走直末逆北朝官三十八級十月三日秀吉敗於四木下佐右少將後増直末逆至五千一百五十五十一月織田信孝在濃之岐阜敗信雄誠秀吉討信雄逆急攻岐阜直末從軍信孝行成秀吉討之十一月四月秀吉擊孫于江州之南分部討淺川林龜山取峯城秀吉侯

月には木下(羽柴)秀吉らとともに京畿の政務を担当する。京都奉行になっていくことが、同年4月4日付の光秀、秀吉連名の文書からうかがえる。一方、一柳直末は前年の1568年に秀吉の家臣になっている

から、明智一族と面識ぐらいいはあつたかもしれない。さて、光秀だが、1567年~68年にかけて足利義昭と織田信長を結びつけるために活動しており、やがて信長の家臣となり、1569年4

から、このころから光秀と面識があつたと見てもおかしくなろう。光秀と秀吉は信長家臣団のライバルとして競い合いながら出世していく。秀吉に仕える直末もまた戦功を挙げるなどして出世していく。この間も光秀と直末に何らかの接触、交流があつただろうが、確たる史料は残されていない。

ついに運命のときが来る。1582年6月2日未明、「本能寺の変」。光秀が信長を討ち、動乱が始まる。一柳家に伝わる直末・直盛兄弟の伝記類(「一柳家史料由緒書」所収)によると、兄弟は秀吉の備中・高松城攻めに出陣しており、いわゆる「中国大返し」に従い、6月13日山崎合戦に臨む。兄弟の軍勢も活躍したよう。直末力戦、光秀敗走」と記した史料がある。38人の首級を取つたとしている。

ともあれ企画展には直末、直盛が秀吉から拝領したと伝える胸服なども展示されている。国の重要文化財でもあり、市民の皆様、この機会にお見逃しなく。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

### 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 カモ池(男池) 来住町



山の狭間をせき止めて築かれた用水池で、古くから「来住の鴨池」として知られています。

冬になるとシベリア方面から数百羽のカモなどの渡り鳥が飛来して来ます。この地域は、禁猟区になっているため、カモが飛んできたときに網を投げ上げて捕獲する全国でも珍しい投網猟が行われていました。

「おのふるさと散歩は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その四十九)

小野希望の丘(浄谷町)に新しい陸上競技場アレオが完成、4月1日にオープンした。陸上競技が盛んな小野だが、これですらに有能な選手の輩出、スポーツ振興が期待される。新競技場完成を機に、陸上小野のバックグラウンドを探ってみた。

昨年10月の本欄でNHK大河ドラマ「いだてん」にあわせ、嘉納治五郎と井上増吉を紹介した。私はそのとき、旧制小野中学生の井上が「彗星のごとく現われ」、1933(昭和8)年8月、東京での全国中学陸上大会で4種目で優勝、団体(学校)としても全国優勝を果たしたと書いた。

ただ、突然変異ではなく、それには歴史的背景や地域的特性があったのではないかと考えていた。まず小野市域は江戸時代以降、比較的经济的に恵まれていた。食うにも事欠く困窮家庭はあまりなく、明治以降も子どもたちは農作業や家事手伝いなどに追い回されることなく、運動に励む余裕があった。かくて大正時代から学校スポ

“陸上小野”、基盤は戦前から  
新競技場の完成に寄せて



▲加東郡学校連合運動会を報じた新聞記事(好古館提供)



▲俘虜と学生のサッカー試合での記念写真(ハンス・ヨアヒム・シュミット氏蔵)

ーツの隆盛をもたらすことになる。1919(大正8)年10月末、福田小家庭で加東郡教育会主催の「第1回全郡学校聯(連)合運動会」が開かれたのを私の古巣の大阪朝日新聞が11月2日付

で報じている。「広大なる校庭が20校の学生に庄せられ忽ち人の山を築く」とある。競技の後には旧制小野中体操教師による競技力向上の講演もあったという。前記の記述は「小野市史第7巻史料編IV」に拠ったが、第3巻(近現代編)に「学校教育と地域文化」を執筆した

高岡裕之氏に興味深い小論があった(市立図書館・和田真由さんの教示による)。「一橋大学スポーツ研究29」(2010年)にある「日本近現代史研究にとつてのスポーツ」と題する特別報告だ。

それには、「小野市史の編さんに10年ほど携わり、戦前の段階でスポーツがすごく盛んだったことに気づいた」(要旨)と書いている。学校スポーツで「男子は相撲、女子はバレーボールという学校文化が成立していた」と力説している。

もう一つ小野の体育隆盛の背景として私が想定しているのは、青野ヶ原俘虜収容所(1915〜20年)の存在だ。第一次世界大戦によるドイツ、オーストリア兵俘虜約450人が収容された。娯楽や運動が許され、サッカー、テニス、ボクシング、体操、陸上競技などを楽しんだ。地域との交流もあり、サッカーでは姫路や小野の学生たちと試合もした。旧制小野中の記録には、「数回蹴球の練習的仕合をなし、すこぶる得るところありき」と記した一文が残っている。

私はこれらの活動によりヨーロッパの近代スポーツの概念や技術が、この地域の運動文化に少なからず影響を与えたのではないかと推察している。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策委員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

東本町 道標(東本町)



小野商店街の南部(旧下町)と中央部(旧中町)の境に、高さ1.5m以上の大型の道標が立っています。

造立は、文化4(1807)年、南面には「右 じゃうどじ(浄土寺)三十丁大深山へ二り半」、西面は「左 やしろ(社) きよ水(清水寺)」と刻まれています。西国三十三方所巡礼者や旅人などを案内するために建てられました。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会・観光交流推進課内、好古館・伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その五十)

河合西町字構にある堀井城跡が4月、「ふれあい公園」としてオープンした。中世の大規模な平地城館跡としてお城ファンには知られていたが、グラウンドゴルフ場を核に市民の交流と健康に役立つ城跡公園として生まれ変わった。これを機に公園を訪ね、堀井城の歴史を探った。

城の創建は確かなことはわからない。「加東郡誌」は鎌倉時代前期の1220年、赤松氏により創建されたとしている。中世播磨の雄、赤松氏が東播磨に勢力を伸ばす過程で、赤松傘下の諸将が河合地域に相次いで城館を構えたようだ。

注目すべきは15世紀前半の段階で河合地区内に河合城、堀井城、小堀城の3城が城館トライアングルを構成していたことだ。互いの距離が数百メートルしか離れていない近接地に、それぞれかなり大規模な城館を構えるのは、全国的に見てもまれなケースなのだ。

最近、この「河合三城」を赤松一族の上月氏の城と見る興味深い見解を披露

跡に 城館 模の 規の 大の 世の 市中



▲ふれあい公園として生まれ変わった堀井城跡。土橋の奥に冠木門を模した門が建つ(河合西町)

しているのが好古館の石野茂三館長。北九州市堀井幸郎家文書の「堀井構略伝」中に、この3城を「三ツ堀の城郭」と呼び、「鼎のごとく三城戦力応戦」という記述があるのを見出した。さ

らにいくつかの史料をもとに上月氏らが河合を本拠地としていたと見ている。

他の史料や城跡の規模からして3城の中でも河合城が中心的な城で、堀井、小堀の2城は河合城を補佐しつつ、役割分担、機能分担をしていたのではと思われる。河合城は、室町幕府の重臣で

あった赤松満祐が1441年、時の將軍・足利義教を討ち、播磨に帰還する際、首を携えて「河合堀殿城」に入ったと伝えられている。

さて、肝心の堀井城だが、恐らく織田信長の播磨攻めで廃城となり、江戸時代以降畑や竹林などになり城跡は改変された。幕末、明治初期には実業家、斯波氏の屋敷となり、「斯波屋敷」と呼ばれるようになった。このときも随分改変されたようだ。

規模は東西約80メートル、南北約100メートルの少しびつな方形で、周囲には幅6メートル、高さ1〜4メートルの土塁、その外側に幅約8〜10メートル、深さ1.5メートルの堀がある。これが主郭部分で、さらにその外側を取り囲む家臣の屋敷地などがあつたと推定される。百級級の城館は当時の守護・守護代クラスの有力大名の居館に匹敵すると言われる。

平成に入り数度の発掘調査が行われたが、後世の改変のため、残念ながら注目すべき遺稿、遺物は発見できなかった。ただ、堀と土塁で囲まれた中世城館の様相がよくわかる城跡が今般、市・市教委、そして地元熱意によって公園に生まれ変わったことは喜ばしい。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

阿形城跡(阿形町)



万願寺川が加古川に合流する地点の南西にある中世城郭で、舌状台地の先端部に位置しています。主郭の東・西・北には堀があつたとされています。

古文獻によれば、城主は別所長治の家臣油井土佐守勝利で、三木合戦にも参加したということです。当城は羽柴秀吉に攻められ、天正9(1581)年に落城したと伝わっています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その五十一)

新型コロナウイルスの災厄は、小野市と市民の生活にも大きなしわ寄せをきたしている。この機に感染症の歴史を本欄コラム風に振り返ってみたい。

世界的には人類の誕生とともに感染症の歴史も始まったのだろう。日本史では古事記・日本書紀に疫病の記録がある。奈良時代の737年、「裳瘡」(ほうちう)「疱瘡」(てんじょう)が大流行し、当時の最有力貴族、藤原氏の4兄弟も相次いで死亡したのがよく知られた話だ。時の天皇、聖武は「疫病や日照りで民が苦しんでいるのは朕の不徳による」(大意)と自らの責任を認め、神仏に祈るだけでなく、米や薬を給付し、免税をし、大赦まで行った。

「播磨国風土記」には疫病の話はなさそうだが、「備後国風土記」逸文には、武塔神(実はスサノオ)が親切にしてくれた蘇民将来の一家に茅の輪を贈り、これを腰につけた一家は疫病を免れる話がある。今日でも流布している「蘇民将来信仰」だ。

スサノオにかかわる伝承は、有名な京都の八坂神社にもある。その最大の祭りが祇園祭で、今夏の山鉾巡行はコロナ禍のために中止になった。もともとは疫病退散を祈願する祭りなのに皮肉なこと



写真右は、安坂・城の堀遺跡出土の人形、上は祓の様子を描いたイメージ画(いずれも那珂ふれあい館提供)

とだ。祇園祭のルーツの祇園社御霊会は、869年が最初。姫路の広峰神社の祭神・牛頭天王(スサノオ)を勧請して行われた。疫神をまつることで疫病終息を願ったのだ(保立道久「歴史の中の天地動乱」岩波新書、2012年など参照)。

奈良〜平安時代、都でも地方でも6月末と12月末の年2回、「大祓」の神事が行われた。官営の祭祀で、罪・穢れ・災いを祓う祭りだ。厄災を担わせた木製の人形を川などに流した。県内では豊岡市の袴狭遺跡で大量に出土したのが有名。近くでは多可町の安坂・城の堀遺跡の出土品が知られている。同遺跡は多可郡の「祓所」だったと見られる。

私が所属している「ひょうご考古学倶楽部」は、10年ほど前から県立考古博物館と共催(ここ4年は単独主催)で6月末に館そばの喜瀬川や館庭で「ひとがた流し」の行事をしている。神職の装束を借り、祓の祝詞を唱え、来場者には手作りの人形を流してもらおう。なかなかの人気行事だが、これも中止されそう(5月中旬現在)。

さて、話は江戸時代に飛ぶ。小野藩・一柳家には、兎の血を素材にした「兎血丸」と呼ばれる薬があった。子どもへの疫病の予防薬で、藩はこれを領内の百姓に無料配布したという。2011年1月号の本欄で紹介したので詳細は省くが、今般のコロナ禍で全国に先駆けた小野市のマスク10万枚配布も小野藩以来の伝統かもしれない。

佐野允彦(まのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 太閤渡し(新部町)



加古川と東条川が合流する地点にある渡し場跡で、「新部渡し」とも呼ばれていました。

天正6(1578)年、織田信長から播磨平定の命をうけた羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)が三木・別所氏を攻める途中、ここで新部村の船頭、山田新介らの手を借りて船いかで軍勢を渡したと伝えられています。この褒美として、秀吉は渡し舟の運行を許可し、夫役の免除の墨付(証文)も与えました。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その五十二)

夏が来れば思い出す。カッパ(河童)のことだ。今月は河童に迫ります。本欄も「ネタ切れか?」と喝破されそうですが、昨年7月、「広報おの」が市のPR動画「小野かっぱ」を紹介してちょうど1年。節目の月だからです。

まずは小野かっぱ。小野出身のイラストレーター、井上涼さんが制作したキャラクターで、頭の皿を小野市の花、ひまわりに変えている。YouTube小野市公式チャンネルで見ることができ、アクセス数は3万6千回にのぼる。なかなかの人気だ。

もともと河童は、日本古来の妖怪の中でもトップクラスの人気者。子どもや馬を池や川の淵に引き込んだり、村の女性に悪さをしたりするが、お酒や相撲が好きだったり、懲らしめられて秘伝の傷薬を教えたりと、どこか憎めないところがあるからだろうか。

今日の河童研究の基礎を築いたのが播磨・福岡町出身の民俗学者、柳田国男であることはご存知でしょうか。まず

て年 1 周 求 め 河 童 を 北 播 磨 に 小 野 か っ ぱ



写真右は、小野市のPR動画のキャラクター「小野かっぱ」、左は福岡町・辻川山公園のキャラクター「河次郎」(中央)(福岡町提供)



『遠野物語』(1910年)に河童の伝説数件を収め、さらに『山島民譚集』(1914年)に「河童駒引」の一章を設け、河童研究を大きく進展させた。昨今の河童研究は妖怪ブームもあってか百花繚乱の様相だ。

私は1980年代前半に神戸支局勤務となり、夏休みに柳田翁の自伝的著作『故郷七十年』を手に彼の故郷・福岡を訪ねたことがある。翁は本書でも随所で河童に言及している。少し紹介を。「辻川あたり(現福岡町)では河童はガ

タロというが(略)、子供のころに、市川で泳いでいるとお尻をぬかれるという話がよくあった。(略)毎夏一人ぐらいは、尻を抜かれて水死した話を耳にしたものである」

別の箇所では、若いころ(1911年ごろ)『西播怪談実記』という本を読んだと書いている。この江戸中期の本に「河虎骨継の妙薬を伝へし事」「青山の池にて河童を見し事」という河童伝説が収録されている。翁には遠野だけでなく自らの故郷、播磨も河童研究の原点だったのだ。

小野の河童伝説も紹介しないと怒られそうなので一つ。栗田橋の上手の加古川に「大藪」という深い淵があり、そこに住むガータラ(河童)が泳ぎにきた子どもをよく水の中に引き込み、腹わたを抜いて死なせたという。小野の歴史を知る会編著の『ふるさと伝え語り』に載っている。

小野かっぱより早く人気者になったのは、福岡町の河太郎と河次郎の兄弟河童。もちろん柳田翁にちなむキャラクターだ。ただし怖すぎて泣き出す子どももいるそうだ。河童はいまなお、怖がられつつ興味を持たれる存在のようだ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

池尻城跡(池尻町)



市場小学校南東約300mの段丘上に位置する中世城郭ですが、城主、築造年代などははっきりしていません。

城跡は南東より北西に伸びる尾根の先端部に位置し、三つの曲輪から構成されています。南にある主郭は、一辺約18mの方形で、周囲には空堀がめぐらされています。

また、主郭は池尻古墳群にもあたり、南方へ3基の古墳が並んでいます。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その五十三)

コロナ禍はなお終息には至っていない。そんな中、諸外国に比べ日本での感染者が少ないのは、国民の間にマスク着用の習慣が定着しているのが一因ではないかという見解も出ている。

私は73歳になるが、マスクで思いつくのはタイガーマスク、覆面なら鞍馬天狗(古いね!)、仮面なら月光仮面:覆面・仮面をすると、変身したような気になったものだ。覆面・仮面には変身する魔術のようなものが潜んでいるのかもしれない。今月はマスク↓仮面・覆面の歴史を辿ってみよう。

仮面・覆面は昔からマスクの歴史を遡る

全国的には縄文時代の土面、弥生時代の木製仮面が知られる。いずれも宗教的なもの、祭祀や呪術に関するもので、仮面をかぶることで特別な呪力を持つことが期待されたのだろう。木製仮面は近年、奈良纏向遺跡で出土したものが有名。

飛鳥時代以降、仏教の伝来や神道の成立に伴って仏事や神事の仮面も続々と登場し、合わせて諸芸の仮面も様々に現れた。伎楽、舞楽の面、中世に下がる、

猿楽の翁面、神事の鬼神面などだ。古い翁や鬼面はお隣の加東市ほか県内にもかなり残っている。

さて、いよいよ小野の資料の登場だ。小野には国の重要文化財、ないし県指



写真上は、浄土寺所蔵の行道面(菩薩面=県指定、好古館提供)、左は加東市・上鴨川住吉神社の神事舞(加東市教委提供)



定定の面が31面もある。浄土寺に伝わる行道面だ。行道は寺院の大法会の際の行事で、面をつけた人たちが行列をし、仏像や堂塔の周りを廻りながら礼拝するものだ。浄土寺の場合は来迎会(迎講)の一大行事で、開祖・重源上人の終焉の際、阿弥陀三尊や二十五菩薩が来迎した靈瑞を再現したものと伝える。鎌倉時代初期から断続的ながら明治時代まで続けられたという。

催行には莫大な費用がかかるため、1656年のものは藩主一柳直次ら多くの寄進で執行にこぎつけたと伝えられる。数万人の参拝があったと思われるが、阿弥陀・菩薩らの仮面をつけた来迎の再現を見物することは、参拝者自らも極楽往生できると信じるに足る威力を持ったであろう。

中世はさまざまな身分、職業の人がさまざまな覆面をした。これが近世までも続くのだが、江戸幕府は度々覆面を禁じている。私が覆面禁止令を見たのは大学時代、豊臣政権の勉強中に見た「御掟」(大坂城中壁書)が最初だった。覆面での往来を禁じたのは、身分や面体を隠すことが謀反などにつながりかねなかったからだろう。

7月中旬時点で私の見るところ、世間のマスク着用率は9割以上。古くからの仮面信仰の伝統からだろうか。

小野の資料は残念ながらあまりなかった。市立図書館の和田真由さんから多数の文献を提供いただいたが、ほとんど紹介できなかった。ご免(面)なさい!

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩  
ジヨウニン塚(北丘町)



国宝浄土寺の北方に小さな祠があります。祠の内部には、小さな石造の五輪塔が置かれています。

昔ここで即身成仏した僧を祀るために作られたことから、この祠はジヨウニン(上人)塚と呼ばれているという事です。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その五十四)

コロナ禍に関連するコラムを6月号と8月号に書いた。そのころから小野市内の古代遺跡に診療所のような遺構があったはず、と気になっていた。最近複数の資料からそれが垂井遺跡と確認できた。医療関係の施設なら感染症の歴史を探る意味でも興味深い。今月は垂井遺跡を探ろう。

まず遺跡の概要を好古館図録「小野地区のあけぼの」などによって紹介する。神戸電鉄小野駅の南側、神明町と垂井町に所在する。弥生時代から中世まで続く遺跡だが、ここで注目するのは弥生後期(2世紀ごろ)のもの。いくつかの住居などを掘り開けた、いわゆる環濠集落と想定される構造だ。有名な女王・卑弥呼とほぼ同時代だ。

弥生時代に診療所存在か？  
垂井遺跡の多角形建物跡



▲写真上は、五角形住居跡の柱穴そばに子どもたちを立たせた。写真右は住居跡から出土した山陰型甌形土器(いずれも好古館提供)



さらに、甕、鉢、高坏などに混じって「山陰型甌形土器」という特殊な土器が出土したのがもう一つの注目点だ。甌はご飯などを蒸す珍しい形をしたもので、山陰型というのは文字通り山陰地方を中心に九州北部から北陸地方

などで特徴的に分布することからの命名だ。用途としては、住居や集落に伴う祭祀遺物説、蒸し器や燻蒸器などの実用品説、蒸気による医療用品説、さらに新説で煙突・煙出し説などがある。同遺跡を発掘した好古館学芸員(当時)の中西信さんは、こう結論付けた(「龍谷大学考古学論集1」2005年)。

播磨大中遺跡(播磨町)の多角形住居跡は、集落の中心にあることから村の共同施設と考えられている。しかし、垂井遺跡の住居跡は、環濠に囲まれた集落の外側に築かれていることや、山陰型甌形土器の出土から「医療用の診療施設」であった可能性が推測されると。

私の貧しい頭にもかかつて読んだこの結論部分がおぼろげながらも刻み込まれていたのだ。ところが、少し調べてみると、先述の図録では「垂井の集落で生活していた人たちが使用した村の共同施設と考えられます」と書かれているだけ。医療用の診療施設という記述は消えた。

中西さんの考えが変わったのだろうか。今般、コメントをいただいた。「公的な図録なので自論は避けた。個人的な見解ではヨモギなどの薬草を蒸したとか、蒸気による湯気を浴びるといった治療方法が行われていたのではないか。そういう診療施設があったと考えても不思議なことではない」とのこと。診療施設という見方を変えられたわけではなかった。ただ紙幅が尽きたので詳述できないが、好古館では医療施設説には反論も出ている。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

豊地城跡(中谷町)



東条川の左岸段丘上に位置する中世城郭です。城主は、播磨守護職赤松氏の有力家臣依藤氏で、豊地城を拠点として東条谷を治めていました。

東・西北の三方を川で囲まれた天然の要害地に築かれ、南側には、堀と土塁を築き防御を固めていました。幅約11m、高さ約5mの土塁が現存しています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その五十五)

コロナ禍に絡んで関連のコラムを3回ばかり書いた。皆さん食傷気味かもしれないが、今月は春のコロナ感染第1波の中、突如大ブレイクした妖怪「アマビエ」に触れたい。甘エビの間違いではないですよ。

アマビエは江戸後期、九州・肥後(熊本)の海中から出現、7年後の疫病流行を予言、自らの姿を写して人々に見せよと伝えて消えた幻獣だ。

今春まではマイナーな存在だった。妖怪名鑑のような本にも入っていない場合もあった。それがいまや日本三大妖怪の河童、鬼、天狗をはるかに抜いて人気ナンバーワンだ。テレビ、新聞、雑誌で特集が生まれ、さまざまなイラストが氾濫。お守り、菓子、酒……など多彩なグッズが登場した。

ただ、小野との絡みがまるでなく、本欄で扱うには躊躇があった。だがついに、あお陶遊館アルテのボランティアたちがアマビエの陶芸作品を制作。それが8月号のコミセンだよりで紹介さ

れ、市議会だより8月号の表紙にまで登場した。おかげでためらわずにコラムに書ける!

私がアマビエにこだわるのは、半人半魚のアマビエと私の郷里、富山県(越



写真右は、江戸末期に肥後の海中から出現したアマビエを描いた瓦版(京都大学付属図書館蔵)、上はあお陶遊館ボランティアがつくったアマビエの陶芸作品

エウブレイ、アマビエ、妖怪の産後、肥後、コロナ禍で突如

中)の人魚、そして深海魚リュウグウノツカイ(竜宮の使い)と関係があるのではと想像するからだ。

アマビエの正体としてはほぼ定説になっているのは、「アマビコ」(あま彦、天日子など)のピコがピエと誤って書き記され、広まっていったというもの。

そのアマビコはさまざまな姿が伝わっているが、二本足で海から出現する幻獣のカタチが多い。数年の豊作のあとに疫病流行を予言し、自らの絵姿で難を避けられると伝えたという。

越中・放生津(ほうせいづ)に出現した人魚は一度見たら悪事災難をのがれられた。お隣、越後・新潟浜の人魚は7年間の豊作と悪病の流行を予言し、自らの姿を見るものは悪病を避けられると告げたという(湯本豪一『日本幻獣図説』2005年)。アマビエと似ていませんか。

人魚のモデルとしては沖繩のジューゴンのほか、リュウグウノツカイが有力だ。富山湾など日本海側で冬、海の荒れた日などに魚網にかかることがある。細身の長大な魚で、背びれがカラフルで花魁(おいらん)のようにも見えたらしい。この姿がどことなく髪の長いアマビエを思わせるのだ。

肥後のアマビエは江戸に伝えられ、瓦版になった。アマビエ(ピコ)の絵姿は悪疫除けで売られた。近代化した(はずの)明治の新聞も度々記事にしている。これはコロナ禍の今の新聞、テレビも同じことか。

佐野允彦(まきひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

敷地陣屋跡(敷地町)



大部小学校の南方50mに小野藩敷地陣屋の記念碑があります。

小野藩の初代藩主一柳直次は当初、敷地町に大名陣屋を構えていたとされています。ただ、当池は防備を固めることが難しく、大名陣屋を構えた町づくりに適さなかったため、承応2(1653)年に小野小学校付近に移されました。敷地町に置かれていたのは10年という短い間でしたが小野藩の基礎がここで築かれました。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館)で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その五十六)

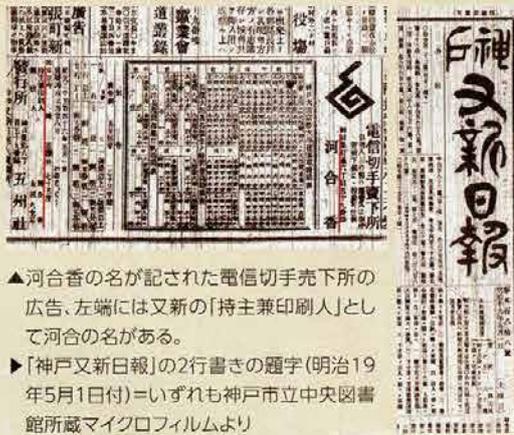
10月中旬に新聞週間があった。私は元新聞記者。小野と新聞が関わる題材を探していたところ、旧小野藩士、河合香なる人物が明治時代の地方新聞「神戸又新日報」に深く関与していることが分かった。どんな人物だったのか探ってみた。

維新後の1870年ごろ、新政府の命による藩政改革で、河合は知事になった主君、一柳末徳のもと「家政」を担う「家従」という役職に就いた。廃藩置県後の明治10年代半ばは飾磨県加東郡小野組戸長などを務めた。この間、福沢諭吉を中心とする知識人グループ「交詢社」とも関わり、自由民権運動に傾斜していった。

「明治14年の政変」後、森岡昌純県令は交詢社、立憲改進黨系の運動に弾圧を加える。改進黨系の「神戸新報」は1883年1月に発行停止処分を受け、発行部数が半減、急速に力を失う。

これに抗して改進黨系の県議らは新

### 小野藩士から新聞人に転身 河合香の後半生を探る



▲河合香の名が記された電信切手売下所の広告。左端には又新の「持主兼印刷人」として河合の名がある。  
▶「神戸又新日報」の2行書きの題字(明治19年5月1日付)=いずれも神戸市立中央図書館所蔵マイクロフィルムより

しい新聞社の創設を企図し、83年11月、新聞発行と印刷業の「五州社」を設立。翌年5月、「神戸又新日報」を創刊した。社長は市場の県議・近藤常三郎(豪商の近藤家一族)で、

2号(1979年)に格好の論文を見つけた。神戸新聞社友の西松五郎さんが書かれた「神戸又新日報略史」だ。河合個人の話に限って参照する。

河合のことを新聞経営については未経験だが、「商売人」と称している。又新の横書きの題字を珍しい横・縦の2行に改め、さらに又新の発行所に「電信切手売下所」を併設した。

河合が社主になって県会記事を重視したことなどから、当時の県令・内海忠勝に注目される。内海は86年3月、河合を県庁に招き、又新を4月から県政広報紙にかわる準県紙に指定すると示達した。又新は当時すでに経営不振となりつつあり、県庁の機関紙化を受け入れたのだろう。

これにより紙勢が急速に伸び、創刊1年後には80万部近くになった。それでも経営は改善されず86年夏(一説に91年ごろ)河合は社主を退き、造船業の川崎本家に経営を委ねた。

さらに神戸市文書館を訪ねたら、その資料で92年、「神戸日報」に庶務管理として迎えられたことまでは分かった。その後のことはなお不詳だ。河合の実像にさらに迫りたい。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 河合西廃寺跡(河合西町)



河合西町八王寺神社と薬師堂境内を中心に所在した古代寺院で、北側に高さ約60mの高台があり、石塔残欠も祀られています。鳥居の前には池が存在しており、当時は平等院(京都府宇治市)のように本堂前面に庭園としての池を配する寺院であったと考えられています。

昭和56年の発掘調査では、出土した建物の軒先を飾る軒丸の紋様から、平安時代末に建てられたことが分かりました。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その五十七)

幕末、河合中村の庄屋、三枝篤治(五郎兵衛)が「狐憑き」のある女房を加西郡東長村の医師、小野寺定敬に治療させた。「地域医療」の先駆けとして注目できる。こんな話を2018年11月の本欄で書いた。以来、加西の小野寺なら赤穂義士の小野寺十内と関係があるのではと気になっていた。今月14日は討ち入りの日。関係を探ってみた。

孫子の内十寺野小、義士赤穂  
も今に従業に医業で代々加西

パソコンのデータ検索で加西市王子町に「小野寺医院」があることがわかった。ブログによれば代々医業の家柄だとか。ならばそのご先祖に小野寺定敬がいた可能性はある。ぶしつけにも小野寺医院に手紙を出し、前院長の芳伸さん(72)に取材を受けていただくことができた。

門隊の重鎮として自ら槍を振るうなど活躍した人物だ。

2代目はその次子、伴庵だが、系図には「古田」と別姓が添え書きされている。「伴庵は討ち入り後、小野



▲古田伴庵が建立した小野寺十内父子の石碑。そばに立つのは子孫の小野寺芳伸さん(加西市東長町)

▲小野寺十内の浮世絵(赤穂市立歴史博物館提供)



寺姓をはばかり、古田と改姓、諸国を流浪したあと、東長村に居住、医業を始めたと伝えていきます」と芳伸さんが説明してくれた。加西には赤穂藩の飛び地の領地があった縁か、ほかにも義士の遺族が身を寄せている。系図には伴庵以降、芳伸さんの父、

芳久さんまで6代の名が記されているほか、あと2家の小野寺、2家の古田姓の名前が挙げられている。ただし、狐憑きの治療をした「定敬」という名前は出てこない。江戸時代、医師は名士で、学者、文化人。たいてい雅号を含め二、三種類の名前を持つていたから、定敬以外の名前系図に記されているのだろうか。

「うちは代々東長村のそばで医業を続けてきたから、先祖に定敬がいたのは間違いないだろう」。芳伸さんもこう付け加えた。

今般、関連資料を求め、「加西市史・第二巻(平成23年)を開いてみたら、江戸時代の「知識人の活動と文学・宗教」の節で、「両月村の寺子屋は医者的小野寺草詮が安永元年(一七七二)に創設した」という記述を見つけた。この人の名は系図にあり、この次の代ぐらいが定敬に当たるのだろうか。小野寺家は地域医療はもちろんだこと教育振興にも貢献してきた家柄だった。

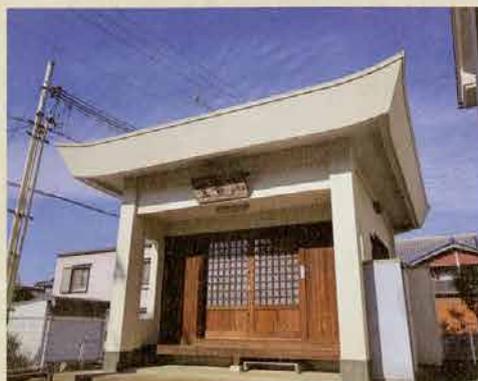
加西市内には先述の通り赤穂藩の所領があった関係で浅野家ゆかりの寺などがあり、今年も12月14日には義士祭が催されるはずだ。

佐野允彦(さのまさひこ)元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

観音堂(大島町)



大島町中公民館の敷地内にあるコンクリート製のお堂で、昭和56年に改築されています。本尊は十一面観音立像で、伝承によれば、日照りが続いて困った時に、この本尊に布をかぶせて水をかけると、雨が降り出すそうです。実際に水をかけた痕跡があり、伝承のとおり使われているのかもしれない。

また、当堂と対面してある地藏堂には、石造地藏像が安置されています。

「おのふるさと散歩」(800円、税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その五十八)

新年恒例の干支にちなむお話です。今年(丑年)例によって好古館のご教示を受けながら資料探しをしました。その一端を披露します。

日本列島には太古から野生の牛がいたようだが、邪馬台国で有名な『魏志倭人伝』(3世紀末)には「牛馬なし」との記述がある。播磨では古代の牛の資料・史料はほぼ皆無。

頼みの綱、『播磨国風土記』(715年ごろ成立)には、鹿、馬、猪の記述は多いが、牛の記述は2件のみ。ただ、志染の石室(三木市)に隠れ住んだオケ・ヲケ2皇子が馬飼い・牛飼いとして使役されたという話(5世紀末)がある。のちの顕宗、仁賢両天皇のことで、両天皇を祀った神社が小野市内に数社ある(2018年10月本欄)。

平安時代には農業で牛の使用(牛耕)が普及する。牛耕は浄土寺の開祖、重源上人による大部荘の開発・開墾でも活用されたはずだが、記録として

天神町の「牛天神」  
干支の丑にちなむエトセトラ

は残っていない。

平安朝の牛といえば、菅原道真。その関係については諸説あり。ただ平安以前の昔から天神、雷神に牛を捧げ、豊作や雨乞いの祭祀があった。



▶馬飼い・牛飼いに身をやつしたオケ・ヲケ2皇子の絵馬(神戸市西区の顕宗仁顕神社)

▶「牛天神」として信仰を集めた天満宮(天神町)

天神町の天満宮にはこんな話が伝わる。粗筋を記す。高砂の神宮寺の住職になっていた僧が古い天神像を生地の長尾村でお祭りしようと持ち帰った。だが、夢枕に天神さんがたびたび現れ、「奥村に住みたい」と告げた。これにより奥村にお宮を建ててお祭り

をした。古い天神像は菅公の手作りだったという。やがて靈験あらたかな「牛天神」と呼ばれ、縁日には牛馬を連れてお参りする人が増えたそうだ。

『加東郡誌』(大正12年)には垂井町の住吉神社の項に、住吉大神が里人の飼う牛に乗って川を渡り、和田の神に出会い、和田神を伴い帰ったという伝承を記す。のち例祭日に「牛の渡り」という神事が行われ、花笠をかむった小児が牛に乗って宮入し、その牛の尻を長刀で斬る所作をしたという。牛と神との深い縁をうかがえる。

下来住町の鍛溪神社は、古くは牛頭天王社と称していた。京都・八坂神社から勧請された。スサノオ(化身が牛頭天王)を祀る。牛のような角を生やした顔で画像が描かれる。疫病を防ぐ神だ。

最後に正月にびつたりの話。下東条地区では1月3日から5日ごろにかけ、いくつかの社寺・お堂で「地おこし」と呼ばれる行事が行われる。「牛王(牛玉)宝印」という護符を差した杖(木)を田のそばなどに立て、豊作を祈る。

この1年、「牛歩」でも皆様が着実に歩まれることを祈念します。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

室生山 常光寺跡(下来住町)



JR小野町駅西南500mの山裾にある寺院跡で、法道仙人の開基と伝わっています。

江戸時代に俊寂上人によって再興されましたが、明治初年の失火によって焼失し、廃寺となりました。かつては相当な規模の寺院であり、裏山には俊寂上人によって開かれた四国八十八箇所があります。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会・観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その五十九)

新年恒例の干支にちなむ話。1月号は紙幅の都合により「牛王(牛玉)宝印」という護符の話で唐突に終わってしまつた。豊作祈願との関係の説明もできず、消化不良の感が残つた。そこで今月

は牛の胃袋のように前号を反芻(はんすう)しつつ、牛と農業、雨乞いのつながりに言及したい。神戸の牛にも触れるが、おいしい神戸牛の話ではなく、我が家(東灘区住吉)近辺の「牛神」の話でご容赦願いたい。

前号で菅原道真(天神様)に關連して平安以前の昔から天神、雷神に牛を捧げ、豊作祈願や雨乞いの祭祀(さいし)があつた、と書いた。昨春、東灘区内の御影から住吉に転居した。自宅の目の前の公園名が「雨ノ神公園」で、後ろの公園名が「牛神前小公園」だつた。いたい子どもたちが集う公園になぜこんな名前をつけたのだろうか。

しばし思いを巡らし、これは牛を献じた古代の雨乞い祭祀(神事)の名残を示す地名(字名)ではないかと推察した(下図は昭和初期の住吉村字限図で、

牛神にも我が家が、牛神にも我が家の話

「牛神前」の「前」の字の右下あたりが我が家の位置)。50年ほど前の学生時代に読んだ、石田英一郎著「河童駒引考」を思い出したからだ。

そこには、牛を犠牲獣にして天神・雷神(雷雨神、水神)に捧げ、降雨を祈る



▲「牛の神」の祠(栄町の熊野神社)



▶昭和初期の「住吉村字限図」(一部)

祭祀が古代ユーラシア各地にあつたことを詳細に記していた。また、牛を献じての雨乞いの風習は、播磨などにもあつたとしている。

二つの公園の周辺に雨乞いを匂わす社や祠がないか探したが、何もない。だが、近くにある有名な古社、本住吉神社の社誌によると、「雨ノ神神社」、「牛神

さん」とも呼ばれる大日女神社が本住吉神社に合祀されていた。この2社はもともと字雨ノ神、字牛神に所在していたものという。

さらに小野市在住の考古学者、大平茂さん(県立考古博物館名誉学芸員)の新著『まつりの古代史』に「殺牛・殺馬の漢神信仰」という項目を見つけた。それには古代、県内にもひろく牛馬をいけにえとして祀り、雨乞いなどを祈る「韓神信仰」があつたようだという。例証の一つとして挙げられたのが神戸市郡家遺跡で出土した牛の下顎骨(5世紀末、6世紀初め)。同遺跡は雨ノ神、牛神に近い場所にある。

さて、「小野地区歴史遺産マップ」という冊子で栄町の熊野神社に「牛の神」が祀られていることを知った。ただ、由来がよくわからない。新年早々、同神社を訪れ、同マップの写真と照合しながら「牛の神」の祠を見つけたが、やはり由来は判明しなかつた。前号で紹介した「地おこし」と呼ばれる行事で使われる「牛王(牛玉)宝印」という護符は、熊野大社(和歌山県)の「熊野牛王神符」が有名なので、その縁からだろうか。モウしばらく考察が必要だ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

風呂ヶ谷池(久保木町)



久保木町集落の南の段丘谷筋にある町内最大の溜池です。隣村の東古瀬村から分家した内藤正平が自ら私財・銀180貫を投じ、文政4(1821)年に完成させました。

貯水量は92,500立方メートルで、完成後は千ばつの被害が起ころなくなりました。堤防には村人らによつて功績を讃える墓碑が建立されています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その六十)

「NHKの大河ドラマ『麒麟がくる』に荒木村重が出てくるのか来ないのか? 気になって仕方がない」。昨秋、県立考古博物館で村重の織田信長離反について講演された天野忠幸・天理大准教授が吐露された言葉だ。天野さんは

1976年、神戸市生まれで、戦国史の専門家。三好政権、松永久秀などに詳しく、近年は村重を再評価する著作も多い。

その村重が1月24日、ついに「麒麟」に登場した。今日は村重を紹介したい。北播の武将たちも多少関係しているからだ。

天野さんの著書『荒木村重』(2017年)などを参考に少し村重の説明をしたい。もっとも有名な事跡は信長への謀反(1578~80年)だ。

村重は摂津の有力武将で、信長に従い、1575年には摂津を平定。「摂津守護」として有岡城(伊丹城)に伊丹市を築く。この後2年ほどが村重の絶頂期で、織田政権で明智光秀や羽柴秀吉らと並ぶ重臣だった。しかし1578

### 大河「麒麟」に出た荒木村重 その時、北播の諸将の動向は



写真右は、野間の在田氏らが毛利・荒木方に組したと伝える書状(毛利家文書)、左は村重を描いた錦絵(伊丹市立博物館蔵)

年秋、信長から離反し、將軍足利義昭が画策する反信長包圍戦線に組する。離反の理由は「麒麟」では、將軍義昭の追放をはじめ信長の庄政としていた。同年11月に有岡城に籠城、中国の大

名、毛利氏などに援軍を求めている。さて、村重離反に東播・北播の諸将(国人)はどう動いたのか。

実は秀吉の播磨攻略以前に播磨の諸將と交渉を持っていたのが村重で、別所長治、小寺政職(御着城主)らとは比較的良好な関係を築いていたようだ。このため多くの諸將は信長―秀吉から離反し、村重―毛利氏に味方した。

1578年11月の毛利一族、小早川隆景の書状では、「御着の小寺、姫路(黒田氏か)、野間の有田(在田氏)、志湯(柳橋氏)、三木(別所氏)、(六粟の)宇野氏がごとごとく一味した」と伝えている。現・加古川市の柳橋氏、三木市の別所氏、現・多可町の在田氏までが村重―毛利に味方したというからには加古川中流域の小野、加東、加西あたりの武将たちの多くも村重方についたに違いない。ただ、それを明確に裏付ける史料はいまのところ未見である。おそらく別所氏、荒木氏の滅亡で文書類が散逸してしまったのだろう。

籠城の間、信長は親戚でもある光秀をはじめ重臣たちに村重の説得に当たらせた。有名なのは黒田孝高(官兵衛)だ。孝高は有岡城に赴き、幽閉されてしまふ。信長は孝高を疑って人質にしていた孝高の子、松寿丸(長政)の殺害を命じたが、竹中半兵衛が助けたという話だ。

ちなみに小野藩主・一柳家の祖、直末と孝高の妹夫妻の子、松千代は直末死後、孝高が引き取り、「松寿」と呼んで可愛がったという。何やら不思議な縁を感じさせる。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 磐代神社(西本町)



小野小学校の東に位置する神社で、小野藩一柳家の氏神として、陣屋が構築された時に建社されたようです。

祭神は大山祇神ですが、宝暦年間(1751~1764)に、一柳家の基礎を築いた一柳直末とその子、松千代も祀られています。祭日の3月29日は、羽柴秀吉の家臣として活躍した直末が、伊豆山中城で戦死した日にあたります。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十一)

去年11月号の本欄で明治時代後期(1885年〜91年ごろ?)に地方新聞「神戸又新日報」の社主を務めた旧小野藩士、河合香のことを紹介した。そのときは紙幅の都合で披露できなかったが、明治23年2月から27年2月まで神戸で県会議員を務めていたこともわかった。ところが、それから間もなく亡くなった河合の遺族の窮状を憂う旧小野藩主、一柳末徳の書状が残されていることを知った。このあたりの事情を探ってみたい。

絆深い後半にも 旧小野藩主と旧臣・河合香

まずこの書状だが、好古館長の石野茂三さんが翻刻・執筆した、旧臣惣代格、伊藤欣平宛ての末徳書状翻刻集の冊子「華族一柳末徳の奮闘と希望の星たち」(2019年)に収められている。明治27年10月19日付のもので、内容のあらましは次のようだ。

「過日、河合の長女の夫が来訪し、親族が困窮しており、未亡人を我が家の子守に召し使ってほしいと懇請された。実に気の毒な次第だが、当家は多

人数の家族のほか他家より預かった子どももいて、女中も召し使った本人には到底辛抱できないであろうと存ずる。もつとも河合は親しく仕えてくれた者ではあるが、ほかにも旧臣たちがおり、幾人も救助したいが、家計困難で



河合香の未亡人の処遇について相談する一柳末徳の伊藤欣平宛ての書状(写真上)、一柳家への見舞いの相談をする河合香の手紙(写真下)=いずれも好古館提供

意のままにならず残念だ。奉公以外に何か方法はないのか承りたい」

こんな趣旨の手紙を小野在住の旧臣の代表格である伊藤欣平に出しているのだ。

明治維新から30年近くもたっているのだから、旧臣の遺族のことまで心配することはなかりうに思う。ことに

一柳家の家計は、明治20年代後半以降ひび迫っていた。その理由の一端は、旧臣の起業資金の貸付金の焦げ付きによる。たびたび兄である旧三田藩主・九鬼家に財政支援を頼んでいるほど。

自らは夫人を亡くしたばかり(明治26年)で、家計の再建と子育てに苦慮している時期だった。そんな状況下でもなお旧臣のことを気遣っているのだ。

だが、河合ら旧臣たちも旧主のことを気に掛けていて、河合が「一柳様(末徳)への見舞いの贈り物はいかがしたら」という相談の手紙(明治26年12月)を伊藤に出している。この見舞いの贈り物とは、故夫人の忌明けにかかわる金品のようなのだ。

これより前の21年12月、東京の一柳家が全焼した際、旧臣一同(河合、伊藤ら46人)が火災見舞金を贈っている。これに対し末徳は「旧情を捨てず厚志の段」「家族一同感涙」「深く謝し申す」という礼状を書き送っている。

旧主は旧臣のことを、旧臣は旧主のことを互いに思いやっている一柳家の家風がしのばれる。一万石の小藩ゆえに殿様と家臣の間の絆がとりわけ深かったのだろうか。

佐野允彦(さのまさひこ)元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

岡城跡(粟生町)



粟生町島の天満宮付近にあった中世城郭です。

城主は金鑑城主・中村正満の家臣、丹生太郎左衛門といわれています。赤松氏再興のために行われた「長祿の拳」に参加し、討死しました。太郎左衛門の妻は夫の菩提を弔うため自性庵を建立し出家したということです。粟生町内には無縫塔などが残されています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十二)

今から490年ほど前の享禄3年5月15日、当時(1529~30年)の京都近辺の政界の実力者、柳本賢治が東播磨・東条谷(加東市から小野市にかけての東条川流域)に出陣してきた。当地の土豪、依藤氏を討つため、その居城(豊地城か)を盛んに攻め立てた。そんな中、賢治は6月末、突如陣中で暗殺された。味方の軍勢は総崩れとなった。いったい東条谷で何が起きたのか。今月はこの謎を探る。

柳本氏のことを簡単に紹介する。丹波の国人(土豪)の出身で、室町幕府の管領、細川高国の側近になり、実力をつけていく。政局を左右する有力武将にまで成り上がる。1520年代ごろ、

京都近辺の政界は將軍家、守護大名、土豪など諸勢力の集合離反が激しく、門外漢にはなかなか理解しづらい。専門家の研究(馬部隆弘『戦国期細川権力の研究』など)によれば、柳本は1527年以降、細川晴元に従いつつ、將軍義維(堺公方)の擁立に動いている。

京都政界の実力者、柳本賢治 東条谷に出陣中、暗殺される

1530年春にかけて京都近郊の土豪や商人を味方にしながら政治・軍事を握り、権勢を強めていく。京都政界の第一人者だったとまで評価する研究者もいる。ところが、1530年5月、6月の東条谷出陣で暗転してしまう。



写真は、柳本暗殺の地と伝えられる玉蓮寺跡地。いまは加東四国第十三番霊場の阿弥陀堂が立つ。(加東市秋津)

きっかけは、享禄3年(1530年)春、三木の別所氏が柳本に東条谷を本拠とする依藤氏の討伐を依頼したこと。別所と依藤は東播磨で覇権を争っていた。依藤は備前・西播に勢力を張る新興の浦上氏と結んでいて、別所は播磨守護の赤松氏と近かった。そんな中、同年5月、東条谷に出陣

し、依藤氏を攻めながら玉蓮寺(加東市)に駐留していた柳本が6月29日の夜半、暗殺されたのだ。

首謀者は当時、播磨守護代だった浦上村宗氏を頼っていた旧主・細川高国という(『兵庫県史』など)。浦上が西播の武将、中村助三郎に命じ、かつて柳本に仕えていた浄春(大和出身の山伏という)に暗殺させたと伝える。このとき柳本は陣中で酒に酔って寝ていたとされる。

当然のことながら土地勘がある依藤氏が手引きをし、かつ柳本の陣中での動向を事細かに中村らに伝えていたに違いない。依藤勢は反転攻勢に出て、柳本勢百余人を打ち取ったという。

『二水記』という当時の公家の日記には「悪逆の者は皆以てかくの如きか」と記している。暗殺を果たした中村助三郎と浄春に与えた浦上氏、細川氏の感状が今に残されているのが興味深い。

この事件は単に一人の武将の暗殺に終わらず、当時の近畿の政界地図を大きく塗り替える大事件となった。だが、地元の人たち(私も含め)にはあまり知られていない。依藤氏、豊地城のことも含めもっと知ってほしい事柄だ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩

曾根小学校跡(曾根町)



現曾根町公民館にあった小学校で、明治26年に開校しています。昭和22年に下東条小学校として統合後、校舎の一部を町公民館として利用されています。昭和52年の建て替えの際、校章を町の町章として残し、その記念碑が現公民館入口に建てられています。

また、入口に立つ門柱は、曾根小学校の当時の姿を伝えるものとなっています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会・観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十三)

大河ドラマ「青天を衝け」の主人公、  
 渋沢栄一(1840~1931)が慶応  
 元(1865)年春、「歩兵取立」(農兵  
 募集)のため、摂津、備中、播磨などの御  
 三卿・一橋家領を巡歴していた。渋沢  
 は農民出身ながら当時、一橋家

(当主はのちに將軍となる慶喜)の  
 家臣になり、一橋家独自の軍  
 備を建言。自ら農兵募集の任を  
 申し出て、「歩兵取立御用掛」に  
 登用されたのだ。結果的に播磨  
 (約103人)を含め総勢456  
 人もの農兵部隊を編成できた。

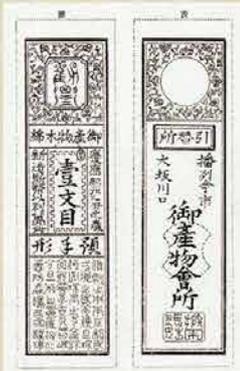
農兵募集に続くもう一つの仕  
 事が播磨などでの年貢米の売り  
 捌き方の改善、播州木綿の売買  
 事業だった。このとき摂津・播磨  
 に長期滞在。特に高砂をはじめ  
 とする東播磨に足跡を残した。あの「日  
 本資本主義の父」とまで呼ばれる偉人  
 が若き日(25歳ごろ)、東播磨と縁を結  
 んでいたと想像するのは愉快なことだ。

渋沢栄一が東播磨にやってきた  
 小野との接点の有無はどうか？

内を巡回しているうちに土地の物産の  
 売買などを調査し、播州木綿の売り捌  
 きなどを立案した。「之に依って幾分で  
 も藩の経済を豊かにし、併せて領民を  
 も富ましめよう」と考えたのだという。



▲令和6年度に発行される新1万円札の渋沢栄一肖像=財務省ウェブサイトより



渋沢が考案した木綿売買用に発行した藩札(今市札)=「高砂市史伊保編」(高砂市教委)所収

業者からの高額接待に応じ、省利省益  
 しか考えないどころか役人に渋沢の爪  
 の垢でも飲ませたいところだ。

農兵募集の成功を認められ、今度は  
 一橋家の勘定組頭に出世して(186  
 5年8月)その任に当たる。「まず第一  
 に兵庫(神戸)に出張して、播州、摂津

等から納める年貢米売捌の方法を立て  
 た」。かいつまんで言うと、年貢米で集  
 めた一橋領の良米を酒米用として灘の  
 酒造家に入札制で高く買わせて、大き  
 く収益を上げた。

次に目を付けたのが、一大産地であ  
 った播州木綿の売買だ。当時は専売制  
 を敷く姫路藩の木綿が席巻していたが、  
 一橋領内の木綿も良質で、これを買  
 集め、大坂や江戸でまとめて売ればか  
 ならず儲かると考えたのだ。

そして『高砂市史』によれば、同年8  
 月末から1カ月間、今市(高砂市)に逗  
 留し、産物会所開設の準備のため播磨  
 一 大坂を往復。今市に置いた産物会所  
 は同年末には活動を開始した。その仕  
 組みの概略は、藩札で木綿を買い上げ、  
 会所に集収して大坂の間屋へ送る。藩  
 札は会所で正金に両替できる一などと  
 いうシステムを構築したのだ。藩札発行  
 は3、4カ月で3万両にも達したという。  
 会所へは「印南郡をはじめ多可、加東、  
 加西などという郡中から出る」たくさ  
 んの木綿が集まったというから、東播の  
 木綿農家や商人が栄一構築のシステム  
 で潤ったのであろう。ただし、小野との  
 直接の接点は確認できなかった。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。  
 平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩  
 に「ごり池(浄谷町)」



浄土寺を建立した重源上人は、鹿野  
 ケ原を一晚で開墾したと伝えられていま  
 す。その時に利用した鍬や鋤を洗ったの  
 が、浄谷町公民館の南側に残る「塩田  
 池」で、これ以後に「ごり池」から「ご  
 り池」と呼ばれています。伝承によれば、  
 重源上人の命日にあたる6月4日の朝  
 方だけ、水が澄むと言われています。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交  
 流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売  
 しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十四)

前月号で大河ドラマ「青天を衝け」の主人公、渋沢栄一と東播磨の接点を探り、播州米や播州木綿との関係を紹介できた。ただし、小野との直接的な接点を見つけれなかった。次に考えたのは、渋沢は「日本資本主義の父」と呼ばれた。ならば当然、関西財界とも深い関係があったはず。であれば大阪の豪商、加島屋・広岡家とも縁があり、そこに婿養子を出した旧小野藩主一柳家とも…と連想ゲームのように広げていった。そして見つめました！

まず、2015年9月から翌春まで放送されたNHK・朝の連続テレビ小説「あさが来た」を思い出してください。主人公・あさのモデルは大阪の豪商「加島屋」に嫁ぎ、のち大同生命を創業し、我が国初の女子高等教育機関「日本女子大学校」の創立に尽力した広岡浅子(1849~1919年)。その娘婿になったのが最後の小野藩主、一柳末徳の次男、恵三(1876~1953)だった。

見発見点接的な間と栄一渋沢 一柳一族の藩主小野旧

浅子は日本女子大の創立に際し、渋沢の物心両面の援助を受けていたのだ。大同生命のホームページなどによると、1896年、渋沢は女子大創立の「賛助員」となり、翌年3月に発起



写真右は一柳恵三の義母、広岡浅子。左は広岡浅子と渋沢の名がある日本女子大学校の寄付書類—いずれも大同生命保険提供

人会議で浅子と対面。「会計監督」に推され、自ら多額の寄付をしたほか、広く政財界人にも寄付を呼び掛け、学生募集のため全国を回るなど「大いに奔走」してくれたという。その後も両人は会議や大学行事などで度々、対面している。渋沢はついには1931年、

91歳にして第3代の校長を務めるまでになった。

渋沢は浅子を含む広岡家とも交流があったはずだが、恵三との直接的な関係はわからない。ただ渋沢は慶應義塾の福沢諭吉と交流があり、慶応がらみで何らかの縁はあったかもしれない。

渋沢は幕府瓦解直前の1867年、徳川昭武(將軍慶喜の弟)のパリ万博使節団の一員として渡欧経験のある国際派。さらに4回におよぶ渡米経験もあり、日米親善に大きく貢献している。このことから恵三の妹で米国留学した一柳満喜子、米国出身の建築家、W・M・ヴォーリス夫妻とも接点があるのではと考えた。

そこかねて知り合いのヴォーリス建築の専門家、芹野与幸さん(せりのともゆき)から耳よりの情報が寄せられた。日米親善のため昭和初期、米国から日本へ親善人形(青い目の人形)が贈られたという話、皆さんもご存知でしょう。その日本側の受け入れ代表が渋沢だった。1927年3月、ヴォーリスゆかりの滋賀県では大津市と近江八幡市で贈呈式が行われ、ヴォーリスは米国代表として臨席したのだという。

佐野允彦(さのまさひこ)…元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

舟付三尊堂(山田町)



「三尊堂」と記された元治元(1864)年の棟札があるものの、本尊は不明で、堂内には、弘法大師像、石造五輪塔などが安置されています。

この「舟付」という地名の起りは、昔川舟が山田川をさかのぼり、舟が着いていたことによると言われています。また、高砂の住吉神社から、山田町住吉神社へ御幣を運ぶ舟が着く場所であったからとする説もあります。

「おのふるさと散歩」は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十五)

好古館で企画展「古墳礼讃—古墳ってこんなにあるの—」が開かれている。市内に残る古墳の目ぼしい出土品を勢揃いさせた興味深い催しだ。約1500点もの古墳資料が並ぶのは珍しく、コロンと一フンしそう。中でも私が注目したのは王塚古墳だ。

というのも2004年9月、西脇支局に転勤になって、小野市役所に挨拶に来て、すぐそばに古墳があるのを見て驚いたからだ。何ともコンパクトで、周濠(跡)に囲まれた、一目でわかる墳丘。しかも名前が「王塚」。古代の「小野」の王から江戸時代の陣屋、そして現代の市役所まで1500年以上にわたって小野地区(大部を含む)が小野市の中心部だったことが了解せられた。

では、王塚古墳の主はどんな王だったのか。手がかりは当然、古墳とその中身(副葬品)だ。まず古墳の規模。直径約45mだから、神戸市の五色塚古墳(全長約200m)、加古川市の行者塚古墳(同約100m)、加西市の玉丘古墳

王塚古墳の姿は？  
—小野の古墳展に寄せて



▲「市民の森」としても整備されている王塚古墳=王子町

◀王塚古墳から出土した副葬品の数々(好古館提供)



(同約110m)などの大型の前方後円墳に比べると小さく見える。だが、この古墳展を担当した好古館学芸員の山本原也さんによると、県内の約6,700基の古墳の中で王塚は上から30番目

ぐらいの大きさだそう。だとすると、小野地域の首長墓なのは間違いない。

このあたりには本来、数十基からなる大部古墳群があった。その中の核的古墳である「盟主墳」に位置付けられる。王塚の主は古墳の規模や古墳造営の土木技術からして、灌漑設備の築造な

どを通じ、低位段丘上のムラムラの農業経営を管理していたのだろう。

次に長大な竪穴式石櫛の内から出土した副葬品が注目される。特筆されるのは、見事な甲冑と多数の刀剣類などの武器・武器だ。これからすると、古墳の主は男性、しかも武人だったと想像できる。中でも冑は金銅装の「眉庇付冑」と呼ばれるもので、古墳時代の冑の典型品として他の博物館などから貸し出し希望の多い資料だ。

王塚が加古川の河岸段丘上に築造されたのも注目点。段丘下に営まれた集落の人々は、日々段丘上のお墓を見上げ、葬られた豪族を追慕しただろう。

私はこの王は当時のヤマト(河内)政権に直属ではなく、加西の玉丘古墳群か加古川の西条古墳群(行者塚を含む)の王を介して従属していたのではとみている。しかし、好古館の山本さんは、ヤマト政権にも玉丘などの勢力にも属さない独立した王だったと見ている。この見解も魅力的だ。

ちなみに王塚古墳は県指定の史跡として保存されている。夏休みの小・中学生の自由研究にもピッタリ。古墳展は9月5日まで。見学するのなら今でしょ！

佐野允彦(まのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介  
おのふるさと散歩

柳水大師(住永町)



粟田橋から高田町へぬける道路脇にある祠で、「お大師さん」とも呼ばれています。覆屋内に木製の小堂があり、弘法大師像が2体安置されています。毎年、8月21日には供え物をして、ご詠歌があげられています。

また、北方にある住永町公民館脇には、住永町を開発した宮永助左衛門の碑もあります。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その六十六)

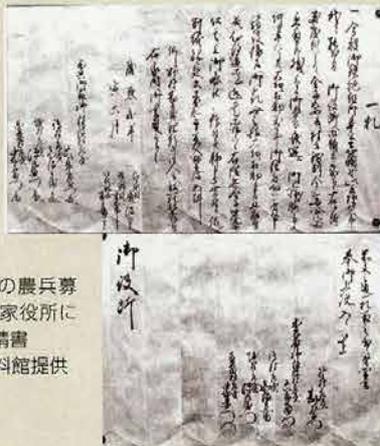
大河ドラマ「青天を衝け」の主人公、  
 渋沢栄一(1840~1931)が慶応  
 元年(2年(1865~6年)、東播磨で  
 「歩兵取立」(農兵募集)、年貢米の売  
 り捌き方の改善、播州木綿の売買事業  
 に取り組んだ場面が6月20日、  
 テレビで放送された。この渋沢と  
 東播の関係を知らなかった人が  
 意外と多く、東播地域でかなり  
 な反響を呼んだ。ついでに本歴史  
 コラムでも6月号でこの史実を  
 紹介したが、これにも若干の反  
 響があった。

こうした反響の一つに多可町  
 中区在住の宮崎和明さんからの  
 情報提供で、「西脇市史」に農兵  
 募集の史料が紹介されているこ  
 とを知った。宮崎さんの本業は神  
 主さん、かつ元中学校教員で、地域史に  
 詳しい方だ。

さっそく西脇市史を開き、当該の史  
 料を見つけた。それは「一橋領農兵志  
 願の請書」で、多可郡内の一橋家領の  
 庄屋たちが農兵募集の規定書を承知  
 したと一橋家の「御役所」に返書した

### ず非に許特売の専一栄沢渋 集募兵農や化売専の産物特

ものだ(西脇市郷土資料館の教示によ  
 る)。歩兵御取締役庄屋として東安田  
 村(現多可町)庄屋、忠右衛門ら4人の  
 名が出ている。  
 慶應2年6月のものだ。宮崎さんの



写真は、一橋家の農兵募集にかかわり同家役所に庄屋らが出した請書＝西脇市郷土資料館提供

ご先祖は代々宮司だった。特に曾祖父の  
 勘太夫は明治38年に東安田区長になっ  
 たそうだから、村に残る記録としてこの  
 書面を見たかもしれない。

ちなみにこの文書に出てくる忠右衛  
 門は酒米として有名な「山田錦」のルー  
 ツ「山田穂」の発見者、山田勢三郎の父

だとこれも宮崎さんから教えられた。  
 言うまでもないが、農兵募集は渋沢  
 の独創ではなく、幕末には多くの藩が  
 軍備強化のため採用している。小野藩  
 も農兵を募集、大阪湾岸警備などに動  
 員したという。

渋沢は播州木綿の専売にからんで準  
 備金を用意するため、東播の富農や商  
 家から借金をした。資金提供者には  
 「高砂市史」によると、加東郡垂水村の  
 藤浦常八、多可郡下比延村の廣田傳左  
 衛門らが出たが、ここでも小野市域の  
 人の名は確認できない。

播州木綿の専売制と藩札発行にから  
 む件だが、6月だったか「歴史街道」と  
 いうテレビ番組で、渋沢は姫路藩家老  
 の河合寸翁(道臣)のまねをしたとい  
 う話をしてきた。河合の事跡(1820~  
 35年ごろ)を見ると、たしかに渋沢の事  
 業の先駆と見えるものが少なくない。

渋沢自身、その自伝で姫路藩の木綿  
 専売に注目、「播州木綿が」姫路では立  
 派に一種の産物となっているのに、一橋  
 領のものは重立った産物とならぬのはす  
 こぶる残念」と悔しがっている。一橋家  
 領での木綿専売など、姫路藩の木綿専  
 売制に学んだことは十分考えられる。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。  
 平成22年7月から小野市学術政策員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩

灯籠(垂井町)



住吉神社の北方を流れる万勝寺  
 川の右岸にある灯籠で、住吉神社へ  
 向かう参道の常夜灯として造立さ  
 れたといわれています。高さ4mの大  
 きなもので、表面に「往来安全」、裏  
 面に「文久元(1861)年辛酉  
 十一月、七十翁隆正書」と刻まれて  
 います。

この銘文は、小野藩の藩校である  
 「帰正館」を創立した大國隆正が、  
 70歳の時に記したものです。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市  
 観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統  
 産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十七)

今月も大河ドラマ「青天を衝け」にちなむ話題だ。ストレートに小野に結びつくわけではないが、ネタ不足のりからご容赦願いたい。

話の中核は、ドラマの主人公、渋沢栄一とほぼ同時代を生きた河合中村の豪農、三枝五郎兵衛(治寛)のことだ。渋沢の事績を知るにつれ、私は三枝とよく似ているなあと感じたのだ。三枝については本欄で3度ばかり紹介したことがある。ダブルリになるかもしれないが、振り返りつつ両者の類似点を探っていきたい。

渋沢家は武蔵国血洗島村の豪農で、藍の売買なども手掛けていた。栄一は縁あって1864年、徳川家御三卿・一橋家の家臣となる。東播などで農兵募集や木綿の専売制などを献言、自らその任を担う。

三枝は河合中村の豪農(資産は恐らく渋沢家の数倍)、庄屋だが、その資産や手腕を認められ、1843年、領主である徳川家の御三卿、清水家の

渋沢の同類が小野にいた! ?  
河合の豪農、三枝五郎兵衛



写真は、清水家に役人として登用された三枝治寛の肖像画  
—好古館提供

士分に登用される。清水家の播磨所領の取締役(農政・財政官)として活躍。この間、さまざまな行政改革案を清水家に献言、幾つかを実行に移す。どうです、似ていませんか。一橋家

も清水家も東播に所領があり、近接するエリアもあった。統括する役所は両家とも大坂・川口にあり、渋沢も三枝もその役所に入りに入っていた。しかも1866年12月には將軍となった一橋慶喜の弟、昭武が清水家の当主となる。この昭武は翌年、パリ万博使節とな

り渋沢が使節団に加わる。パリ万博はドラマでも3回ぐらいいわたくし放映されたからご記憶の方も多いでしょう。東播か大坂かわからないが、幾つかの局面で渋沢と三枝が交錯した可能性はないだろうか。

三枝の清水家への意見書(1868年10月)では、年貢米売り払いの改善策、特産品の江戸での販売、金銀銭米札(藩札)の取り扱い、村民の砲術など軍事訓練案などが含まれている。渋沢の建言とよく似ている。

渋沢は「一橋家の財政を豊かにし、あわせて領民の暮らしもよくしたい」と考えていたが、三枝もまた清水家の財政の安定と「百姓成り立つよう」と領民の生活安定を願って活動していた。明治維新直後の両人の新政府や地方での活躍ぶりにも共通項がある。渋沢と三枝、ともに百姓身分から武士に取り立てられ、主家のため、領民のために尽力、維新後も中央であれ地方であれ政治・行政に尽くした。単に二人が似ているということだけでなく、幕末維新期には各地にこういう人材が輩出し、それによって維新の変革が下支えされたのではなからうか。

佐野允彦(まきひこ)：元朝日新聞記者。  
平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

若一神社(阿形町)



南側入り口に立つ享和3(1803)年の鳥居を抜けると境内が広がり、正面に本瓦葺、入母屋造の拜殿と銅板葺、流造の本殿があります。境内には文化10(1813)年、文政7(1824)年、天保4(1833)年の銘をもつ燈籠が置かれています。毎年10月第2日曜日には、神事として獅子舞が奉納されます。この獅子舞については、昭和48年に西脇獅子舞保存会が発足し、大切に伝承されています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の  
おの歴史散歩余話(その六十八)

本欄のネタに困った時の頼みの綱の一つが柳田国男翁(1875~1962)。今月は柳田翁にすがる。新暦では11月になるが、本来は旧暦10月の「亥」の日の行事である「亥の子」のことを紹介したい。収穫の秋にちなみなので。

柳田は福岡町出身、日本民俗学の父だ。膨大な著作の中であちこちに書いている思い出の一つが、子どもが主役の「亥の子」だ。目についたところでは、「年中行事覚書(1955年)」、「故郷七十年(1989年)」がある。後著から記述を少し抜粋する。

私が子どものころ播州では亥の子という行事が盛んであった。新薬で束をあつらえ、その中に竹などを巻き込み、取っ手の輪を付けたスポというものを作る。子どもたちはこれを持って調子をそろえて、ぼおん、ぼおんと地面をたたく。「亥の子餅くれんこ、くれん家のかかは、鬼うめ、蛇うめ、角はえた子うめ」。そう歌いながら村の道を練るのであった。

子どもたちはこんな脅し文句のよう

「餅くれんかかは鬼うめ」  
昔、「亥の子」があった

写真右は、亥の子の記述がある柳田国男の著作(筆者の蔵書より)。下は、亀岡市畑野町の亥の子行事(1978年)。子どもたちが薬束で地面をたたいている(太田貴久男さん提供)。



な歌を歌い家々を回り、餅をもらったのである。秋の一夜、「お菓子をくれないといたずらするぞ」とはやして回るハロウィーンの行事と似ていませんか。これらは来訪神に関わる祭事だった

のだろう。ある月のある日の夜、どこからか訪れ、その家に福をもたらしてくれらる神を迎え入れる行事。この来訪神が子どもに転化し、子どもにお礼として餅や団子を贈るようになった。私が何かと指導をいただいている民俗学の研究者、埴岡真弓さん(姫路市)も「子ども

はいわば来訪神で、家々を祝福して回っていると言える」とのお考えだ。

こんにちの民俗学では、農耕の収穫祭(刈り上げの祭り)とする見方が強い。

さて、肝心なことだが、亥の子行事、小野市域にもあったのだろうか。「加東郡誌(1923年)」は「十月亥の日亥猪」と30行ほどで紹介しているが、行われていた町村名がない。

小野市域のデータを求めあぐねていたところ、レファレンスサービスをお願いしていた市立図書館から朗報が届いた。

『播磨国大郡現況調査報告書』(同市教委)に市内8地区の事例が記述されているという。そこに興味深い記述があった。歌を歌いながら餅や団子をもらうのは他所と同じだが、葉多町では便所のふたをたたいたという。いずれも終戦前後で途絶えたとしている。

市内の亥の子行事の写真が入手できなかったため、私の大学時代の恩師、故竹田聴洲先生(民俗学)の同門である太田貴久男さん(京都府亀岡市)から同市の写真を提供してもらった。

ハロウィーンにちなむ行事が小野でもあったが、伝統行事にこそ目を向けるべきでなからうか。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

祇園神社(池田町)



池田町南方の山裾にある神社で、鳥居を抜けると境内が広がっています。境内西には、瓦葺の本殿・脇殿が並び、東には舞台および太鼓小屋があります。

舞台は、元は茅葺、入母屋造の大きな建物で、正面は開け放たれています。祭礼の時には、農村歌舞伎が演じられたとみられ、貴重な民俗文化財といえます。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その六十九)

今年の「読書の秋」に読んだ中で面白かった一冊は、『室町は今日もハードボイルド』（清水克行著、新潮社）。特に落書きについての一章を興味深く読んだ。戦国時代のお寺の落書きに男が男への恋情を吐露したものが多くというところで、国宝、浄土寺・浄土堂の落書きを思い出したからだ。おりしも好古館で浄土寺の特別展を開催中。今月は落書きの話しよう。

たはやくは落書き世の中  
てよせよ特別展浄土寺

まず「室町は」の関係記述を紹介する。「若もじ様、恋しや」「せめて一タお情けうけ申したく」などと男性同士の同性愛をつづったものが多数を占めるとしている。

さて浄土寺・浄土堂の落書きだ。『小野市史第一巻』によると、板壁に数十件の落書きがあり、「西国三十三所巡礼」などの文字とともに、参詣者の氏名、在所や参詣日の年月日が記されている。

625年)におよぶ。全国的に盛んになった西国巡礼の時期とほぼ重なる。参詣者の在所は、東の遠方は奥州平泉をはじめとする東北・関東、西は出雲、九州・筑前などに広がっている。



私が注目するのは、「東条依藤殿御内ニ□七郎□御恋しや」「御若衆恋しや」などと記したものの。市史は、「依藤氏の内者(被官)や若衆に対する恋慕の情を切々と書きつづったもので、「衆道」の相手に宛てたものであろうという。依藤氏は数代にわたり戦

国時代、東条谷の覇者だった。戦国時代、男同士の関係はそう特異なことではなかった。「衆道」と呼ばれていた。歴史上もっとも有名なのは織田信長と小姓の森蘭丸の関係だろうが、近年は後世の創作との見方もある。ともあれ戦陣で一心同体となつて戦うことができたからだろうか。

『室町は』の参考文献で『落書きに歴史をよむ』（吉川弘文館、2014年）を知った。著者の三上喜孝さんの勤務歴からして東北地方の事例紹介が多い。それによれば、「あらあら恋しや」とか「若もし(若衆と同意語)」など浄土寺の落書きと同じような文言があるようだ。これらの文言は定型化していたとみられ、西国巡礼の流行に伴い、全国的に広がったようだ。

寺院の諸堂に落書きが多いのは、参拝者が記念に残すだけでなく、仏との縁を強くする願いを込めた信仰の一環であった。やがてそれが衆道成就の願いにも転化、拡大したのでろう。

今月は浄土寺展(12月5日まで)にちなみ落書きに見る衆道的一端に触れた。念のため私自身はその方の趣味はないので誤解されないように。

佐野允彦(さのまきひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

カヤの木(河合中町)



亀鶴山慶徳寺の本堂正面に立っている古木で、開基見芳和尚の手植えの木と伝承されています。かつては、高さ18メートル前後、目通りで幹囲3.7メートル、根本4.3メートルを測り、地上より4メートルくらいのところで主幹が三つに分かれていました。

毎年秋になると参詣者にこの実が配られていました。

このカヤの木は、平成5年12月に市指定の保存樹木となつています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館)で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その七十)

本欄の新年恒例は干支にちなむ話だが、自分で調べた限り小野市域で今年の干支の寅(虎)にちなむネタはほぼ皆無。例によって好古館に助けを求めた。さすがは好古館。虎の子のネタを幾つか教えていただいた。ただそれだけでは話が持たないので、全国レベルの話も交えながら筆を進めたい。

日本にはもともとトラは生息しておらず、古代、中国・朝鮮からまず絵画、彫刻などで伝わった。有名なのは飛鳥の高松塚、キトラ古墳の壁画の四神図。西方の守り神として白虎像が描かれている。

東アジアでは虎が最強の動物とされた。その威力からお守り的な存在にもなった。武士はこぞって虎皮の鞍や狩り袴を求めた。虎の威を借りて名前にもした。有名なのは戦国武将、加藤虎之助(清正)。朝鮮出兵時の虎退治の逸話がある。だがこれは後世の創作らしい。ただ、出陣した複数の武将が虎狩をし、生きた

### 寅年生まれの殿様がいた —今年(寅)の干支の寅に寄せて

虎を豊臣秀吉に献上したのは事実。のちの小野藩主、一柳家の先祖も出陣しているの、見たかもしれない。ほかに虎の名の有名な人は、越後の長尾景虎(のちの上杉謙信)、甲斐の武



写真上は、脇本町の太鼓屋台の水引幕に刺繍された虎の絵(左側)、右は観月亭松華作の張子の虎図の掛け軸(いずれも好古館提供)

田信虎(信玄の父)、藤堂高虎らやはり武将に多い。信虎は昨年11月、映画になり公開された。

現代日本で一番有名な寅さんは、フーテンの寅こと車寅次郎。映画「男はつらいよ」の主人公だ。全国各地でロケがされたが、兵庫県内はたつの市

と神戸市だけ。北播磨にも来てほしかった。

小野藩に寅年生まれの殿様がいた。1758(宝暦8)年、戌寅生まれの一柳末英だ。1779年、6代藩主となる。先代の末栄が藩中興の祖と称えられたため、影が薄い、父のあとを受け継ぎ、24年間におよび、治世に励んだ。父の還暦祝いで全領民に銀一匁を下賜した。現代でいえば特別給付金のようなものだ。

虎に宿る霊力は無病息災と護身になると信じられ、虎の人気は江戸時代から明治以降も続く。庶民の間でも玩具の虎張子が広まった。

時代が特定できないのは残念だが、小野市域では脇本町と天神町の太鼓屋台の水引幕に虎が刺繍されている。また、小野商店街にあった吉田表具店から好古館に寄贈された資料の中に、観月亭松華描く張子の虎図の掛け軸がある。

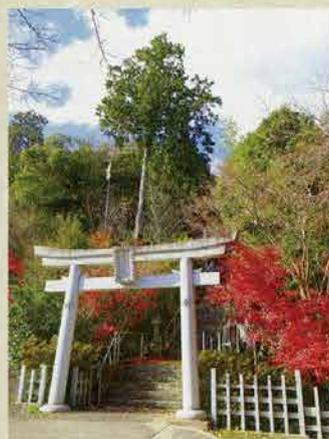
小野に関わる資料が少なくして申し訳ない。ネタ不足のおりから北播を含む幅広いエリアの話にもトライしたい。市民の皆様もこの1年、猛虎のご活躍されますように。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

鍛溪神社(下住町)



鍛溪温泉の横にあり、牛頭天王を主神としています。溪谷の奥深い閑静な地に境内があり、鳥居を抜けて社殿まで至る長い参道には、氏子により寄進された多くの燈籠が並んでいます。

悪疫をはらい安泰を祈願するために毎年1月7日(現在は7日に近い日曜日)に行われている「マト神事」。黒と白で塗り分けられた、中が同心円形で外枠が六角形のを立て、その的に向かつて7人の射手が矢を射かけます。的中すれば良く、当たらなければ手や棒などでの的を破るそうです。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会「観光交流推進課内」、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

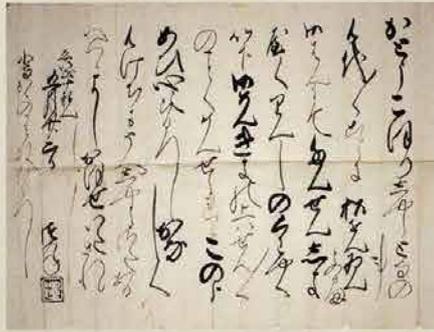
おの歴史散歩余話(その七十一)

今年のNHK大河ドラマは「鎌倉殿の13人」。鎌倉幕府初代將軍、源頼朝の妻、北条政子(「尼將軍」)も登場するはずだ。そんなことに思いをはせながら、昨秋好古館の浄土寺をテーマにした特別展で一通の古文書に出合った。播磨守護家の赤松氏の後室(後妻)、洞松院の印判状(浄土寺所蔵)だ。

洞松院のことは2017年11月の本欄で紹介しているので、詳しい記述は割愛する。室町幕府の重鎮、細川勝元の娘で、播磨の名門、赤松氏当主・政則に嫁ぎ、政則没後は後妻として赤松一門を取り仕切り、30余年にわたり事実上の

永正10(1513)年のもので、この古文書こそ尼將軍のミニ版とも言える「女大名」洞松院の実力の一端を示す貴重な史料なのだ。たまたま所蔵していた今谷明著「謎解き中世史」(洋泉社、1997年刊)を開いてみたら、「女人政治の中世」の章で室町幕府第8代將軍の足利義政の妻、日野富子と並ぶ女性政治家として紹介している。

“女戦国大名”、洞松院再考見  
「めし」様の名前へ私見



写真は、洞松院が出した浄土寺関係の印判状(浄土寺所蔵)。黒田官兵衛と縁が深い小寺則職の名があるのが目を引く(好古館特別展図録から転載)

女大名になったとだけ紹介しておく。

さて今回洞松院を取り上げたのは、彼女が「めし」様と呼ばれていたことがどうも気になっていたからだ。史書によれば尼になっていたのを召し出して政則の妻としたから「めし」様と呼ばれたのだという。私はこんな単純な話ではなからうと思う。確かに「召し」の意味もあ

つたろうが、その背景、底流、基層として古代以来の女性が担った役割が潜んでいると考えるのだ。

それは女性の役割、とくに一家の女主人としての責務で、「一族郎党に「飯」」「食事、「召し物」」「衣服を安定的に提供する役割を担うことが期待されていたことだ。人が生きていく上で大事な「衣食住」のうちの二つまでもが女主人の果たすべき仕事であった。

日本史上初の女性天皇、推古の名前は「豊御食炊屋姫(「日本書紀」)だった。鎌倉幕府以来、將軍の妻は「御台所(御台)と呼ばれたが、これも台所を仕切るという意味が込められていたのだらう。洞松院は家政だけでなく領国の国政まで取り仕切ったわけだ。

ところが私が懇意にしていた、という播磨の歴史・民俗の研究者、埴岡真弓さんから、「めし」は「女司」ではとの教示をいただいた。「姫路市史」に記述があり、「古代の後宮十二司の呼称に由来するものでは」というお考えだ。この女司説が妥当かどうか研究書を読み始めたところだ。

皆様、私の飯説を噴飯ものと思われるか、またはお気に召しますかどうか。

佐野允彦(さの まさひこ)元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

弁慶の重ね石(榎山町)



県道加古川小野線脇の台地中腹部に位置し、案内標柱の所から丘陵を上っていくと3個の巨石が積んだように重なっています。

伝承によれば、三草山合戦(1184年)の後、ハッタイ粉を食べて満腹になった弁慶(源義経の再来)が、石を力いっぱい投げて積んだといわれています。

このため「弁慶の重ね石」または「力石」と呼ばれています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その七十二)

2月の本欄はNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」から「尼將軍」北条政子のミニ版として播磨守護、赤松政則の後室(後妻)、洞松院を紹介する。無茶ぶり<sup>①</sup>をした。さらに、洞松院が「めし」様と呼ばれていたことについて「飯」ではないかという私見(妄説?)を述べた。

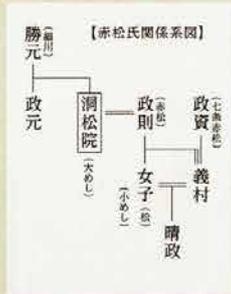
その一方で「姫路市史」に「めし」(女司)との注記があり、「古代の後宮十二司に由来するものでは」との研究者の見解も紹介した。今月は少しでも理解していただくための材料を提示したい。

まず後宮十二司のことだ。これは古代の律令制のもと天皇の後宮に仕える十二種類の役職のことで、女官の総称だ。このため「女司」とも呼ばれたようだ。須田春子著『律令制女性史研究』(昭和53年)でも史料としては「令義解」(令集解)の各一件だけ。両書は、養老令の注釈書で、いずれも9世紀の編纂だ。後宮職員(女性職員)を「女司」としている。

### 「めし」=「女司」説の適否 一続「おんな大名」洞松院

これを案ずるに「女司」なる言葉は平安前期の法令の注釈書に出てくるだけで、一般には流布していなかったのではないか。ましてや洞松院の存命中の室町中期に「女司」という言葉を

宮人 謂婦人仕官者之類也。禮部別也。職員、兼云。良心。次云件宮人等亦在御所後也。  
内侍司 謂云以下女司十有二局並在內裏後。奉上天蓋以授尋常之實事須便也。  
尚侍二人 掌供奉常侍奏請。謂奏而請其禮也。今云記云典侍注。納言一員也。謂云奏請者奏而請其禮也。次云。諸奏事皆少納言以上所行未知此所掌何事乎。皆自監錄也。  
▲「令集解」にある「女司」の言葉を含む条文(新訂増補国史大系23巻)



▲洞松院を含む赤松氏関係の系図(黒田樹樹著『戦国「おんな家長」の群像』掲載の系図を一部改変)

知る者は奈良・平安朝の官職を調べる公家の学者ぐらいいしかなかったのではなからうか。女司には高位の女官から位のない下働きのような女まで含まれる。そんな女官である「女司」という呼称を室町中期のトップ級の女性に使っただろうか。

「女司」説が成り立つためには、当時の言葉が流布していること、高貴な身分の女性にも「女司」という名前が付けられたという類例がほしいものだ。

では私の「飯」説に史料はあるかといわれると皆無だ。わずかに傍証があるだけだ。前月述べたことのほかに、東播磨に縁の深いオケ・ヲケ2王子の庇護者である皇女が「飯豊青皇女」と呼ばれたこと。この皇女は推古女帝以前、史上初の女性天皇だった可能性もある高貴な女性だ。国を統べる最高級の女性にも「飯」という名前が冠せられているのだ。

「飯」=食事の安定供給は古代、中世、近世を通じて女性の重要責務で、民俗学の父、柳田国男も食事をつかさどる女性の役割を大きく評価している(『木綿以前の事』昭和30年)。その権限は姑から嫁に移譲されるが、「しゃくし渡し」などと呼ばれた。洞松院が「大めし」、その娘が「小めし」と呼ばれたのはしゃくし渡しを暗示すると言えないだろうか。皆さんに少しでも理解していただければ、私の飯の食い上げにはならないだろう。

佐野允彦(まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

## 市内の史跡などを紹介 おのふるさと散歩 鮫坂城跡(高田町)



加古川と東条川の合流点から東方約900mの段丘突出部に位置する中世城郭です。城は幅約7m、深さ約6mの空堀によって、北と南に分かれ、北側の平坦地が主郭です。西斜面下の北辰こども園付近にも、堀や屋敷の跡とみられる地形が認められます。

城の系譜などははっきりしませんが、城主は三木・別所長治の家臣、鮫権之丞と『加東郡誌』に記されています。「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その七十三)

2〜3年前、神戸市立埋蔵文化財センターで昭和40年代の学校給食のメニューが再現・展示されているのを見て驚いた。なら30年代の給食を食べていた自分だからだ。こと博物館入りか。

おひざ元の好古館では企画展「ザ・昭和のくらし①―懐かしい台所風景―」が開かれている。かつて「明治は遠くなりけり」と吟じた俳人がいた。昭和ももはや「歴史」の範疇ということか。企画展をのぞいてみた。

「昭和史」は太平洋戦争の敗戦(昭和20年)を挟み、戦前と戦後に大別される。戦後は45年(1970年)前後をさかいに時期区分ができるのではないか。東京オリンピックが終わり、ピートルズが来日(41年)、ミニスカートが流行し(42年)、大学は学生紛争が吹き荒れていた。45年には大阪万博があり、東大全共闘と論戦した三島由紀夫が自決した。世の中が変わったと感じた。

さて、好古館の企画展は戦前戦後の

「ちゃぶ台返し」もレトロ!?  
—好古館「昭和のくらし」展



▲写真は、すき焼き台付きのちゃぶ台。私も一度ぐらいちゃぶ台返しをしてみたかった=好古館で

資料を「食生活の移り変わり」、「昭和のレトロ家電」、「印刷物に見る台所見聞記」の3テーマに分けて展示している。見学者は高齢の方が多く、懐かしそうに見ておられた。

私が興味を持ったのは、すき焼き台付きのちゃぶ台だ。こんなタイプのちゃぶ台は初めて見たからだ。平成生まれの若い世代にちゃぶ台がわかるだろうか。庶民の家の台所に隣接した茶の間に置かれた丸い座卓式(四角のもの)の食卓で、そこに家族数人が座って食事

を共にした。一家の主人が何か気に入らないことがあると、ちゃぶ台をひっくり返した。世に言う「昭和のちゃぶ台返し」だ。

テレビアニメでは「巨人の星」で星飛雄馬の父、一徹がよくちゃぶ台返しをしていた。まだ一家における父権が存在していた時代だ。平成、令和の世では望むべくもない父権発動の行為だ。家に畳の茶の間、居間がなくなり、ちゃぶ台も姿を消していった。そして父権も衰えた。

ちゃぶ台がまだあったころ、昭和30年代半ば以降、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫の三種の神器が一般家庭にも普及し始めた。いまや一人に一台、カラーテレビが当たり前だが、当初は近所のテレビのある家に見に行ったものだ。

昭和の末年ごろだったか、関西の大学の民俗学の先生が「近ごろの学生はカンテキも知らん」、ベテランの上方落語家が「へつついも知らん若い弟子がおる」と憮然としていた。

昭和の文物もほとんど失われていく。企画展は4月3日まで。まだの方はお見逃しなく。

佐野允彦(さの まさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

トノサマ溝(西本町ほか)



大池の越水路を別名「トノサマ溝」と言います。小野藩の領地は、元和3(1617)年〜寛永9(1632)年まで明石藩十萬石の小笠原忠真が治めていました。この時に越水路もつくられた。この溝も「明石の殿様」がつくったことから「トノサマ溝」と言ったのでしよう。

横幅約2尺、深さ約1.5尺の深溝で、小野藩は陣屋町の内、特に陣屋と武家町の防備に、この用水路を内堀として活用していました。ちなみに北に位置する大池と現在権現池となつている深い谷は外堀の役割を果たしていました。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会「観光交流推進課内」、好古館、伝統産業会館で販売しています。



# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その七十五)

前月の本欄はNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にちなみ、北条義時や播磨国守護となった梶原景時らのことを紹介した。いかんせん色気のない話になってしまったので、今月は少し艶っぽい話を書いてみたい。中核の話は池尻町に伝わる「夜泣きの白拍子」伝説だ。手元にある「おのふるさと散歩(改定版)」(平成11年)をもとに粗筋を記す。

源平合戦のころ、白拍子が恋する侍を訪ねてやってきたが、疲れ果て病に倒れてしまう。恋人にも会えぬ悲しみに昼夜泣き続け、死んでしまった。亡くなるとき世話になった村人たちに「私は泣きあかして死ぬが、夜泣きで苦しむ子供たちを治してあげる」と言い残した。村人たちが祠を祀ったが、夜泣きの子供たちを連れ

### 「夜泣きの白拍子」伝説に影の義経の愛妾、静御前の



▲写真上は、白拍子の姿を描いた「七十一番職人歌合」=日本古典籍データセット(国文研所蔵)より。  
▶写真右は、夜泣きの白拍子伝説にちなむ大木のなごりと祠(池尻町で)

る。平安時代後期から鎌倉時代にかけて隆盛した。白拍子は天皇・貴族・武家に寵愛さ

さて、白拍子は水干という白い冠、立て烏帽子、白鞆巻の脇差を差すという男装で歌い舞う女性芸能者だった。一人ないしは二人で歌いながら舞うの

その静だが、兄の源頼朝に追われる義経と吉野山で離別した後、鎌倉方に

捕えられる。そのおり北条政子からの願いにより鶴岡八幡宮で「しづやしづ・・・」と義経を恋慕う歌で舞い、頼朝の怒りを買う。やがて男子を出産するが、取り上げられ、殺されてしまう。失意のうちに泣きながら、京都に帰るが、以後の消息は分からない。

私には恋人と別れ、さらに子どもも奪われた静の晩年が「夜泣きの白拍子」とダブって見える。静にまつわる話が夜泣きの白拍子に投影されているように思えるのだ。池尻の白拍子は京都からやってきた。

そもそも池尻の伝説がいつ成立したのだろうか。例によって小野市立図書館のレファレンスサービスのお世話になった。20件ほどの文献を調べていただいたが、意外にも最古の文献は昭和45年発行の『はりまおの 小野市拾遺』という小野市老人連合会編集の本だった。地域の伝説集は明治、大正、昭和戦前のいずれかの時期に編纂されたものが多いのだが、昭和45年になって初めて採録されたというのはどうも解せない。池尻市場地区の皆さん、私の疑問を晴らすべく白拍子伝説の古い証拠を探してください。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩

### 来住城跡(来住町)



来住町家老戸谷にある中世城郭です。東西約55m・南北約48m・高さ約2mの高台が主郭とみられ、周囲に土塁と堀のなごりをとどめています。

城主は、清和源氏多田満仲の子孫である来住氏とされ、来住地区を領する一村領主であったようです。その後、天正年間(1573~1592)の城主は来住景政で、嫡子景利とともに別所方として三木合戦に参加し、両人とも戦死しています。これ以後、当城は歴史を閉じ、廃城となったようです。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その七十六)

NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にちなみ、小野播磨ゆかりの人物をここの二カ月紹介してきた。肝心な人を失念していたのに気付いた。国宝・浄土寺の開祖、重源上人だ。播磨ゆかりの人物で重源ほど鎌倉殿・源頼朝に密接した人はなからう。今月は両者の関係を探る。

重源については本欄で数回紹介済みなので詳述は避ける。源平合戦(1180年)のおり、戦火で焼失した奈良・東大寺を再建した傑出した僧侶で、再建の財政基盤の一つが大部荘、信仰の基盤の一つが浄土寺とだけ述べておく。

さて頼朝との関係だが、東大寺再建に関わるもので、一言でいうと同寺再建の最大のスポンサーが頼朝だった。接近を図ったのは重源からのよう、朝廷から同寺再建の「勸進」を任されたが、諸般の事情から事業は遅々として進まなかった。

そこで鎌倉に武家政権を樹立しようとしていた頼朝に援助を願う書状を

て援助を再建する頼朝からの多大な援助を重源上人、東大寺を再建

送った。この返信と見られる東大寺宛の頼朝書状(1185年3月7日付)が伝わっている。頼朝は米1万石、砂金1千両、上絹1千疋を寄進している。頼朝らの助力によりまず同年8月、大



写真は、浄土寺所蔵の重源上人坐像(国の重要文化財)。好古館の「知られざる浄土寺の至宝」展図録より転載

仏の開眼供養が実現した。

続く大仏殿の建立にも頼朝の助力を請うている。重源は鎌倉まで下り、頼朝に対面したこともあったようだ。1188年3月にも奉加を請う書状を出し、その返書と見られる頼朝書状では、朝廷にも協力を求めていること、再建

用の材木の運搬に便宜を図ること、財源である周防国の運営にも配慮し、「東大寺のことはいささかも粗略にしない」と約束している。

1195年3月12日、悲願の大仏殿落慶供養が営まれる。このとき頼朝は数万の軍勢を率いて上洛した。朝廷、公家から社寺、武家、庶民に至るまで都や西国の人々に自らの武威を誇るためであろう。軍勢にはあの梶原景時も含まれていた。

供養の翌日、頼朝は重源に会おうとしたが、重源は姿を消し、高野山に籠もった。私の大学の先輩で、中世史家の高橋昌明・神戸大名学教授は「(武威丸出しの)供養会のやり方を快く思わなかったであろう」と推察している(『都鄙大乱―「源平合戦」の真実』2021年刊)。

私も先輩の見方を受け入れつつ、重源は頼朝の助力に感謝しながらも、仏法が軍事政権である鎌倉幕府に取り込まれるのを避けようとしたと考える。

重源のおかげで小野市は国宝・浄土寺、国宝・阿弥陀三尊立像という全国に誇れる文化財を持つことができた。重源は大河ドラマに登場するのだろうか。

佐野允彦さまのまさひこ：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

藤の森(檜山町)



神戸電鉄市場駅南方の線路脇にある小さな祠で、かつては檜の古木があり、その古木に藤がからみついて茂っていたことから「藤の森」と呼ばれるようになったそうです。

祭神は、大化の改新(645年)で活躍した藤原鎌足と、社町(加東市)の三草池で大蛇を退治したという藤原三郎太夫となっています。

かつては「烏の鳴かぬ間」という行事も行われていたそうです。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会・観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。



温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その七十八)

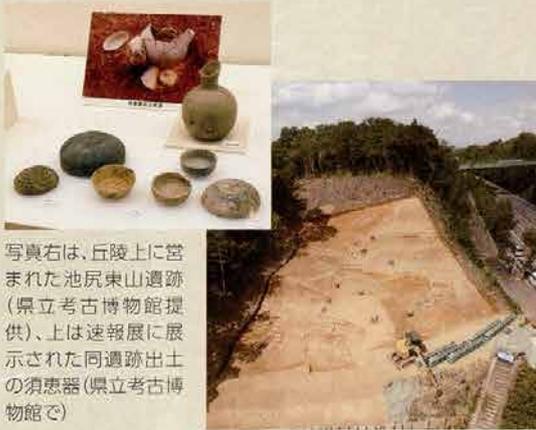
70代半ばになりニュースセンスが鈍ってしまっただのか、昨秋、小野市内ですごい遺跡の発掘調査が行われていたのを数カ月も知らなかった。池尻町の池尻東山遺跡。今夏、県立考古博物館(播磨町)の「ひょうご発掘調査速報―五国の逸品」展でも取り上げられたのを機会に勉強してみた。

まず考古博物館に向く。展示会場の一面に同遺跡の紹介があり、説明パネルと出土品が展示されている。説明文を読む。「加古川東岸、小野台地の西端に発達する丘陵の南側斜面に立地」「古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて斜面を大規模に切り盛り」「(斜面の)平坦面に建物跡、焼土等が見つかった」「遺物は鉄器など」の記述が目立った。いったいどういう遺跡なのか。

発掘調査を担当した県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の稲本悠一さん(26)に話を聞いた。遺跡は東播磨道の建設に伴う調査(去年7月から10月まで)で新発見された。調査範

囲は約850平方メートル。平坦面は上・中・下の三段に造成され、そこに方形の竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡2棟以上が見つかった。竪穴建物跡には床面が赤く硬く焼けた箇所(焼土)が延べ

か？ 丘陵上の鍛冶集落か？ 新発見の池尻東山遺跡



写真右は、丘陵上に営まれた池尻東山遺跡(県立考古博物館提供)。上は速報展に展示された同遺跡出土の須恵器(県立考古博物館)

10力以上検出された。

さて、この焼土が問題だ。継続的に何度も高温の火を受けられないとできないので、炉跡の可能性が浮上する。ふつうの住居跡で調理時に火をたくかまどに伴うものもある。だが、稲本さんは「鉄鍛冶など鉄製品の加工に伴う炉

の可能性もある」と推察している。関連遺物で鉄器(刀子など)3点が出土しているのを目を引く。

ただし、稲本さんは「鍛冶工房の集落」と断定するには慎重な姿勢を崩さない。私のように何かと話を面白くしたい元新聞記者としては、この遺跡が丘陵上の鍛冶工房集落であってほしいと思う。

一般の集落なら水利や日常生活上不便な丘陵斜面を大規模造成までして営む必要はない。丘陵上なら鍛冶作業のための火力保持に必要な風通しが良い。一般集落の人目を避けられ、出火の際、延焼・類焼も防げる。ここに丘陵上に工房を営む必然性があった。

遺跡の年代は西暦でいうと6世紀後半から7世紀初めという。これで私の夢想はさらに広がる。ほぼ同時期の三木市志染町の古墳「窟屋1号墳」で大和・忍海地域と同じ鉄釘が出土していること。忍海は渡来系鍛冶工人、「韓鍛冶」も含む忍海部の本拠地。そこから志染谷への移住が推察される。さらにその一派が池尻東山に転住した可能性はないか。「夏の夜の夢」をしばらく見続けたい。

佐野允彦(さのまさひこ)……元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

寺井堰(古川町)



喜多町の北西、東条川が加古川に合流する地点より、少し上手にあった井堰です。

この井堰は、鎌倉時代に浄土寺を建立した重源上人が、寺領地である大部荘の用水を確保するために構築したと言われています。近世文書によれば、対岸の河合中町にあった「蓬萊野」で芝を打ち、土俵に詰め、この土俵を横に並べて堰を作ったようで、昭和初期までこの方法が続けられました。昭和37年の東条ダムの完成などにより、水利状況が変化し、現在はコンクリートの堰を残すのみとなりました。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その七十九)

日本人がもっとも敬愛する歴史上の

人物と言えば、まず挙げられるのは聖徳太子(574〜622年)ではな

らうか。去年から今年にかけて太子ゆかりの寺院では1400年大遠忌が盛

大に営まれている。ところが、私の住まいの神戸市、勤務地の

小野市とその周辺では、大遠忌の幟やポスターをほとんど見掛けない。

これは一体どういうことなのだろうか。今月はこのなぜについて考えたい。

取材を始めてまず市内に太子開基と伝える寺が1寺もないということに驚いた。ただ1カ所、

来住町にある養父寺がもとは太子が創建した福聚山東明寺とい

う寺だったとの伝承を知った。

『加東郡誌』(大正12年刊)によれば、この地に行啓された太子が薬師如来を祀り、大伽藍を建立したという。広大な

な寺域を誇ったようだが、やがて衰微し、江戸前期の1678年に姫路城主、

本多政武が再建し、現寺名に改称した

ようだ。

なお、『加東郡誌』には「工業上の

習慣」中に「太子講」の項目があり、「職人は何れも太子様を職業上の先祖として之を祭る」と紹介されている。肝心

な

習

慣

中

に

「

太

子

講

」

の

祀るお堂はわずか2カ所という回答だった。これには驚いた。

このデータは好古館による市内のお堂の悉皆調査(昨年11月〜今年2月)の成果に基づく。市内88カ所のお堂を

市民多数の協力を得て調査したのだ。

官民協力の素晴らしい活動だ。その結果、仏像529体のうち5分の1ほどの108体が弘法大師像だった。次いで

西国33カ所観音像98体、3位が十二神将像だった。

データを概観すると、弘法大師像がダントツに多く、聖徳太子像がまるで

少ない。これは私の想像でしかないが、往古は他の地域と同様、小野でも太子

信仰が盛んだったろう。それが中世以降、名前が似ていることなどから太子

(タイシ・聖徳)信仰と大師(ダイシ・弘法)信仰が混同、混交していく。や

がてタイシ信仰がダイシ信仰に変容していった。

近年に至っては「聖徳太子はいなかった」という言説も広まっている。かつて

の日本史上の大偉人も今や影が薄い。私の若いころ、聖徳太子像のお札が1

枚あれば、随分懐かしく感じたものだったが。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策委員。

いせ 薄寄 ぜに 信仰、なぜ 太子 1400年 遠忌



写真上は、もとは聖徳太子創建と伝える養父寺=来住町で。左は、太子の画像をあしらった旧1万円。



市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

旧道南の道標(浄谷町)

ハナミズキ街道と南池の交差点陸橋下に建つ高さ約1・3メートルの道標です。元は南池の北西に建っていました。西面には「文化七庚午四月吉日 黒川村

西国供養 同行十二人」と刻まれており、文化7(1810)年に、西国巡礼に出掛けた黒川村の人達によって、造立されたことが分かります。

他の三面については、東面「右浄土寺」、南面「右 きよ水」、北面「左

あ可石(明石)」と、地名や寺院名が刻まれています。

「おのふるさと散歩」(8000円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

# 温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

## おの歴史散歩余話(その八十)

10月号の本欄で聖徳太子信仰から  
んで、好古館による市内のお堂の悉皆  
調査の成果の一端を紹介した。今その  
速報展として年号などが記された仏像・  
仏具類をピックアップした特別展が開か  
れている。小野における江戸時  
代の町や村の人々の信仰の様子  
を知ることができる興味深い内  
容だ。見学に訪れた。

まず入り口近くに飾られてい  
る両界曼荼羅図の掛け軸が目  
を引いた。大日如来を中心に密教  
の教理を絵画化したなかなかの  
大幅で、彩色も鮮やかに残り、  
大切に伝えられてきたことがう  
かがえる。大部地区の観音堂の  
もので、箱書に「元文四(17  
39)年」と村名・寺名のほか、

施主として村人らしい18人の名が記さ  
れている。

悉皆調査で弘法大師像が多かったと  
前号で書いた。本展でも大師像が3点  
展示されている。大部地区の大師坐像  
は「今も毎月お参りしている人が多く、  
ご本尊がお堂を留守にできない」との

お堂 88 棟に仏像 5 2 9 体  
庶民信仰の厚さに驚く



▲閻魔の赤い顔などが目立つ「地獄極楽図掛軸」(一部)  
=好古館提供=

理由で写真での出展だが、その理由自  
体に地元の人々の信仰の厚さが読みとれ  
て興味深い。台座裏に「寛文13(16  
73)年」とある。  
もう一つは下東条地区のお堂の掛け

軸の大師像で、文化13(1816)年  
のもの。納められた木箱には、「小野町  
黒川屋久兵衛」なる人が「京仕立」の  
掛け軸購入を取り次ぎ、代金が銀十  
匁(約1万7千円)だったことが墨書  
されている。黒川屋は現在の小野商店  
街に店を構えていた老舗と見られる。

速報展のチラシにも使われている小  
野地区の「地獄極楽図掛軸」も見も  
のだ。江戸末期のものだが、色彩豊か。  
特に閻魔大王の赤い顔、地獄の窯の赤  
い炎、赤鬼や火車などの赤色が目を引  
き、地獄の恐ろしさが伝わってくる。

調査を担当した好古館の粕谷修一  
副館長は「お堂には仏像、仏具のほか  
いろんな古い資料が残っていて、村の歴  
史を伝えるタイムカプセルみたいだっ  
た」と総括。「地域の人たちが代々大  
切に守り伝えてきたのがよく分かった。  
厨子に納められていて秘仏扱いされて  
いる像も開けてみたが、合掌、礼拝し  
てから作業した」と裏話も披露してく  
れた。

中にはいずれ市の指定文化財になり  
そうなものも数点あるとか。この特別  
展は12月4日まで。27日午後1時半か  
ら展示説明会もある。見るなら今です。  
見ないとぶつぞう!

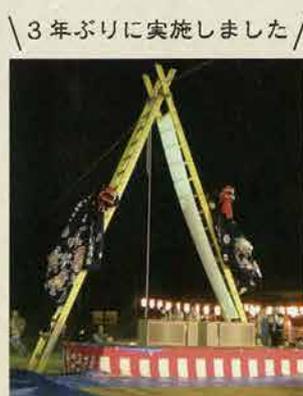
なお、前月分のコラム出稿を終えた  
後(9月下旬)、播磨の郷土雑誌「B  
anCu」秋号が「聖徳太子と播磨」  
の大病集を掲載していることを知った。  
多彩、かつ充実した誌面で、この秋お  
薦めの一冊だ。

佐野允彦(さのまさひこ)元朝日新聞記者。  
平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

## おのふるさと散歩 特別編

### 西脇獅子舞(西脇町)



谷渡りの舞(10月10日撮影)

3年ぶりに実施しました/

西脇獅子舞は、氏神である若一神  
社(阿形町)の神事として、毎年10月に  
行われています。言い伝えによると、村  
内に流行した疫病退散を祈ったもの  
と伝えられています。起源は定かでは  
ありませんが、長胴太鼓に刻まれてい  
る「文化6(1809)年」の年号から、  
少なくとも200年以上の歴史を有  
していることが分かります。

演目は全部で13種類。中でも6歳の  
はしこの両方から獅子が登り、頂上で  
交差して降りてくる「谷渡りの舞」は  
圧巻です。西脇獅子舞は、平成14年  
に市の文化財に指定されています。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市  
観光協会観光交流推進課内、好古館、伝統  
産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その八十一)

12月ともなると冬本番。昭和レトロなら「かまどの火が恋しい」というころだ。そこで少々無茶ぶりだが、「カマド塚」という特異な古墳が小野、加東両市域に点在していることを思い出した。今月はカマド塚を探る。

私がカマド塚なる古墳を最初に知ったのは、まだ若手記者だった1985年ごろ、大学時代の恩師、森浩一先生(当時、同大教授)が企画された「日本の古代遺跡」シリーズの一つ「兵庫南部」(保育社)によつてだ。著者は榎本誠一・松下勝両氏で、「加古川流域の遺跡」の章に「カマド塚」の項目を設け、小野市・中番古墳群の2基と加東市・名草古墳群の2基を火葬された古墳と紹介していた。

小野、加東に特異なカマド塚 須恵器生産集団と関連か?



写真右は、中番18号墳の焼け跡が残る埋葬部(好古館提供)、上は、木組みの様子がわかる名草3号墳の復元図(加東市教委提供)

でカマド状のものをつくり、埋葬後に燃やしたものだ。北播磨では6世紀後半ごろから出現する。補足すると、木組みによって横穴式木室を構築し、遺体を納めて墓室ぐるみ燃焼させる(火

化)という特徴を持つ。

次いで昨春・夏の同館企画展「古墳礼讃」。カマド塚の説明もあったような? とすると好古館に尋ねるほかない。展示パネルの文面を見せてもらった

が、「カマド塚の新発見」は私の誤読で、須恵器の窯跡が新発見されたというの

が正解だった。古墳展を担当した学芸員の山本原也さんによると、福住町にある立会池窯跡で、平成25年に池堤の改修工事の際、見つかったものという。操業時期は7世紀前半で、出土の須恵器は中番古墳群のものと似ているという。

ここから山本さんの推察が進む。横穴式石室墳が多い地域で木室墳にしてさらに火葬にするというのは、特別な理由があったはず。カマド塚が須恵器の生産地に多いことと照らし合わせると、須恵器生産集団がカマド塚造営と関係するとみられるという。

確かにカマド塚と須恵器工人と結びつける見解は早くからあった。森先生はその代表格だった。

ここまで書いてきて我が家の書棚にカマド塚をテーマにした論文があったのを感じ出した。「季刊考古学」の別冊16「東海の古墳風景」(2008年)所収の論考「東海の横穴式木室と葬送」(田村隆太郎)だ。そこでは「火化」の類例の多い和泉・摂津・播磨の地域を重視すべきと指摘する。播磨の研究者たちがカマド塚の研究熱を燃え立たせるよう期待したい。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩

小田城跡(小田町)



「豊地城」の復元イメージを元に設計されたコミレス「誉田の館いんどり」(福住町)から撮影。

誉田の館いんどりでは「豊地城」の御城印を販売中!



県道小野藍本線脇にある中世城郭で県道から登り道が北へ延びています。城主は、嘉吉の乱の時、赤松氏に殉じて自害した依藤太郎左衛門の居城として有名です。しかし、当城は一つの独立した城ではなく、中谷町の豊地城の支城としてその役割を果たしていたと考えられます。

なお、当城西方下の水田でも、堀・土塁・建物跡などが検出され、当城の城域が城のある丘陵上だけでなく、西崖下にも広がっており、ここが軍兵の日常生活の場となっていたことが推測されます。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会(観光交流推進課内)、好古館、伝統産業会館で販売しています。

温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(その八十二)

毎年正月の本欄は、その年の干支をテーマにしてきた。初年は2011年で、小野藩特産の薬「兎血丸」のこなどを書いた。それから干支が一巡したことになる。2巡目の卯年のネタを探していて、第6代日銀総裁、

松尾臣善が1843年の卯年生まれなのを思い出した。総裁就任は明治36年だから、ちょうど就任120年の節目に当たる。昨秋来、未曾有の円安で日銀の存在が注目されている昨今、松尾に再度スポットを当てるのもおもしろかろう。

見出しに旧阿形村出身と書いたが、厳密に言うと生家は加西郡賀茂村(現加西市)西横田の郷土、中根家だ。そこから

阿形村の松尾家に養子に入った。今回の紹介記事は西横田出身の吉田栄子さん(73)の研究レポートに拠るところが多い。吉田さんは同郷ということ、さらに若いころ銀行員という縁もあり、松尾に興味を抱き、いなみ野学園(加古川市)の高齢者大学院で2年が

旧阿形村出身の第6代日銀総裁、松尾臣善は1843年卯年生まれ



写真右下は、松尾家の檀那寺、大龍寺。左上は山水荘の玄関屋根に乗る兎の飾り(いずれも阿形町で)

かりで研究、一昨年修了レポートにとめた。本レポートの特筆すべき点は、地縁の強みを生かし、これまで一般には知られていなかった地域史料(資料)を発掘したことだ。

まず松尾家の檀那寺は阿形町の大龍寺で、位牌があり、供養しているとのこと。私は初めて訪ねたが、境内の喜捨芳名録の石碑に筆頭で松尾の名があった。松尾の別邸(現在は料亭「山水荘」)に保管されている天満宮の勸請記も明らかにした。

松尾の実家、中根家の檀那寺は加西市の妙典寺で、そこには寄贈した大梵鐘と鐘楼堂が現存し、「寄付之事」という額も保存されている。中根家の墓地に松尾の墓碑があることも突き止めた。墓碑の篆額は娘婿の医学博士、有名な北里柴三郎によるものだった。このほか松尾、中根両家の子孫、縁戚もたどって新たな資料を紹介している。まさに足で稼いだ労作だ。

私事で恐縮だが、吉田さんはレポート執筆に当たり、本コラムで松尾を紹介した私にも取材にみえた。私が力説して紹介したのは、若き日の松尾の名が『五代友厚伝記資料』にあり、原史料が神戸市立中央図書館に所蔵されていることだ。名前はまた「松尾寅之助」だ。新政府にとつての一大外交問題「神戸事件」にかかわる史料でもある。吉田さんはわざわざ同図書館へも出向き、この史料の写真をレポートに収録した。吉田さんのレポートは出色の出来で、その後加西市民会館で市民を対象に発表されたそう。松尾の認知度はまだそれほど高くない。生誕180年の今年、ぜひ小野市でも発表していただきたいものだ。

佐野允彦(さのまさひこ)：元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

市内の史跡などを紹介

おのふるさと散歩 特別編

ハナフリ・ゴツキ行事(黍田町)



令和4年9月に第1回目の兵庫県登録無形民俗文化財に登録されました。

黍田町では、その年の豊作と1年間の村の安全を祈願して「黍田のハナフリ・ゴツキ(牛撞き)行事」を毎年1月3日に行っています。

ハナフリは町内の大歳神社に区長・町役員・住民が集まり、稲わらと根付き松を水引で括ったツトを左右に振りまします。その後、毘沙門堂に移動し、30程の木にお札を結んだゴでお堂を叩くゴツキが行われます。

黍田町に伝わる「当番勤務帳」には元文2(1737)年からの当人(行事の当番)の人名が記されていて、この行事が江戸時代中期には行われていたことが確認できます。

「おのふるさと散歩」(800円・税込)は、市観光協会観光推進課内、好古館、伝統産業会館で販売しています。



温故知新

広報アドバイザー

佐野允彦の

おの歴史散歩余話(最終回)

この歴史コラム下欄の告知にあるように本コラムは今月号で一旦終了します。最後に勝手ながら富山県高岡市にある私の実家、佐野家の話をいたします。一応、好古館で開催中の企画展「昭和のくらし②レトログッズ大集合」に合わせました。

グッズとは言えないだろうが、佐野家にお菓子の宣伝馬車がやってきた。1951(昭和26)年10月のこと。佐野家は当時、菓子問屋を営んでいた。馬車はのぼり旗にあるように「インディアンキャラメル」の宣伝カーだった。

敗戦後間もない同年から53年にかけて、戦後第1次の米国映画の西部劇ブームが起きていた。大人たちは映画の、子どもたちは絵物語や漫画の西部劇に夢中になっ

た。駅馬車、幌馬車が登場し、インディアン少年が主人公の漫画もできた。そんな中でインディアンキャラメルが生まれ、北陸の小都市、高岡にもその宣伝馬車がやってきたのだらう。

馬車には羽根飾りを付けたインディ

戦後、宣伝馬車がやってきた  
高岡・佐野家の「昭和レトロ」



▲写真上は、菓子問屋前に横付けされたインディアンキャラメルの宣伝馬車。右は、佐野家所蔵のカバヤ文庫(一部)＝いずれも佐野家提供

アの格好をした人が乗っていて、チンドン屋も引き連れていた。菓子問屋の息子であった私はその役得?で馬車に乗った。馬車上の右端、男性(父)に抱かれた幼児がかくいう私(当時4

た。当然あちこちに馬糞が落ちていた。運動会の時期になるとその馬糞を足で踏む子がいた。「足が速くなる」という迷信からだった。

お菓子和車つながりでもう一つ。カバヤ食品の「カバ車」は本社が隣県の岡山市だから、小野にも来たかもしれない。1946年に創業、初商品のキャラメルは、甘い物に飢えていた子どもから大人にまで大人気となった。波に乗って全国にPRしようと1952年に登場したのがカバ車だった。私の家(菓子問屋)にも来た。車体のカバのようなざらつきの手触りはよく覚えている。

カバヤと言えばカバヤ文庫(児童文庫)。キャラメルの景品として童話などが1952年から1954年まで159冊が1週間に1冊のペースで発行され続けた(カバヤ食品HPより)。これが我が家には30冊ぐらいあった。我が家が菓子問屋で繁盛していた昭和レトロの甘い話だ。

最近、図書館の協力で俳人、坪内稔典氏の労作「カバヤ文庫の時代」を手にすることができた。興味のある方は、一読を。好古館の昭和レトロ展(5月21日まで)もお見逃しなく。

佐野允彦(さの まさひこ) 元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員。

上欄の歴史コラムは今号で  
いったん終了いたします

上欄歴史コラムの筆者、佐野允彦はこの3月末をもって小野市の広報アドバイザーを退任いたします。それに伴い、本コラムを今号で一旦終了いたします。長い間のご愛読、誠にありがとうございました。

アドバイザー退任は市長に委嘱を受けて以来、在任が十二年もの長きにわたり、自身も後期高齢者になったこと、ウェブ媒体が苦手な時代遅れの元新聞記者はこれ以上お役に立てないこと……など諸般の事由によるものです。蓬萊市長に退任をお認めいただきましたが、その際「歴史コラムだけは連載を続けてほしい」というありがたいご依頼を受けました。そもそもこの歴史コラムは蓬萊市長の発案でした。大学で日本史を専攻した自分ならではの紙面を1頁持ちたいと考えていたので、もう手を上げて賛同。2010年9月から小野の歴史、人物、文化などをテーマにしたコラムを始めました。

それが通算で150回を超える長期連載になろうとは思いませんでした。幸いにもこの間、市民の方々から「つまらん。やめろ」というお声もなく、また自治体の広報紙コンクールでは「広報紙にしては面白い連載だ」との評価をいただきました。市民の皆様には本コラムをきっかけに少しでも小野の歴史に興味を持っていただけたなら、うれしい限りです。

4月からは若干装いを新たにし、この頁全面を使ったコラムをお届けしたいと思っております。ただし、小野市域限定の題材はほぼ払拭していますので、北播、東播、さらには播磨全域にも題材を求めたいと考えています。引き続きご愛読いただければ幸いです。

(佐野允彦)